
Fortune-teller

marimo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fortune-teller

【Nコード】

N2027J

【作者名】

marimo

【あらすじ】

表題の「Fortune-teller」とは占い師のこと。占い師を目指す女の子の恋と成長の物語

・・・・:::・・・・*
・・・・:::・・・・*

占い師を目指す高校生・月野真珠が、大学生の占い師見習い・東条尚毅と出会い、悩み、つまずき、様々なことがあっても、周りに助けられながら、成長していく話です。

登場人物（前書き）

著作権はmarimoにあります。無断転載禁止です

*あらすじを考えたのがかなり前なので、時代設定が古くなっています。

*この話は、フィクションです。名称が多数出てきますが、架空のものです。占い内容や占い方法などが出てくる場面もありますが、全て作者の想像ですので、実際のものとは異なります。

サバト1（前書き）

著作権はmarimoにあります。無断転載禁止です

サバト1

「サバト」の占い師募集会場は熱気に包まれていた。あちこちで占っている。それを近くで何人かの人が見ているけれど、誰も笑いもしない。もっと、楽しくやればいいのじゃないかな、移動していた。

「えっと、どこだっけ」と言いながら、私の番号の場所を探していた。渡された紙には、相談者のことは書かれていない。時間が決まっただけで、自分で相手に聞きながら占いを進める必要があるらしいと言うことは、秋子さんから聞かされていた。彼女は「サバト」の情報をつくつか教えてくれた。日本で今、一番有名な占いの団体。代表の東条圭吾と言う人は、テレビに何度も出ているような有名占い師、日本で一番予約が取れない占い師としても有名だった。たまたまどのVIP以外は占わないと聞いている。そのため、何人もいる弟子が占いを行っているらしく、整理券を配っているくらい人気があると聞いている。母が聞いたなら怒り出しそうだ。母は昔テレビにも出てはいた。現在は雑誌に占いコーナーをいくつか持っているけれど、昔より注目されていないらしく、お客さんの数はそこまで多くない。昔、占いカフェをしていた時代もあったけれど、今はしていない。

途中で人が大勢いるところを通りかかった。若い女性が占ってもらっている。人だかりだったので、占っている人のほうは良く見えなかったけれど、若い男性のようだった。珍しいな。「サバト占い師募集」に応募している人は女性が多く、年齢もバラバラではあったけれど、若い人が目立った。そこを通り過ぎてから、

「ああ、ここだ」と座ろうとしたら、相談者役の人がもう座って待っていた。相談者役はあらかじめ応募してきた人がくじ引きで決め

られている。名前も何も知らない人を占わないといけない。制限時間が決まっているから、難しいなと思いながら、いつものように占っていた。

占い方法は自分の得意なものを披露する。中には変わったものもあるとは聞いているけれど、多くは西洋占星術やタロットに手相など、多くの人が知っている占い方を選択する。人によってはタロットに西洋占星術など一人で複数の占いをこなす人もいるけれど、私はタロットしかできない。通り過ぎながらチラッと見たら、タロットの人も多かった。タロットは大アルカナ、小アルカナのカードで占う。カードはそれぞれ名前がつけられており、それぞれ意味を持っている。その意味から解釈していき、様々なことを占う。

相手の悩み事を聞いて、占いを始める。じっくり聞きたいところだけれど、時間が少ないので、短い時間で手短に要点を抑えなくてはいけない。母の弟子である赤井秋子さん、占い師としての名前はルビームーン。彼女に母には内緒で特訓をしてもらっていた。ただ、時間がなくて、自信がつくほどは準備はできていなかった。

サバト2

相手はそれほどはきはきしゃべるわけでもなく、なんだか自信がなさそうな人だった。悩み事は将来のこと。その方面に進んでいいかどうか。親や周りの反応が怖くて言い出せないと言っていたので、「親に相談しないと何も始まらないよ」と言いながらタロットカードを出して、相手にシャッフルしてもらった。その間に、色々聞いてみた。相手が望んでいる職業を聞いたら、意外にも、「テレビに出たいです」と言ったので、さすがに驚いた。どう見ても、テレビ向きの性格をしていない。

「え、でも」と考えてから、さすがに思ったことを口にできなかったので、

「どういう形で？」と聞いた。

「えっと、何でも、でも、できれば歌手か、女優になりたくて」

「歌手か女優？」はつきりしないなあ。どちらか決めてないのか。

「どちらが希望？」

「えっと、有名になれるなら、それで」うーん、困った。時々、母や秋さんの相談相手もこういうことを言う。願い事が漠然としすぎている。夢を叶えるにしろ、本人も良くわかっていない状態だった。私もそういう職業にあこがれた時期はあった。芸能人の話やテレビ業界の話をするのが大好きな友達が何人かいたので、この人も同じかなと思った。年齢は私とそれほど離れていなさそうだ。

「今、いくつ？」

「え？」相手が緊張していて聞こえてないのかな？と思い、

「年齢は？」

「えっと、16です」

「オーディションとかは受けてるの？」友達が何人か遊び感覚でオーディションに応募していた。その話を思い出して、ふと聞いてみ

た。

「えっと、まだ」うーん、あまり良く知らない業界の話なので、困ってしまった。恋愛相談のシュミレーションはいくつか、秋さんに教えてもらったけど、まさか、こういうことを聞かれるとは。一番苦手な相談事だなあ。

「とにかく、占ってみましょうか」最初誰もそばにいなかったのに、いつの間にか誰か後ろにいたけれど、気にしないことにした。占うときは集中力を使うからだ。

「今の気持ち。漠然としてる。まだまだ、迷いが多い。周りの人の反応。話は聞いてくれるけど、応援してくれる人はまだいない状態。親のほうは、あ、駄目だ」と言ってしまったから、ああ、こういう言葉遣いはしてはいけないんだったと思い出した。友達にせがまれて、何度も占っている。普段の言葉遣いはお客様用ではないので、もっと丁寧にするようには注意を受けただけれど、中々直らなかった。

「親はね。あなたの希望をことごとく反対するよ」と言った途端、相手が元気がなくなった。正直に言わないほうが良かったかも。

「ああ、でも、地道に頑張れば、それなりに道は開けるかもしれない。あ、でも」と言ってから、迷ってしまった。いくつかの注意点を挙げて、出たカードの言葉を伝えた後、

「この願いがかなう可能性は20パーセント未満」と言った途端、周りが少しざわめいたので、そちらを見たら、審査をしている人が何かを書き入れているところで、そのすぐ横で、

「下手な人ね。あなたと大違いね」と言った若い女性がいて、隣にいた背の高い男性を見上げていた。見たところ恋人同士なんだろうなと思ったけれど、相手が私の顔を見た後、少し笑った。小ばかにしている雰囲気だったので、気に入らなかったけれど、

「あなたの願いを叶えるには、かなりの障害がある。どちらに進むかはあなたの気持ちしだいだよ」と付け足したら、

「そうですか」とうなだれていた。失敗したかもしれないと後悔した。

サバト3

発表が行われていて、周りが騒いでいた。絶対に入りたいという人が多く、少しでも前に出たいのか押し合っていたけれど、私はその後ろで、なんだか疲れてしまった。

「余裕だね」と女の子の声が聞こえた。そちらを見たら、さっきのカップルだった。なんだかそばにいたくなって離れようとしたら、「結果を聞かなくてもいいのか」と言う声が聞こえて見たら、かつこつけた態度のさっきの背の高い男がこちらを見ていた。

「悪くなかったけど、言葉遣いは悪いし、相手とのやり取りもお粗末。ここに来れるレベルじゃないね」と言われて、思わずにらんだ。「あなたねえ」

「失礼な子ね。あなたにそういう態度をしてね。ねえ、あなたの正体知ってたら、そんな態度取れないわよねえ」相手の女の子の態度を見て、怒りたかったけど、さすがに場所を考えて我慢した。

「ねえ、尚毅なほき」甘えるように女の子が聞いて。

「受かるのは尚毅だけよ」

「どうして？」

「だって、尚毅は東条圭吾の息子だものね」

「やめろ」尚毅と呼ばれた人は止めていたけれど、

「ふーん」と見てから、そこから逃げ出した。親のコネで受かる人とは関わりたくなかった。そういう人は苦手。違うクラスの子が親が有力者だから、PTA会長をしているからと言う理由で、何かと威張っている。でも、綺麗な子だから、周りはちやほやしている。そういう雰囲気は苦手で、わたしはそばに寄っていない。私のことと呼び出して占いをさせようとした。命令口調で言われたために、嫌でしょうがなくて、そんな気持ちでは占えるはずもなく逃げ出したけれど、後で、「この私を占える自信がないからよ」と言っていたらしい。「何様のつもりなんだろう」と友達が怒ってくれた

けれど、私はそれより近寄りたくもなかった。その雰囲気になんとか
りのさっきの男は一番苦手な男だ。有名占い師の息子だからなんだか
知らないけど、今後、二度と会わないことを願おうと思った。

サバト4

「落ち込む」友達の怜奈ちゃんに笑われた。

「多分、無理だと言われてたんでしょ」秋さんにそう忠告はされていた。それぐらい、入る人数は少ない。毎年、一人か二人。その一人がああ嫌味な男だと思うと面白くない。親のコネ男。

「いいじゃないの。どうせ、世の中そんなものだって。親のコネ、有力者とのつながり。有名大学に進学したって、そこでもコネだって。いとこの医学生が言ってたよ」

「雪人さんは違うもの」

「はいはい、あこがれの大学生でしょ。はやくデートに誘いなさいよ」

「無理だよ。勉強でいそがしそうで」

「それでもデートはできるでしょ。それだから進展しないのよ。自分から行かないと」

「でも、真面目な人だから、どう誘ったらいいか」

「迷っているうちに卒業しちゃうよ」

「そう言われても」

「ちゃんと告白しないとね。好きだったら」

「言えないよ」

「男子の友達だって何人かいるでしょ。それと同じよ。みんな、かぼちゃかジャガイモと思えば緊張しないよ」

「怜奈ちゃん。かわいい顔をしてそういうことを言わないで」怜奈ちゃんはかわいいのでモテるけど、実態を知られるとうまくいかなくなる。

「いいなあ、恋愛遍歴が派手で」

「それはしょうがないって、真珠は誘えない」

「どうして？」

「見透かされそうで怖いってさ。男子が言ってた」

「なんで？」

「抜け抜けな性格なのに、妙に勘がいいから。しかも占い師の娘。それで、さすがに誘えないって。浮気がバレるだろうしってさ」

「抜け抜けの性格って何よ」と言い合っていたら、神宮寺に背中を叩かれて、

「遅刻するなよ」と言われて、先に歩いて行ってしまった。

「痛いなあ。あいつ、乱暴」

「気があるみたいだよ。そう聞いたから」

「まさかあ」

「真珠はそういうのを信じないねえ。ガードが固い」

「固くない」

「好きな人にはガードを低くしておくものだよ。それ以外は高めに設定」

「そんなに器用なことはいできない」

「全部に低くしてたら、変なのまで来ちゃうからね」

「かわいいからって、余裕だね」

「いいじゃない。本当のことだし」怜奈ちゃんはさっぱりしてるけど、はつきり言ってしまうところがある。

「あいつ、A組のかわいい子と付き合ってたじゃない」

「短期だね」

「振られたんだ？」

「逆。振ったらしいよ」

「もったいない」

「いいじゃない、付き合っちゃえば」

「何で、そう安易に薦めてくるの？」

「免疫つけてから本命に行くのも悪くないと思うよ。いきなり本命だと緊張しすぎて失敗しそくに思えるんだよね。真珠の場合」

「そう言われても」

「真珠って、結構ドジだし、鈍いところもあるしねえ。それだと男に幻滅されるよ。だから、慣れておかないと。一回目のデートの印

象で決まるんだからね」

「え、そうなの？」

「これだから、デートしたこともない子は困るね。中学のときに免疫をつけておけば良かったね」

「そう言われても」

「数こなせば、本命のときに楽だよ」

「怜奈ちゃん。こなれすぎ」

「その分だと、まだまだ先になりそうだね」

「なにが？」

「恋愛成就。人のことを占ってる場合じゃないでしょ」

「そう言われてもねえ」

「第一希望に振られたからって、次を探せばいいでしょ」

「第一希望？」

「就職先」

「違うよ。修行先。知り合いの占い師の子供があそこを受けるって聞いたから、行ってみただけ。受かると思ってなかったし。でも、厳しかった。みんな、上手だった」

「感心してる場合じゃないでしょ。高校卒業したら、占い師として身を立てるんですよ」

「そこまでは。ただ、みんなに向いてるって言われたし」

「安易だね。自分で決めたんじゃないの？」

「成績だって、いまいちだしねえ。進学するにはお金がなさそうなんだよね、うち」

「占い師って、よほどもうからないんだ？」

「ピンきりらしいよ。儲かる人もいれば、貧乏な人もいるって」

「真珠のお母さんって、そこそ売れてるんですよ」

「ちよっと前までね。東条圭吾がテレビに出だしてから、お客が減ったとばやいていたから」

「私も名前を知ってるぐらいだしねえ。クラスメイトも何人かあそこ遊びに行ったらしいよ」

「占いは遊びじゃないよ」

「それぐらい気楽に行ってるってことでしょ」

「でもねえ」

「どうして落ちたのかは考えておいたほうがいいよ。それから、新しい就職先を決めたら」

「修行先だつてば」と言いながらためいきをついた。

落ちた理由1（前書き）

* あらすじを考えたのがかなり前なので、時代設定が古くなっています。

* この話は、フィクションです。名称が多数出てきますが、架空のものです。占い内容や占い方法などが出てくる場面もありますが、全て作者の想像ですので、実際のものとは異なります。

落ちた理由1

秋子さんに教えてもらった占い専門店「ルーカス」で、本を調べていた。すっかりなじみになっているため、

「何を調べてるんだ？」店のおじさんに聞かれた。おじさんは趣味が高じて、こうやって占い関係のお店を開いているけれど、元々は違う職業だったらしくて、占いは好きだけど、占い師をしていたわけじゃなく、見習いの私のことも心配してくれていた。今日、来た理由を教えたら、

「あそこは難しいだろうねえ。何人が受けた人の話は聞いたよ。受かった人は女性が多いそうだ」

「女性？」

「そう、しかも美人でかわいい子だそうだ。若い人が多いと聞いているよ」完全に自分の趣味じゃない。そう考えていたら、お店に誰か入って来た。

「あ？」と思わず声が出た。その声に気づいて、相手がこちらを見た。

「何だ、お前か」お前呼ばわりされて、むっとなり。

「コネ合格者が何か言ってる」とつい、言ってしまったら、

「コネじゃない。実力だ」

「ふーん、女性が多い職場に今年は男性が一人だけ合格って、コネでしょ」

「誤解だ。俺は実力で合格したんだよ」

「嘘ばかり。コネで就職して、そうやって女性と知り合う機会を増やそうとして」この間とは違う女性が隣にいたので、つい、そう言ってしまった。今度もなれなれしい態度でそばに寄り添っていて、どう見ても恋人同士に見えた。いったい、何人の女と付き合ってるか分かったものじゃないな。学校にいる、評判が両極端の男子、大村君を思い出した。彼は女に手が早くて有名だった。ポイ捨てばか

りしているために、私はあまり好きじゃなかった。

「逆だ」逆？「何が、逆よ」と言いたかったけれど、関わりたくなくて、

「話しかけないで」とおじさんのほうに顔を戻した。

「あそこに合格しなくて良かった。こんなやつと顔を合わせなくて済んだから」

「お前では無理」勝手に口を挟んできて、相手にしたくなくて無視していたら、

「真珠ちゃん、この人？」おじさんに聞かれて、

「東条圭吾の息子。サバトのコネ合格者」

「コネじゃない」と言い合っていたら、

「失礼な人ねえ。ほつといて行きましようよ」そばの女性が甘えていて、

「ああ、あの有名な人か」おじさんはごく普通にしていた。

「お前、自分が落ちたからって、おれにやっかむな」

「そんな理由じゃない。あなたみたいな人が嫌いなだけ」

「表面だけ見る女だから落ちるんだよ」

「あなただって、同じでしょ」

「俺の占いしていたところは見てないだろ」

「軽く見た」多分、人だかりになっていたところだろうと検討をつけてそう言った。そこまで確信はなかった。

「見てないな。そばにいなかったはずだから」

「何で知ってるのよ？」

「商売柄、顔を覚えるのは基本」

「ふーん」

「お前が落ちた理由、教えてやろうか」

「何が分かるっていうのよ」

「お前は基本が全部なってない」

「基本って？」

「接客態度がまず駄目。言葉遣いが丁寧じゃない。ため口で話してどうするんだよ。友達じゃないんだしね。それから、相手のことが全然分かってないな。あれじゃあ、氣落ちして帰ってしまう。だから、落ちた」自分でも落ち込んでいたのに、こいつに指摘されて面白くなくて、

「ふん」と横を向いた。

「相手の立場も分かってないし、望みも分かってない。しかも、世間知らずもいいところ。相手に見当違いな事を聞いて、どうするんだよ」自分でもそこは未熟だったなと反省はしていたけれど、こいつにだけは言われたくなかったので、

「あ、そう」とそっけなく横を向いていた。

「最後のもおかしいだろ。何が20パーセントだ。他の占い師は誰もそんな結果は言わないぞ。数字で表せるような内容じゃなかった」
「だって、それはそう思ったから」

「思った？」

「カードじゃなくて、彼女を見て、そう思ったの」と言ったら、相手が黙った。

「相談者を見てそう思ったんだから、いいじゃない。カード結果をどう膨らませるか、占い師が考えることでしょう」

「経験不足のお前には言われたくないな。もっと、よく考えろよ。あれでは合格基準が90だとすると、20も行けばいいところだ。あれで、よく受ける気になったよな」

「コネの人に言われたくない」

「コネじゃないさ。しょうがないな。教えてやるよ。お前の未熟さをね」と言われて、驚いていたら、いきなり腕をつかんできて、
「行くぞ」と言ったので、

「え、わたしは？」隣にいた女性が怒り出して、

「悪いけど、また、連絡するよ。急用ができたから」優しく声をかけていた。二重人格に違いないと思った。

落ちた理由2

「どこに行くのよ」車に乗せられてから、聞いた。

「付いてくればわかる」

「女性受けしそうな車」思わず言ったら、

「あいにく、こういうのを乗るように親に言われているからね。それで、これ」占い師なのに高い車に乗っているのが面白くなって、

「ふーん、庶民から搾り取ったお金で乗ってるんだ」

「お前は相当に俺を誤解してる」

「さっきの女性は良かったの？ 恋人なんですよ」

「違う。一度、食事をしようと誘われて、一緒にいただけ」とそっけなかった。

「冷たい言い方ね。あつちはうれしそうだったのに。まさかと思うけど、この間の人も恋人の一人なの？」

「ああ、彼女は見学したいって言うから、仕方なくね」その言葉もそっけなかった。

「相手の女性が傷つきそう」

「そうでもないさ。ああいう人は別の人ができたら、そちらに行ってしまうから」

「ふーん、冷めてるんだ」

「別に」

「占い師より、ナンパ師になったほうがいいね」

「女性心理を勉強するには必要な課程だ」

「は？」

「お前も付き合ったほうがいいぞ。ああ、無理か。お前の場合は今まで彼氏がいなかったタイプに見えるから」

「勝手に決め付けないでよ」

「じゃあ、いたのか？」

「い、いないけど、それがどうしたのよ」

「ほらな。ただ、言い返すだけ。世間知らずもいいところだ。ちゃんと世間を知ってから、俺のことを言えよ。お前は何も分かってないからな」

「あなた、いくつよ」

「大学生だよ。21」

「ふーん、年寄り」

「ガキが何か言ってるよな」

「失礼ねえ、これでも17歳よ」

「まだまだだよな」

「うるさいわねえ。いい就職先が決まって良かったわね、せいぜい、いっぱい女性と付き合って、遊べばいいんじゃないの。この車ならいくらでも寄ってきそう」値段は分からないけれど、青い外国の車で、高いんだろうなってことは内装を見たら分かる。母が乗っている庶民の車とは大違いだった。占い師として成功するとかこういうのにも乗れるんだなと驚いたけれど、正直、面白くなかった。

「遊びじゃないさ。資料集め」と訳の分からないことを言っていたけれど、目的地に着いて、駐車場で警備員に止められて、相手に色々説明をしていた。

「何で、テレビ局？」中に入ってから聞いた。駐車場では父親の名前を出して、電話で誰かに連絡を取って入れてもらっていた。

「コネって、すごいね」

「テレビ局に来たことはないのか？」

「ない」

「スタジオ観覧ぐらいしておけよ。占い師を目指すならね」

「どうしてよ」

「占いにやってくる女子高生の悩みに『芸能人になりたい』って言うのは、結構多いからな。知っておいたほうが何かといいさ。それでよく占い師になるつもりでいるな。友達にでも聞けよ。業界の話でも、現実を知ったほうがいいし」

「現実？」と聞き返した。

東条さんが知り合いのテレビ局の人に挨拶して、見学したいことを告げて、その後、二人で歩いていった。あちこちで知った顔がいた。有名な歌手やグラビアアイドルにお笑い芸人。頭をぺこぺこ下げていたり、誰か有力者が来たら、慌てて、

「わあ、さん」と声のトーンが明らかに高くなって擦り寄っている光景を何度も見てしまった。楽屋の入り口が空いていると、中で台本を読んでいたり、楽屋の外で、何か打ち合わせをしている人がいたり、色々だった。

「忙しそう」

「そうでもないさ。待ち時間っていうのがあるし」

「東条さん、こういうところに入りに入るのは多いの」

「尚毅でいいさ。みんな、そう呼んでいるし」

「えー、呼びにくい。一応、年上だし」

「お前のほうが呼びにくい名前だろ。珍しい名前だな」

「何で名前を知ってるの？ 私はあなたのことは知らないのに」

「興味があつたから調べただけ」

「興味？」

「あまりにお粗末な内容だったけど、印象に残ったから」印象ねえ。

「真珠^{しんじゆ}って、初めて聞いたよ。何で、その名前なんだ？」

「母がつけてくれたの。6月生まれだから誕生石の真珠。姉は4月生まれだから」

「ダイヤか？」

「誕生石がダイヤモンドだから、輝子。輝く子と書いて輝子」

「ふーん、変わった親だな」

「占い師だから神秘的なことが好きらしくて」

「占い師の娘なのに、練習もせずに受けたのか」と驚いていた。

落ちた理由3

「母は東条圭吾のことは苦手みたい。だから、内緒で受けた」

「時々やつかまれるよ。派手にしてるからって理由。自分でもやってみてから言ってほしいね。結構、テレビや雑誌って大変だと思うけどね」

「母も昔そういうのに出てたみたいけど。今は雑誌だけみたい」

「名前、なんだ？」

「ローズマリームーン」と言ったら、怪訝な顔をした。

「昔、聞いたことがあるな」

「昔じゃない。今も活動してるの」

「『ムーンフェイス』だっけ？ お店の名前。あそこはルビームーンのほうが有名だろ」ルビームーンである秋さんはネットで評判になったことがある。占いサイトを立ち上げたときに、母はそういうのが苦手だから、秋さんに任せっきりだった。秋さんは知り合いに頼んでサイトを作ってもらっていた。彼女は友達も多くて、割と美人なので男の人がタダでやってくれたらしい。「一度、飲んで、代金をチャラにしてもらった」と聞いていた。

「よく知ってるね」

「そういうことは一応把握しておく主義でね。お前はよほど疎そうだな。雑誌や本とか読まなさそうだ。直感、靈感だけの占い師の域で終わるな」と言われて、にらんだ。

「そういう顔をするな。今のお前はそのレベルだよ。よく見るよ。観察しろよ。こういうところで生き延びるには、何が必要だと思う？」と聞かれて見回した。

「え、なにがつて？」何と聞かれてもよくわからなかった。あちこちで頭を下げたり、話している光景しか目に入らなかった。

「歌手だったら、どうしたら、デビューできるか、生き残れるかを聞いてるんだよ」と聞かれて、分からなかったので、

「さあ、コネ？」

「コネでデビューしたって、その後、売れなくなるケースなんて多数あるぞ。有名人の子供がデビューしたって実力がないと無理。それ以外にも色々必要だろ」

「なにが？」

「まず、容姿、それから挨拶や先輩との人間関係。先輩に嫌われると後々困るからね。力を持っている人に取り入るのも上手じゃないと」

「え、そうなの？」

「そういうのが優れてないと、すぐに干されておしまい。歌がうまくたって、引き立ててもらわないと無理な世界なんだよ。誰にも目に留まらずに消えていく人は星の数ほどいる。だから、一番重要なのは運だ」

「運？」

「みんな、かなり強い運を持つてると思うぞ。誰かの目に留まるって、中々難しいからな。ただ、見抜く目を持ってない人の場合、遊ばれて終わるケースもあるけどな。女の子の場合は」

「あなたと似たような人もいるだろうね」

「誤解だ」

「でも、とつかえひつかえなんですよ」

「色々勉強中」意味不明だなあと思っただけで聞き返さなかった。「こういうところも勉強していかないと無理なんだよ。いきなり、相手に相談されても、その事情を限られた時間で聞き出していかないといけないし、職業事情が一人一人違うから、そういう部分で知らないで相談になんてのれないだろ。『看護婦さんになりたいけど、どうしたらいいでしょう？』『先生になりたい、スポーツ選手になりたい』お前、どうやってアドバイスするつもりだ」

「えっと、それは」さすがに言葉に困って、

「ほらな。全然分かってない。そういう職業事情を把握もしてない女に占ってもらっても、薄っぺらいだけ。一からやり直せよ。俺の

ことをコネと言っ前にね」と言われて、しばらく言葉がなかった。
こいつの言うとおり、コネと馬鹿にできるほど、私は何も持っていない。何も知らないかもしれないなあ。とぼんやりしていた。

落ちた理由 4

「言葉が少ないな」と東条尚毅に車に乗ってから言われて、かなり落ち込んでいたので、黙ってうつむいていた。

「元気がいいのは世間知らずだからかな。言いたい放題言えるのも今のうちかな。世間はそこまで甘くない。自分の未熟さを分けるから、人にとやかく言えなくなるね。学生だから許してもらってるだけってことに気づいてないからな」そのとおりかもしれない、かなり落ち込んでいて、

「これから勉強していけばいいだろ。せめて、女性のなりたい職業の実態だけでも調べておけば。そこから、やってけよ」

「あなたは知ってるの？」

「それなりに勉強中」

「どうやって？」

「人に聞くんだよ」

「人？」

「本でも人でも調べたらいいだろ。自分でね」そっけなく言われて、
「冷たい性格なんだ」

「わざわざテレビ局まで連れて行って、教えてやった恩人にその態度はないだろ」

「ごめん」と謝ったら、

「少しは素直なところもあるんだな。人のことを馬鹿にする前に自分を見直せよ。未熟な部分を直してから言えよ」

「あなたは未熟じゃないって言うの？」

「お前よりね」見下す言い方が気に食わなくて、そっぽを向いた。

「お前のその態度は目に余るな。サバトでは無理。一生無理かな。素直な性格の子がいいね」

「歴代合格者ってそうなの？」

「自分の目で見て確かめたらいいだろ。それから言えよ」

「え、でも」サバトでの合格者が多く働いている、占いの館「プロキオン」には行ったことがない。誘われても断っていた。なんだか行きにくかった。母が東条圭吾を嫌っていることは分かっているからだ。

車から降りて、お礼を言った。

「ありがと」

「もつとよく勉強しろ。ガキの遊び場じゃないからな」ちよつと見直したのに、その冷たい見下した言い方が気に入らなくて、

「二度と会わないでしょうけど、ありがと。あなたみたいな人はいつか女性に刺されるよ」

「モテてから言えよ。世間知らずなガキ」と言われて、にらんでいたら、

「じゃあな」と行ってしまった。家に帰ったら、

「あの車は誰？」と母が見ていたらしく聞いてきた。仕方ないので、本当のことを話したら、

「あの男に近づいては駄目よ。息子も同じ。世間で騒がれてるからって、本が売れてるからって、天狗になってるだけの男よ。お金のほうが大事な男なのよ。そんな男が代表になってるあんな変なところに所属なんてしなくてもいいわ。他の団体にしなさい。それが、全然別の職業を選びなさい。堅いところに就職して」

「その話は聞き飽きた。お母さんだって、堅い職業のところでも人間関係で疲れきってる人をいくらでも見てきたじゃない」と言ったら黙ったけど、母は何か思いついたらしくて、台所に行つてから戻つてきて、持つてきた塩の瓶を振つて塩を私に振りまいた。

「何してるの？」

「穢れを落としてるの。あんな男にだけは近づかないで、外にもまいておかないと」と言つて、すごい剣幕で外でも塩をまいているのが目に入った。瓶から直接まくのではなく、塩を手に出してからまいたほうがいい気がする。と思いつながら呆れつつ、よほど、何か嫌なことでもあったのかなと考えていた。

プロキオン1

朝、あこがれの雪人さんが出てくる時間に合わせて、私はゴミだしを日課にしていた。

「ああ、真珠ちゃん。朝から大変だね。お疲れ様」優しく穏やかに微笑んでいて、

「雪人さん、おはようございます」とびっきりの笑顔を作って挨拶した。国立大学に通っている大学生で、昨日会った男とはあまりに違いすぎるなと思った。年も同じなのに、全然違う。少なくとも雪人さんは女性と遊んでいるようなところを見たところがない。毎日遅くまで大学に残って研究をしていると聞いている。

「毎日、大変ですね」

「お互いにね。がんばろうね」と優しく言ってくれて、とてもうれしかった。

雪人さんが行ってしまった後に、

「あれでは、将来苦労するだろうからやめておいたら」と冷めた声がした。姉がそばにいて、

「何してるの、お姉ちゃん」と聞いた。

「早朝デート」

「こんな朝早くに？」

「だって、アピールしないと困るからね。今日だけね」言っている意味が分からなくて、

「じゃあねえ」と、会社に行ってしまった。姉は親戚に頼って就職した。親戚と言っても母の両親は早くに事故で亡くなっているし、父はいないので、母のおじさんの知り合い筋に頼んだ。

「お姉ちゃん、珍しく朝が早いよ」家に入って母にばやいたら、
「ほっときなさい」と気がなさそうだった。母は朝が弱い。知り合いに誘われて飲みに行く機会も多いため、朝は遅く起きる。食事のしたくも苦手らしく、お弁当も作らない人なので、今は私が作って

いる。その前までは父が、一緒に住んでいた大叔父さんが作ってくれた。父がいなくなる前は占いカフェをしていたけれど、母は家事は苦手なためにカフェの運営はできそうもないので、今は占いだけをしている。占いスペースは作ってあるけれど、カフェだったころの名残が部屋のあちこちに残っている状態だ。内装を作り変えるお金なんて、家にはなかった。昨日の男の家とは違いすぎる。価値観が違って当然かもねえと思いながら、台所に行った。

プロキオンの見学に怜奈ちゃんを誘った。

「ねえ、一度行っただんでしょ」と怜奈ちゃんに聞かれて、前の会場はプロキオンではなくて、別の場所だったと教えた。

「ふうん。まあ、いいや、暇つぶしに一緒に行くのも面白いね」

「怜奈ちゃん、相談ごとってあるの？」

「ないかも。あれこれ人に指図されたくないし」そうだった。怜奈ちゃんは、結構しっかり者で、さっぱりしていて、でも、かわいいために初対面の男子にはその性格はバレないことが多い。

「怜奈ちゃん、モテルし、成績は気にしてないし、結婚相手に苦労しそもないものね。見た目って、大事？」

「当然でしょ。真珠もかわいいほうなんだから、頑張りなよ」

「そう言われても、おこづかいなんて限られているし、バイト許可も家でのものだけだし。そういう方面に回るお金がない」学校の規則でバイトをする場合は許可がいることになっている。内緒でしている子も多いけど。

「ふうん。うちは禁止されてるからなあ」怜奈ちゃんの家はそれに厳しいことを言われるらしい。お父さんがかなり心配しているようで、「変な男がいたら、どうする？」と言われるらしい。かわいからそれで心配なようだ。実際に誰かに尾行されたこともあるようで、

「怜奈ちゃん、その分、おこづかいももらえるならいいじゃない」

「無理。門限も厳しいし、連絡しないとうるさい。知り合いの娘が

駆け落ち同棲したからって、それが私に何の関係がある」

「それで厳しくなるって言うのが、いまいち分らないんだよね」
親は厳しくはなかった。母は大雑把で家事も苦手で、父が色々と家事をしてくれて、カフェの運営もしていた。父のほうが私の世話をしてくれて、会話も多かった。母は社交的で外に出て飲みに行くことも多くて、姉は母に似ていて家事一切をしない。掃除すらしたこともない。結婚相手はお金持ちだと決め込んでいるので「必要がない」と言い切っている。でも、今のところ、念願のお金持ち、将来性有望彼氏と長く続くようなことはないらしい。

「姉の努力なんて、すさまじいけど、どうしてうまくいかないんだろ。モテることはモテるんだって。ただし、金持ちじゃないと却下してるから、全滅だと言ってた」

「それはあるんじゃないの。相性の問題だから。真珠はそういう方面に詳しくないからねえ。もっと、恋愛に強くないと占い師として困らない？」この間の男にいわれたことを思い出してため息をついた。正直、行きたくはないけど、行ったほうがいいんだろうなと思いつながら歩いていった。あいつの言ったとおり、私はあいつのことをとやかくは言えない。わざわざ連れて行ってもらったことも分かってなくて、悔しくて言い返してただけだったなと反省した。

「ま、いいや。開き直ろう」とわざと明るく言った。落ち込んだときの呪文だ。父がいなくなったときにもそう言って明るく振舞った。姉はそれほど変化はなかった。家事をしてくれる人がいなくなったぐらいで受け止めていたようで、明るいままだった。父との交流がほとんどなかった姉にとってはそういうものなのかもしれないなと今では思っているけれど、当時はかなり怒っていたけれど、そういうことは姉は軽く聞き流していた。母はかなり落ち込んでいて、しばらく占いができないほどで大叔父さんである、広^{こっだい}大おじさんが何かと支えていた。おじさんは今は東北で暮らしている。時々、便りがある程度で行ったことはない。

「ここじゃない？」怜奈ちゃんが言ったので、そちらを見たらおし

やれな感じのガラス張りのビルだった。かなりの人数が並んでいる。整理券を配り終えたらしくて、

「今日の分は終わりましたから、明日、おいでください」と女性が謝っていて、

「えー、せっかく、来たのに」女子高生らしい女の子たちがぼやいていたけれど、慣れているらしくて、何度か謝った後、その人は行ってしまうって、受付のほうに移動した。

「あの、見学をさせてもらえませんか」と頼んだ。本当は占ってもらいたかったけど、それもできそうもないので、そう頼んだ。

「は、見学ですか？」と相手が驚いていた。どう説明しようかなと考えていたら、

「きゃあ」と、悲鳴が上がった。そちらを見たら、東条さんが来ていて、背が高いので女子高生の合間から顔が見えた。

「なんだろ、あれ」と怜奈ちゃんに聞かれて、

「えっと、あれが例の」と言ったら、

「ふーん、あの人に頼めばいいんじゃないの？」と言われて、そう言われても声を掛けづらかった。でも、あいつがこちらを見て、

「ああ、来たのか？」と言う声が聞こえた。仕方なく頭を下げた。

東条さんがそばに寄ってきて、

「なに、あの子？」そばに寄っていた女性たちがいつせいにぼやいていて、ちよつと嫌だったけど、

「見学しに来ただけ」と答えた。

「ふーん」

「お知り合いですか？」受付の女性が聞いて、

「ああ、俺と同じだよ。見習いなんだ」と答えていた。

「見学させてもらえませんか」嫌々ながらそう聞いたなら、

「お前って、正直だな。顔に出すな」と笑われた。「あなた以外ならこんな表情にならないわよ」と言いたくても我慢をした。

「なら、お前も立ち会えよ。俺も占いするから」

「え？　なんで？」

「見習い期間なんで、まだ、料金が低くめだけど予約客だけ受け付けてるからな。お前はやってないのか？」

「やらされてはいるけど、お情けで近所の人とか知り合いとかが頼んでくる。それで母が月に一度バイト代をくれる程度」と言ったら、東条さんが笑った。

「だから、駄目なんだよ。商売として成立させないと。相手がわざわざ相談に来るようにならないと商売にならない」そう言われて、

「友達には頼まれるけど」

「お金をもらってるか？」

「おごつてもらう程度」

「じゃあ、駄目だね。そこまで必要とされてないってことだから」

「あなたは必要とされているって言うの？」面白くなって、そう聞いたら、

「確かめてみたら」と笑った。

プロキオン2

東条さんの言うとおりだった。予約表を見せられて、びっしり予定が入っていた。

「料金いくらのなの？」

「正規料金の半額。見習いはそこから始めるからな。それで基準人数に達したら試験」

「試験って？」

「この間と同じことだよ。相談者をみんなの目の前で占って、採点する。基準点に達していたら見習いから昇格。その後もアンケート結果や指名などでランクが上がっていく制度。指名が多いとそれだけお給料に反映」

「お給料制なの？」

「いや、固定給は少しだけだよ。後は歩合。あまり指名が少ないとここにいらなくなる」

「追い出されるの？」

「違うさ。自分から辞めていくだけ。居づらいからだろ」厳しいんだなと聞いていた。

「そばにいて見学してろ。ただし、横から口は出さないでね」怜奈ちゃんを見たら、

「最初だけいるね。途中で帰るから」と言っただので、東条さんがうなずいた。

「かわいい子だから、特別だからね」怜奈ちゃんにだけ、優しく笑いかけて、「この二重人格男」と言いたかったけど、我慢した。追い出されると困る。こいつの占いに興味があった。

東条さんはえらそうなことを言うだけのことではあった。占い師として東条力ロンと名乗っている。占い師は本名の人のほうが珍しいぐらいだ。カタカナ名の人が多い。私はまだ占い師の名前はもらっ

ていなかった。占いはタロット西洋占星術の両方ができるけど、タロットが多かった。お客さんに了解を得て見学していたけれど、嫌がる人もいたので、そういう人は席をはずしたけれど、ほとんどの人は私など眼中になかった。タロット占いではカードの意味から更に解釈を広げていて、相手は食い入るように聞いていた。相手は何度もうなずいて、しかも質問も多い。その質問にも丁寧な答えている。相手がどういう年齢だろうと、自分より年下だろうと言葉遣いは丁寧だった。親近感をこめた言い方に変えることもあったけれど、相手によって、その辺のバランスを取っていた。確かに私とは違う。こいつが合格したのは当然だったんだなと思ったと同時にかなり落ち込んだ。これでは言われてもしょうがないかも。

「どうだった？」とお客さんが帰った後に、聞かれた。お客さんが帰る合間に話しかけられたけど、何も言えなかった。それで、今度も「えっと」としか言えなかった。怜奈ちゃんは飽きて、さっさと帰ってしまった後で、

「よく見てろよ。お前、他の人の占い方法も知らずにきただろ」

「見てると違うの？」

「参考にできる部分はいくらでもあると思うけど。人によって違ってくるからな。アプローチの仕方も解釈も何もかもね。得意分野もあるだろうし」

「得意分野？」

「恋愛の」と言っていたら、お客様が入ってきて、

「お願いします」と言った声を聞いて、

「お姉ちゃん」と驚いた。

「あ、なんだ。真珠、なんでここに？」と聞かれて、

「見学なんですよ。おとなしくしていますから、許してやってください。それより、おかけください」東条さんが優しく笑いかけた。

「へえ、ここで働く気？　ここってお給料いくらなの？」と聞かれて恥ずかしかった。姉はこういうところがある。全部、お金で換算する。

「どうぞ」東条さんが薦めたために、姉は座って、
「どういったご相談ですか？」と東条さんが聞いていた。

プロキオン3

姉の占いは、良くも悪くも半々だったけど、姉は、

「お金持ちと結婚したいんですよ」と何度も言っていた。今の相手はどうかってことが一番重要だったようで、身を乗り出していた。勢いが違うなあと思いながら、

「かなり努力をされているようですね。そうですね、努力しだいは叶うかもしれないですね。がんばってくださいね」東条さんがあの顔で優しく言ったために、姉はうれしそうだった。私には目もくれず、うれしそうに帰って行き、

「残念な結果になるだろうな」冷めた声で東条さんが言ったので、

「二重人格にもほどがある」と呆れた。

「相談者がそばにいたらどうするのよ」

「足音が聞こえただろ。もう、帰ったから言える。それにそばに人がいると分かる体質だから」変な体質。

「お前は分らないのか？」

「さあ、感じたことない」

「ふーん、俺の誤解だったか」と言ったので、

「なにが？」と聞いた。

「お前、強い気がしたからな」

「何が強いだよ」

「気が強いって言いたいけど、意外ともろいのはこの間、見たしな」と笑ったので、

「あなたの二重人格には負ける」

「誰でも裏表はあるだろ」

「そう？　ない人だっているでしょ」

「お前が知らないか、見えてないだけだろ。何だ、残念だな。やっ
と、見つけたと思ったのに」

「なにが？」

「勘の」と言いかけてから、
「お前も占ってやるよ。今ので最後だから」
「お姉ちゃんでも最後なの。あ、会社帰りだったね。今、何時？」
「時計は置いてない。そういうものがあると気が散るだろうから」
「そう言われるとそうかもね」と言っ、携帯で確かめた。
「あ、やば。そろそろ帰らないと」
「門限か？」
「ないよ。そうじゃなくて」
「あと少しだけ付き合えよ。お前を占うほうが先」
「なんで？」
「興味があるからな」意味不明だなと思ったけど、
「少しだけね」と言っ、仕方なく座った。タロットで占ってくれたけど、かなり時間をかけていて、
「分かりづらいな、お前」と言われてしまった。
「言葉遣いを変えすぎだよ。お客さんと態度が違いすぎ」
「お前はタダだから、これぐらいでいいだろ」
「つくづく、二重人格だね。姉には調子のいいことを言っておいて」
「相手に合わせただけ。相手の満足感を優先したらあんなった」
「意味不明」
「話しかけるな。ふーん、お前の人生って、色々あるだろ」
「そう？ それなりだと思う」
「親の関係か？ かなり苦労してないか？」
「そうでもないよ。母親はそれなりに育ててくれたし」
「父親は？」と聞かれて黙った。
「なにかあるのか？」
「いないから」
「ふーん、苦労はしてるんだな。それで読みづらい」
「カードにはそこまで出てないじゃない」
「ばか、相手に合わせるって言ってるだろ。相手のそれまでの考え方とか生き方も反映していかないと現実味がでないだろ」

「え？」とおどろいた。

「社会人と学生だと同じカードでも解釈が違うのは分かるだろ。相手の性格によっても違ってくる」

「性格はどうやって把握するの？」

「服装とか、態度や言葉遣いとかで大まかに判断するよ。そこまで分からないからな」

「なるほど」

「お前は相当経験不足だな。友達だけ占ってるから苦情とか出ないから努力しないだろ」

「そう言われたら、苦情を言われたのは2件ぐらいかなあ。後は思いつけない」

「ふーん、少ないな」

「『振られたのはどうしてくれる』って」

「それは怒るだろうな」

「当たったのに怒られたの、2件とも」

「ふーん」

「当たっても怒られるのが困ったけどね。『彼氏が二股』って言うたら怒られたし、『年上の女性に取られる』って言うたら怒られたし」と言ったら、東条さんが顔を上げた。でも、すぐに顔を戻した。

プロキオン4

「お前の場合はいろいろあり過ぎそうだな。恋愛にしても勉強のほうもね。これから、かなり苦労しそうだな。今までも色々あったようだし。でも、占いにくい」

「どうして？ 出てるじゃない。私の場合は経験不足に尽きるって。それから、人間関係がかなり影響があるって。出会う人とのつながりが重要でしょ」

「どこでそう思う？」東条さんに聞かれて、説明しなくて、カードに出てるじゃない」

「ふーん」東条さんがそう言った。

「恋愛も波乱含みだな。初恋は実らないって言うのだけは分かるけど」

「え？」と驚いた。

「どうして？」

「驚くことないだろ」といわれたけれど、納得できなくて、

「お前は恋愛関係は相当弱いな」

「みんなに言われるからやめてよ」

「経験積まないと難しいぞ。その辺で差が出るし」

「そう言われても、初恋は実らないって、どこに出てるの」

「自分で考えろ」とそっけなかった。

「よく分からない」

「お前のほうが分からないね」家まで送ってもらいながら考えていた。

「お姉さんには本当のことは言っなよ」

「なにを？」

「恋愛でことごとく失敗するって」

「そこまで出てたっけ？ 確かにうまくいきそうもないってことは

私でも分かったけど」

「彼女は将来幸せにはなれないよ。誰とも結婚できないかもしれないいな」

「そこまで言い切るの？」

「総合的に判断するとそうなる」

「本人には言わなかったじゃない」

「お客様だから当然だろ。全部伝えられないよ。相手が望んでいないことはね」

「どういう意味？」

「相手はお客さま。いい気分で帰ってもらうには言葉も選ばないといけないし、言わなくてもいいことまでは伝えないこともあるさ。二度と来てもらえなくなるのは困るし。口が軽い女性だと言いつらされても困るから」

「そこまで考えるの？」

「前にいたんだよ。はつきり言い過ぎて問題が起きてね。相手が何度も苦情の電話を掛けてきた。結婚がうまくいかなかったのは占い師のせいだって。でも、占い結果もうまういなくなるって出ていたから、それが面白くなかったこともあったんだろうな。だから、そういうので気をつけているだけだ。評判も大切だろう」と言われて、考えた。確かに正直に全部姉に伝えたところで、姉は信じるどころか怒るかもしれないな。

「だから、相手には必要以上教えなかったんだ？」

「お客様を不快にさせる必要はないからな。だから、お前も言わないように」

「そう」そこまで考えたこともなかった。こいつはそこまで考えて占いをしてるのかという驚きと、自分の未熟さと、でも、面白くないのがごちゃ混ぜで

「あなたって分からない」としか言えなかった。

プロキオン5

「俺もお前が分からない。自分の占いののに、どうして分かった？」

「半分しか分からないよ。自分が見たくないことまで見えないし」

「そうかもしれないな。俺も自分のことや身近な人は占いにくいし。でも、お前は今までで一番占いにくかった」

「そう？ 日頃、言いたい放題だから、そうなるかと思ったのに」

「占い結果と照らし合わせても、お前が分からないからな。お前は勘がいいようだけど、それ以外はボロボロだし」

「嫌味な男」

「しかも言葉遣いは悪い。見学させてもらっておきながら、感謝もしないしね」

「ごめん」と謝った。この男だとそういうことが言えなくなる。そういう部分でぶっ飛んでしまうところがある。

「相手によって感謝って言いづらいのかも」

「素直なほうがいいだろ。それで、どうだった？」

「なにが？」

「見学してだよ。プロキオンの占い師のことはどう思った」

「あ、見てなかった」

「呆れるやつ。何しに来たんだか」

「そう言えばそうだったね。観察してないよ」

「お前は一箇所集中型かもな。靈感だけの占い師脱却の道のりは遠いな」

「この辺で止めて」

「何で、家まで送ってやるよ。さすがに女子高生だと襲われると困るだろ。それなりにかわいいからな」

「あなたから言われると途端にうれしくなくなるのはどうしてだろう？」

「失礼なやつ」

「塩掛けられちゃうからね。あなたのお父さんが嫌いだから。うちの母」

「ふーん。売れてるから、やっかみか？」

「さあ、それにしても変だよ。前に売れている有名占い師の人に母と一緒に会ったけど、反応が違ってた。うれしそうに握手を求めてたから、違うと思う」

「じゃあ、いい男コンプレックスか？」

「なにそれ？」

「モテる男が嫌いって女もいるんだよ。お前と同じようにね。でも、興味があるから嫌いと言うことが多いけどね」

「誤解だ。あなたに興味があるのは占い師の部分だけ」

「ふーん」東条さんが変な顔をしていた。

「おかしくないでしょ。好みのタイプじゃないだけだもの」

「俺は好みだけど」と言われて、口をパクパクさせた。

「リアクションが古いな、お前。コメディにするな」

「どういう意味？」

「テレビで見るコントのようだ。もっと、かわいく、『うれしいわ』とにつこり笑え」

「笑えない。うれしくないから」

「ああ言えばこう言うタイプだな。つくづくかわいくないね。友達を見習え。もっとも、彼女も長続きしない恋愛を繰り返すそうだな。後、何年かはね」

「そんなことも分かるの？」と聞いたら、意味深に笑っていて、車を止めてから、

「お前の場合は経験不足に尽きるのは本当のようだ。経験つめよ。お金もらって占えるレベルになってから言え」

「はいはい、送ってくれてありがとうございました。二重人格さん」
「お前は裏表を身につけるよ。お客様に対して不快な態度を取らないように。素人レベルで終わりそうだ」

「うるさいわねえ」と言いながら、車から降りた。あいつはさっさ

と行ってしまい、
「よく分からないやつ」と思った。

弟子志願1

秋さんにプロキオンでのことを相談した。

「経験を積むのは賛成だけど、誰かの弟子になるにしろ、中途半端では困るわよ。まだ、学生だし、卒業してからでも」

「学生しながらだと無理かなあ」

「そうねえ」と、考えていた。

「忙しい人だと直接は教えてはもらえないわね。プロキオンがそうだから、先輩の指導はあるらしいけれど、個人で腕を磨いていくと聞いたことがあるわ。人気があるところだから首にしても次の人がすぐに見つかるから、丁寧に指導はしてくれるわけじゃないらしいの。そういうところも多い。占い教室だとお金はかかるしね」

「そうだよね。お金なんて払えそうもないから、自力しか無理かな」

「ただ」

「なに？」

「昔、お金もなしにそばで勉強させてもらえたケースがあったようだけど」

「その人、誰？」

「それが、実はちょっと良く分からない人なのよ。評判はいいと言う人もいれば、偏屈だと言う人もいる」

「え、それだとちょっと」

「でも、占い師の腕は確かだと弟子入りした人が言ってたわ。ただね、かなり頼み込んだ末の渋々だったみたいだし、その人、男だったからね」

「そこ、教えて。とにかく行ってみる。それから考える」

「真珠ちゃんはそのいうところは前向きね」

「でも、行ってみてから考えたほうがいいでしょ」

「そうね。ここでの経験だけでは中々上手にならないでしょうね」

東条さんの言ったとおり、お客様に必要とされてなければ、お金な

んて払ってもらえないし、指名なんてされないだろう。悔しいけれど、あいつのほうが上だ。

「見た目がいいとお客様って指名が多いのかな」

「見た目だけじゃないと思うわよ。それより中身ね。話し上手、聞き上手な人のほうがいいでしょうし」

「そこまで考えてなかったな」

「学生なんだから、そこまで考えて占う必要がなかったただけでしょう。でも、真珠ちゃんはお占い師になるより、固い職業のほうがいいのかもしれないわよ。意外と大変なんだからね」

「分かってるけど」

「ここは常連さんが多いから、苦情が少ないけど、何人かは理不尽な要求をされたそうだから」

「なにを？」

「『彼氏とよりを戻せるように占って』と言われたらしくて」

「絶対無理でしょ。それにそれはその人自身が努力していかないといけないって思うけど」

「それをそのまま伝えたら怒られるからね。やんわりと納得できるようにしていかないと」

「どういう意味？」

「相手にそのままの言葉を伝えたって、怒る人もいるってことよ。中にはいるから気をつけてね。言葉を言い換える必要もあるから。相手に合わせてね」あいつが言っていたことと同じことを言う。

「相手に合わせるか。私、そういうことまで考えてなかった」

「そういうことにも気を使う必要は出てくるわよ。お金をもらって占っているわけだからね」と諭すように言われて、うなずいた。

「負けたくないな。あいつには」

「勝ち負けの問題じゃないでしょ」

「わかってる。でも、言われっぱなしじゃ面白くないの」と言ったら笑われてしまった。

秋さんに教えられたところに行った。でも、それらしい建物が見当たらない。

「どこ？」思わず口に出して見回していた。

「あんた、何か探してるの？」近所のおばさんらしい人が寄つてきて聞いてくれて、探している場所の名前、「エッグシェル」はどこかを聞いた。

「ああ、あの偏屈のじいさん」と言ったので、ちょっと驚いたけど、「そこだよ」指差されたところを見て唖然とした。綺麗とは言いがたいところだった。昔、別の商売をしていただろうなと言う作りになっていた。食堂が何かだろうなと思ったけど、

「そこに出てるだろ。看板が」

「看板？」探して見たけれど、見つからず、指差して、

「それだつて」と言われてみたら、「橋添」と書かれた表札の下的小さな木のボードがあつて、「エッグシェル」と書かれていた。でも、汚い字だった。

「はあ」行くのをやめようかと思つたけど、その人が見ているので御礼を言つて、そちらに向かった。チャイムを探したけど見つからず、仕方なく入り口を叩いた。

「ごめんください」かなり時間が経ってから出てきた男の人は、くたびれた雰囲気の人で、

「どちらさん」と聞かれて、説明をした。

「ああ、無理。うちはそういうのはやってないから」

「でも、経験を積みたいので」

「他に行きなさい」

「お金がないから」と正直に言つたら、

「だからつて、何もここに来なくても」と自分で言つたので、

「知り合いの人に聞いたんです」と説明をした。

「ああ、あの子ねえ、辞めちゃったんだよね」

「え、どうして？」

「この商売はね。お客さんがつくかどうかで決まるからね。あの子

はそれなりに熱心だったが、占い研究好きだっただけでねえ。それでお客さんを怒らせてばかりいたからね。見たところ、君は学生さんだろう。悪いことは言わない。やめておいたほうがいい。おしゃれで儲かる商売だと勘違いするんだよね。近くにあるところと勘違いするからね」

「近く？」

「あっち」と指差していた。

「でも、経験を積みたいんです。そばに置いてください」

「君、いくつ？」

「17です」

「若いから他の職業のほうがいいよ」

「母もそう言ったけど」

「お母さんのほうが正しいよ」

「母も占い師なんです。今は母の手伝いをしていますけど」

「へえ、だったら、その人に教わりなさい」

「母は気が散るからと私がそばにしていると嫌がるので、それなりしか見れないし」

「まあ、そういう人も要るだろうなあ。俺は気にしないけど」

「お願いします。見習いで一週間でもいいから置いてください。お金は払えないけど、手伝いぐらいはできます」

「無理だよ。若い子はそういうことは今時やらないだろ。家事もしたことがない子が大勢いるからねえ」

「いえ、してまずけど」と言ったら、相手が驚いていて、しばらく考えた後、

「一週間だけだよ」と言ってくれて、

「ありがとうございます」と頭を下げた。

弟子志願2

「今時、珍しいね」と言われてしまった。さすがに見るに見かねて、最初に掃除を始めた。エプロンを借りて、掃除したけど、汚れちゃうなと思った。汚れてもかまわないような格好だけど、それでも、汚れすぎだなと思った。

「掃除してくださいよ。だから、お客さんが来ないんです。明日はジャージを持ってきますね。これじゃあ、絶対に固定客ができない」「いるよ、それなりに。でも、本当に珍しいね。家事はできる子は、久しぶりに見た」

「母が苦手で父に仕込まれました。スケッチ旅行に出るときに、留守を頼まれますから。父は小金を貯めてスケッチ旅行に行くのが趣味なんです。カフェを切り盛りしてましたが、本当は画家だったから」

「へえ、そういう家の子なんだね。じゃあ、納得」話をすると偏屈ではなかった。占い師としては未知数だけど、ごく普通の人だった。

「先生、掃除はしてくれないとお客様が嫌がりますよ」

「めったに来ないんだよね」

「大丈夫なんですか、それで？」

「なんとかやっていけるよ、それでも」

「うらやましいなあ。うちでは今は苦しくて。カフェの収入が減っちゃって。占いのほうが増えつつありますけどね。お弟子さんができたから。いつか、独立しちゃうだろうけど、人気が出てきているから」

「そう」

「先生、お客さん、一人ぐらい来るように宣伝したら。せめて看板を分かりやすく」

「そのうちやるよ」そのうちは来ないパターンだなと思いながら、

「今度、作ってきますね」

「いいよ、あれで。愛着あるし」

「じゃあ、もう一つ作ってきますね。知り合いに頼んでみます」

「悪いよ」

「占いと交換です。前もそうしてもらったから」

「しかしなあ、あれでいいと思うけど」

「先生、占い師なんだから、その辺も気を使いましょうね」と言っただけ、結局、聞き流していた。お客さんが一人も来ずに終わり、早めに帰ることにした。帰りにプロキオンに寄ってみた。意外とすぐ近くだったので、ひよつとして、さっき言ってた『あっち』って、このこともかね。と思った。プロキオンの受付に行つて、見学をさせてもらえるように頼んだ。

「また、ですか？」と驚いていた。

「あ、あの子よ」と声がして、

「あなた、尚毅のなによ」と後ろから言われて、

「あの、あなたたち」と聞いた。女子高生3人がにらんでいて、

「プロキオン会員の者よ」と言つて、何かカードを見せてきた。細かい字で分からなかったけど、プロキオンのお得意様カードのよう

で、

「へえ、そういうのがなんてあるんだ」驚いた。

「これに入ると優先して占ってもらえるの。そうじゃないと中々予約が取れないんだから」

「そう」としか言えなくて、

「だから、それに入つてないのに、馴れ馴れしくしないでよ」

「ああ、違う。あの人、ただ、教えてくれたただけの人だし。私なんて馬鹿にされてるし」と言つて逃げた。

「そうでしょうね。大してかわいくないものね」聞こえるように言つたので、言い返してやりたかったけど、やめておいた。関わりたくもない。ああいう子に前に絡まれたことがある。神宮寺が好きだったらしくて、それで言いがかりをつけてきた。けんかになりそ

うなところを怜奈ちゃんが通りかかって止めてくれた。「まともに相手にしたら駄目だ」と後で怒られた。「相手は何を言っても納得しないから適当にあしらえ」って言われてしまい、

「えー、くやしい」と怒ったら、

「無理だつて。神宮司に振られて、真珠に言いがかりをつけている段階でおかしいでしょ。神宮寺に何度も告白すれば済むことなのに、真珠に八つ当たりしてるんだし」

「八つ当たり？」と驚いたけど、後で周りに聞いたら、

「ああいうのって、困るよね」と言い合っていた。何人が似たようなことをされたいらしい。相手が好きだと言う気持ちより自分優先の子がああいうことを言うてくるらしい。自分の思い通りにならないことを誰かのせいにするらしく、

「だから、まともに相手にしたって無理だよ」と言い合っていた。今はそういうこともなんとなく分かるようになってきた。

ロビーの周りの見学していた。待っている間に、グッズを売っているところで友達と二人で選んでいる高校生がいたり、何か紙を渡されたりしく、それを見せ合っていたりして楽しそうだった。占い師に今年中に彼氏ができると言われたと友達と喜んでいる人もいて、楽しそうでもあった。母のところでもらった後のことは、私は知らなかったのも、ああいう感じなのかなと思った。終わった後は疲れるために、母はすぐに切り替える。お客さんの話もほとんどしない。もめごとがあったときだけ、秋さんと相談するぐらいだった。時々、ロビーに占い師らしい人が通りかかることがある。働いている時間が人によって違うらしく、占い師の紹介されているボードには時間や占い内容が書かれていて、そのボードの写真の人を一通り見ていた。「ルーカス」のおじさんの言っていたとおり、ほとんどが若い女性。綺麗な人も多く、服装も派手な人は少ない。テレビで見たことがあるような色使いの派手な衣装の人は一人もいないようだった。料金は高い人もいた。でも、後は横並びで、学生割引があったり、プロキオン会員も割引されるようで、

「うちと違う」と言ったら、

「それはそうだ。うちは独自システムだからな」と聞いたことのあ
る声でした。東条さんがロビーまで出てきていた。

弟子志願3

「お客さんは？」

「今日は学生が多いからな。そうすると早くなるし」

「え、どういう意味？」

「学生割引なのは内容の濃さも関係あるからな」

「意味不明」

「それで、早めに終わるだけ」

「時間が決められているでしょ」

「人によって違うよ。一人占うだけでかなり疲れるから、休憩時間を大目に取り人がいるし。さっき帰った女子高生がお前が来てるって言っから降りてきただけ。絡まれなかったか？」と聞かれて、正直にうなずいたら、笑っていた。

「だと思った。気をつけるよ」と小声で言ってきた。

「何度か一緒にいたからうらまれているみたいで。俺にばやかれたし。前もあつたから」周りに気づかれないように教えてくれて、

「あなたが人前で話しかけなければ、即解決」

「無理。ああいうのは続くさ。親父も同じだったらしいから。だから、広く浅く付き合う必要があつてね」

「ふーん、いいよ。それは」

「それで、何しに来た？」

「近くに来たから、また見学しに来たの。美人が多いみたいだね。あのおじさんが言ってたとおりだ」

「誰だよ」

「ルーカス」

「ああ、あそこね。見た目は重要だろ。占ってもらう人が神秘的なほうがいいと思うけど。庶民臭さがある人に占ってもらうよりね」

「そう？ そこはそれほど関係ないでしょ。遊びなら分かるけど」
「遊び？」

「ファッション感覚。遊びに来てるって感じの子が多いね」と見回した。東条さんも見てから、

「それでもいいだろ。来やすさだって重要だ。お前のところも宣伝ぐらいしたら。ネットだけじゃなくて。営業したほうがいいぞ」

「営業？」

「テレビに出たほうが影響力があるね」

「一時的に人が増えるだけでしょ」

「固定客になっていくんだよ」そうかなあと見回した。

「不満そうだな」

「いいや、ありがとうございました。二度と会わないだろうけど、色々勉強になりました」

「前もそう言ってただろ。でも、会った。縁があるんだよ」
「ない」

「俺はそう思ってる」

「あなたねえ」と言い合っていたら、

「迎えに来てくれたんですか？」大学生らしい割とかわいらしい人がやってきて、

「帰りに食事に行きましょうね。約束したんだから」と擦り寄って腕をつかんでいて、よくやるよと思いながら、頭を下げてその場を離れた。

「あ、お前」と言う声が聞こえたけど、そのまま振り返らなかった。あれが営業と言っならホストになったほうがいいかもねと思った。

偏屈な人1

「汚い」と言いながら玄関周りを掃除していた。草むしりに雑巾がけ。それなりに綺麗にしたいけど、元が古すぎてそこまで綺麗にはならない。これは難しいかもね、と思っていたら、

「あら、珍しい。お孫さんかしら」どこかの家庭の普通の主婦って感じの人がやってきて、慣れた手つきで玄関の戸をあけて中に入っていた。先生はお茶を入れてあげていて、

「ああ、いらつしやい、そろそろ来るころだと思つてね」と言つて、席に着いていた。先生のタロットは我流だった。解釈がかなり飛躍しているところもあり、でも、相手は笑いながら相談して占いを進めていた。ずっと見ていたら、

「お孫さんがいるなんて知らなかったわ」

「ずっと前に別れた女房の関係じゃないよ。この子は押しかけ弟子」と言われて、その人に頭を下げた。

「前にいたスギちゃんみたいにしないでよ」

「彼は研究するのが好きだったから、今もやってるよ、きっと」

「でも、お客さん、どれだけ怒らせたか。でもねえ、この先生に会いたくなるのよね。迷ったときに必ず来るの。そういう人ばかりよ。人生相談も兼ねてるからねえ」

「うちは時間無制限だから、それで来るんだよね」

占い終わった後、お金を払って行つた。じっくり相談にのつたためか、お客さんはかなり満足していた。金額は思ったより少なくて、「これで食べていけますか？」と驚いた。

「大丈夫だよ。それなりにやってける」と言っていた。電話が掛かってくる、でも、先生は、

「ああ、駄目、今日は日が悪い。今度ね」と断っていた。

「なんで？」思わず聞いたら、

「あの人は不満が溜まると来るタイプ。でも、占いなんて信じないから、こうやって断る。相性が悪いから」

「お客さんを断る余裕がどこにあるんですか？」

「占えない人もいるでしょ」と軽く言われてしまい、確かにそう思っ
て断った女子が何人かいた。お見合いパーティーが成功するかど
うかを聞かれた先生も逃げた。占わなくても「不成功」と背中
に書いてあるような人だった。

「選り好みしてるから、偏屈だって言われちゃうんですよ」

「ああ、違うよ。そうじゃなくて、きつと、ここに住んでるからだ
ね」

「確かに占いするところとしてはふさわしくないけど」

「ま、がんばろう」と言われて、すごいなと思った。

帰るときに、見慣れた車が見えて、中を見たら東条さんが女連れ
だった。また、ああやってる。どれだけ女性がいるか知れたものじ
やない。そのうち、刺されるだろうなと思いつながら通り過ぎた。

「占い師でも色々いるよね」と口に出した。母が所属している占
い団体はいくつかある。その集まりに連れて行ってもらったこともあ
って、かなり個性的な人もいれば、どこにでもいそうなおじさんタ
イプもいる。たまに不思議な衣装の人もあるけど、色々だった。東
条さんやその父親の圭吾さんのような高級な身なりで揃えているよ
うな人はほとんどいない。だから、あの人たちはやつかまれるかも
しれないなと思った。「お給料はそれなりにいいらしい」と言う話
と、「それでもない」と言う人と色々いた。東条さんも相当バイト
代をもらっているんだろうな。うちも色々変えたほうがいいんだろ
うかと思いつながら歩いていった。

偏屈な人2

「お姉ちゃん、遅いね」と母に言った。母には先生のところに押しかけ弟子していることはさすがに教えておいた。プロキオンのそばにあることを省いてあった。また、塩を掛けられたらたまったものじゃない。

「ほつときなさい。自分で稼いだお給料で遊んでいるのだから」

「男に払わせてるんじゃないの?」「自分で払うなんて、馬鹿よ」
が口癖のお姉ちゃんだから、デート代は全て男性持ちだと思う。

「化粧品に洋服までは無理でしょうね。せいぜい、アクセサリーにバック程度でしょ。おしゃれして、デートに備えるから、そういうことでしょ」母が軽く言った。

「お姉ちゃんはお母さんに似て派手なものね。美人だと得だ」

「あら、真珠はお父さんと私に似ていてかわいい顔じゃない。性格だって優しいからね」

「優しくはないよ。お姉ちゃんとお母さんと比べたらそうだけどね。友達に、『黙ってるそれなりにいけるかも』と言われた。どう思う?」

「そうねえ、確かに時々余計なことは言うわね」

「おかあさんたちがその辺にコップを置いておいたままにしたり、テレビをつけっぱなしにしたりするからでしょ。洋服だって、その辺に置いておくから、『洗濯機のそばのかごに入れておいて』と言っても聞いてくれない」

「所帯じみてるわね。高校生なのに。しっかりしてるように見えて抜けてるものねえ。輝子と足して割ったら、ちょうどいいでしょうね、あなたたち」

「あなたが生んだんでしょ」

「性格が似てないものねえ。輝子も誰に似たのか、お金に執着してね」

「貧乏がよほど嫌なのかなあ」

「そこまで貧乏じゃないでしょ」

「カフェの売り上げが無くなったから、厳しい月もあるよ」帳簿や家計簿は私がつけている。家計を預かっている身としては母の言葉は聞き捨てならなかった。

「休日だけカフェをしようか。秋さんだって来てるんだし」秋さんは占いだけでは食べていけないからと働いている。休日だけ来ていて、私も時々手伝っている。

「秋ちゃんもそのうち独り立ちするかもしれないわよ。それにお前だって、休日に他のバイトをしたほうが気楽だと思うし」

「お母さん、面倒くさがりだものねえ。社交的で明るいから接客は向いてるけど、洗い場はやってくれなかったし」

「いいわよ、それなりで」

「お父さんが帰ってきてくれないかな」

「真珠。その話はしないことに決めたでしょ」

「ごめん」と謝った。父がいなくなって、何度かこういう言葉を言ってしまう。姉は父のことなんて話題にすらしないけど、母は相当堪えていて、落ち着いてから二人で時々父の話題が出る程度だ。

「広大おじさん、元気かな」

「そのうち、遊びにでも行きなさい。真珠が行けば喜ぶわ」

「お金がないのに？」

「卒業してから、行きなさい」

「お母さん、雑誌のコーナーとかないの？ 知り合いに頼んで。自分で営業していかないと。あの看板だけじゃね」と外を見た。学校の知り合いの男子に好きな女の子のことを占うことと交換条件で描いてもらった看板がある。かわいい妖精が描かれているために、それにつられて、何人か来たこともあった。

「お客さんって、呼び込みしたって来ないかなあ」

「どこで、呼び込みをするのよ？」

「その通りで」と外を指差した。

「やめておきなさい。自分から占いに来る人じゃないと。遊びで来られても大変よ」プロキオンをうるついていた学生たちはうれしそうにしていた。みんな、楽しそうに占い結果を話しているのか、ロビーのソファに座って話している人もいた。あそこはロビーも広く、上の階でも占いをしていて、所属している占い師の数も多そうだ。それだけ儲かるのかもしれない。

「お金持ちはお金を呼ぶ」

「何を言ってるの？」

「お母さん、お金持ちの男性客と付き合ってみるとか？」

「輝子じゃあるまいし」と母が呆れていた。

先生のところに寄った帰りにコンビニに寄りたくて、プロキオンのそばを通りかかったら、また、東条さんの車が止まっていた。学生だけど、毎日占っているようだ。サバトに合格してもすぐにデビユーできないと聞いていたけど、あいつは特別待遇なのかもしれない。

コンビニで買い物をした後に、また、通りかかったら、お客様を送りに外まで東条さんが出てきていた。相手と食事にでも行くようで、そのまま車に乗り込もうとして、私に気づいて、そばに寄ってきた。

「よく会うな」

「偶然よ。近くに来る用事があるからよ」

「用事？」

「色々あるの。あなたは別の職業のほうに向いてそう。絶えず違う女性と一緒にいるんだね」

「営業もあるからね」

「ホストみたい」

「失礼なやつ。恋愛したこともないガキに言われたくない」

「失礼なのはどっちよ。これでも好きな人ぐらいいはいるわよ」

「恋人じゃないだろ。せいぜい片思い」

「そのうち、両思いになってやるわよ」

「当たり前だ」笑ったので、にらんで、

「あなたと大違いの誠実で優しい人よ。間違っても女性をとつかえひつかえない。一緒にしないでよ。みんながあなたみたいだったら、日本全国おかしくなるわね」

「楽しいもんだと思うけど。デートできるようにしてから言えよ。ガキ」

「うるさい。今度こそ二度と会わないからね」と言っ、歩き出した。

「お前とは縁があるから、何度も会おうよ。絶対ね」と言う声が聞こえた。「縁なんて、ない」と言っ、やりたかったけど、我慢した。ああいうやつは無視するのに限る。学校の男子で、何人か私のことを、「靈感女」と馬鹿にするやつらがいる。最初は言い返していたけど、今はやり過ぎることに決めている。でも、怜奈ちゃんが通にかかると途端にやめるから不思議だ。男子って露骨なやつが多い。さっきの女性も綺麗な人だった。東条さんの好みはそういうタイプなんだろう。父親に似てるのかもねと思った。

偏屈な人3

学校を早く帰るようになったため、

「付き合い悪い。占つてよ」と言われたけれど、

「ごめん。しばらく占えない」と断った。お金を払ってもらえるような占いじゃないってことに気づいて、さすがに気軽に占えなくなつて断った。何人かに頼まれてはいるけれど、誰か一人占うと、「あの子は占ったのに」とぼやいてくる子が必ずいるので、そういうこともできない。

女の子の場合はそういう部分でうるさい子もいるからだ。怜奈ちゃん、

「ほつとけばいいって」と気軽に言うけど、さすがにそういうのもめるのは好きじゃない。男子を取り合つてけんかしていた女の子たちが、グループを組んで張り合っていたことがあつて、それで巻き込まれたこともある。占いでどちらが優勢かを教えると言われてさすがにできなくて、何とかごまかして逃げた。結局、その二人のどちらも振られてしまい、他校の女の子と付き合つたらしくて、その男子はかなり責められてはいたけれど、何しろかつこいい男子だったため、相手に優しい顔で謝られたら、それ以上強く言えなくなつていたらしい。それを見て、「好きになつたほうが負け」と言っていた女子もいた。

「好きになつたほうが折れるしかないってことでしょう」怜奈ちゃんに言われても良く分からない。お付き合いと言つたものをしたことがない。告白はされることもしたこともない。そういうのがどうも苦手だ。神宮寺とは噂になつたらしいけど、私は何も言われたことはない。向こうは適度にモテるのでデートをしていたらしいと言う目撃情報は聞いたことがある程度。誘われたことも誘つたこともなかった。

お店に行つて、掃除をしてから、先生にお金をもらえるような占

いのことを聞いた。

「お金ねえ」と考えていて、

「そうだねえ。一人一人満足する部分が違つこともあるからねえ」

「どういう意味ですか？」

「そうだね。内容重視の人もいれば、ファッション感覚でおしゃれな人に占つてもらいたいとか、素敵な場所で占つてもらわれないと駄目と言う人もいるし、有名な人だったらいいとか、好みが違うからね。若い女性だとそういう人も多い。この間来たお客さんは、ずっと通つてくれている人だけど、うちはそういうのばかりだから。好みの問題かもね。相談しやすいってことも重要なんだろうね」

「相談ですか？」

「そう。女性の場合は恋愛や結婚、進学や就職、子供の相談に、人間関係とか色々あるけど、親身になつて相談したいって言つより、愚痴を聞いてもらいたかったり、話し相手になつてもらいたかったりすることも多いからね。友達にも親にも相談できないことを相談したいってことかもしれないな」

「はあ」

「でも、人によつては真剣にこれからのことを考えたくて、その指針にしたい人だっている。そういうことだよ」

「そうですか。そう言われると周りの人は真剣に占つてもらいたいて子はそこまでいなかっただかも。中には進路相談とか、親が離婚しそうだからどうしたらいいとか、とても相談に乗れないことを言われたこともありますけど」

「そう、それだと困るね」

「未熟だったんですね。と言うか、そこまで考えてなかった。母のところに来る人の相談も近くで聞き耳を立てるわけにいけないので、内容などはそれなりしか分からないし」

「そう」

「先生は迷つたことはありますか？」

「うーん、それはこの年だとあるねえ。前はちゃんと働いていた時

期もあつたし、それに色々嫌がらせされることもあつてねえ」

「大変ですね」

「お金が絡むとね」と言われて、

「え？」と驚いた。とても、お金のことで悩むような人には見えなかった。

「人は変わるよ。こちらは変わったつもりはなくても、人の見る目だけが変わってしまうんだろ？な。真珠ちゃんも人生が変わるようなことがあつても、自分をしっかり持てるようにするんだよ」

「そこまで、何もないですよ」と言つて笑つた。ただ、人生が変わるって程じゃなかったけれど、喪失感があつた。父のことを考えていた。

リサーチ1

エッグシエルの帰りに本屋に寄ったり、買い物をして帰ったら、家の前に見慣れた車が見えた。うーん、困った。母が怒り出しそう。車をトントんと叩いて、車で寝ていた東条さんが起きて、運転席の窓は開いていたので、

「ああ、何だ。今帰ったのか？ 今日遅いな」が言ったのが聞こえた。

「ちよつと寄るところがあつて。それより、何か用？ さすがに困るんだけど」

「なんで？」

「説明したでしょ。あなたは我が家では出入り禁止だから」

「ふーん。親とは関係ないだろ。俺たちの問題だし」

「坊主も袈裟も苦手なんですよ」

「俺は袈裟なのか？ まあ、いいや。確認しに来ただけだから」

「なにを？」

「お前の相手」

「何で、そんなことを確認する必要があるのよ」

「一応、見ておきたかっただけ。強い女が好きになるタイプをね」

「強い？」

「ひよつとして、あれか？」と聞かれて、東条さんが見たほうを見てみたら、雪人さんが歩いてこちらにくるところで、勘がいいやつと思ひながら、

「別にいいでしょ。さっさと帰ってよ」と言ったら、

「ふーん」と言つて、わざわざ車から降りてきた。

「呆れるなあ。早く帰ってよ」

「あれだけ言われて面白くないし。俺とどこが違うと言つのか見ておかないと」

「見なくていい。雪人さんが穢れる」

「雪人さんねえ。あれじゃあ、無理かもな」と言っていたら、雪人さんがそばに来てしまい、

「ああ、真珠ちゃん」と挨拶してくれて、頭を下げた。東条さんもなぜか頭を下げていて、

「お前は子供だ。憧れと恋を間違えてるタイプだね」と、意味深に笑って、

「失礼な」と怒ったら、

「なんだ。まだまだだね。いつまで経っても進展しそもないな。占いは当たったな」

「当たらないわよ」と怒っていたら、雪人さんが不思議そうな顔をしながら、

「じゃあ、自分の目で確かめて見るよ」と意味不明なことを言っていて、思わず雪人さんを見たら、東条さんがそばに寄ってきて、いきなり首の後ろを持たれて、

「きゃあ」と言い終える前に、勝手に唇を重ねてきた。さすがに驚いたけど、東条さんを突き飛ばし、

「威勢はいいよな。でも、まだまだ子供だけだな。恋愛するにはまだ早いね」

「信じられない。何するのよ」

「じゃあな。後で反応を見たら分かるさ」東条さんが雪人さんを意味深に見てから、さっさと車に乗ってしまい、

「え？」と考えている間に、

「じゃあ、頑張れよ」と言い残して行ってしまった。

「真珠。あれは何？」母がすごい勢いでお店から出てきたけど、それどころじゃなくて、思わず雪人さんに抱きついて、その後、泣いていた。母がその後ろで、「塩をまくわ」と怒っていたけれど、それどころじゃなかった。

朝、お弁当をつめ終えて、出かける用意をしていたら、姉が二階から降りてきて、

「お姉ちゃん、ゆつくりだね」と言っただけ、元気が出なくて、
「お母さんから聞いたよ。東条圭吾の息子とできたんだって？ お
金持ちなんだから、せいぜい貢がせなさいね」とすごいことを言っ
ていて、

「朝ごはんは？」と聞いた。

「知らない。ダイエット中」

「また、振られたね？」と聞いたら、

「振ったのよ」と言っただけ、やはりうまくいかなかったらしい。

東条さんが言ったとおりになりそうだ。中々結婚できないかもしれないなあとはんやりした後、首を振って、あいつだけは許さないと
また思った。

リサーチ2

「初めてだったのに」誰もいないところで怜奈ちゃんに東条さんにやられたことを相談したら、

「あら、いいじゃない。結構、いい男だったし」

「そういう問題じゃない。あこがれの雪人さんの前だったんだよ」

「それで？ 反応は？」と意外なことを聞かれて、

「なんで？」と聞き返した。

「だって、真珠のことが好きなら反応が出るでしょ。普通」と聞かれて、泣いていたので、そう言えば、雪人さんがずっと抱きしめてくれていたことしか覚えてなかった。

「怒るとか、それとも、優しく慰めるとか、なにかないの？」

「そう言えば、何も言っただけだった。私もそれどころじゃなかったし」

「ふーん、それが一番困るね。無関心ってことだから」

「え、無関心なのかな？」

「男はやきもち焼く人が多いよ。ただ、時々いるけどね。無関心男。デートしてても会話してても自分の世界で生きてる男」

「うーん、よく分からない」

「困ったね。それだと。まあ、いいじゃないの。これから反応が変わってくるかもしれないよ」

「でも、恥ずかしいよ。どういう顔をして会ったらいいのか」

「いいじゃない。別に。何度も会ってるでしょ」

「でも、毎朝顔を合わせるんだよ」

「なんだ。そっち？ てつきり、東条さんの方かと思ったのに」

「あいつとは二度と会わない」

「そう？ きつと、気があるんだよ」

「ないよ。とつかえひつかえ男だよ。大村と同じタイプ」

「ああ、あいつねえ。ナルシストだからね。同じかなあ？ ちょっ

と違うと感じたけど」

「どうして？」

「大村なら、占いを見学しろって言っても、自分に酔って自慢ばかりしそう。あの人、真珠に色々教えてたから、意外と親切なんじゃないの？」

「え、でも、冷たかったよ」

「冷たくないでしょ。テレビ局に連れてってくれる男ならね。普通はそこまですない。コネと言われて怒ったとしても、わざわざ連れて行かないよ。それに占いも見せないと思う。意外といい男だと思う。本心が分からないように見えるけど、態度に出てるじゃない」

「意味不明」

「分かりやすい優しさだけじゃないってこと。分かりにくい人もいるよ。態度の分かりやすい優しい人ばかりじゃないよ。口で憎まれ口を叩きながら意外と優しいタイプかもね。いいかもしれないよ。そういう人のほうが」

「なんで？ 逆じゃないの？」

「口先だけの優しい男だとデートしても、すぐ飽きておしまいになりそうだけど、大村とは違うと思うなあ」

「怜奈ちゃんがそう言うならそうなのかな。でも、憎らしいことばかり言うよ」

「素直じゃないだけでしょ。それに真珠は人のことは言えないからね」と言われて考えていた。

行きたくないなあと思いながら、エッグシェルまで歩いていた。途中でクラクションが鳴った。そちらを見たら、東条さんの車で、慌てて走って逃げた。

「あ、おい」東条さんが車を止めて、そう言ったけれど、私には聞こえなかった。

リサーチ3

「元気がないねえ」とおばさんに言われてしまった。近所に住んでいるおばさんで、子供が結婚するので、それを占ってもらいに来ていた。

「ごめんなさい。向こうに行ってます」と言ったら、

「いいよ。お茶を入れてあげるから、元気出さないよ。うちの娘もそういうときがあつてねえ」と優しく言ってくれて、

「すみません。私が入れないといけないのに」とため息をついて座っていた。今日は元気がなくて、掃除をしながら何度もため息をついてしまい、師匠が心配してくれて、

「やらなくていいよ、無理しなくても」と言うのも聞こえなかったぐらいだった。

「真珠ちゃんが元気がないと、橋添さんも元気なくなるでしょ」と師匠に聞いていた。

「そうだね。色々やってくれるから助かってね」

「部屋が片付いているものね」と言つて、お茶を出してくれて、頭を下げた。

師匠が占いの続きをしだして、

「うーん、そうだねえ。向こうの家では反対してるだろう?」と聞いていた。

「そうなのよねえ。困っちゃって。家の格がどうか、うるさいことを言ってきてね。息子さんは娘を気に入ってくれても、親はもっといい家の娘を、と思っていたらしいのよ」

「そうかあ。困ったなあ」と言つて、相談にのっていた。

「カードと内容が違っていてもいいんでしょうか?」お客さんが帰ってから、かなり経ってから、そう言えば占い結果がカードと違っていたのを後で聞こうと思ひ出して、聞いてみた。

「ああ、あれねえ。そうだね。相手にとっては一番心配な部分があるだろう？ だから、拡大解釈して相手にとって一番いいと思える言葉に変えたただけだからね」

「どうしてですか？」

「占いも大事だけど、相談所みたいなものだからね。だから、相手の話を聞いてあげる必要があるんだよ。自分でも迷っていたり、でも、自分一人で考えるには気が重いことだってあるだろう？ そういうときに誰かに聞いてもらって楽になりたいと思うからね。だから、今日の話も内緒だからね」守秘義務のことは何度も注意されていた。

「分かりました」

「真珠ちゃんと言うような子じゃないと分かっているけどね。でも、お客さんはうちを信用して来てくれているからね」

「お金をもらって相談に乗る以上、ちゃんとしなさいといけないってことです」

「それより、元気がないね」

「初恋が実らないと言われてしまったんです」

「うーん、そうか。僕も実らなかったし、そう言われたら、そばにいた人のほとんどが実ってないかもね」そう言われたら、そうかもしれない。厳密に言えば、前にもあこがれた人はいたことはいた。ただ、すぐに気に入らないと言うか、駄目な部分が見えて、熱が冷めたものばかりだった。長続きたのは初めてだったので、初恋と言えなくはないなと思った。

「自分からいかないと駄目でしょうか？」

「女の子から行くのもいいとは思うけどね。できる？」と聞かれて首を振った。

「そうだね。自分がしたいと思えるなら、してもいいね。でも、無理はしない。僕はそうやって奨めているよ」

「そうですか。なんだか、言えなくて。相手は大学生で頭も良くて優しくて、完璧なんです」と言ったら、笑われてしまった。

「完璧な人なんてこの世にいないと思うけど」

「でも、すごいんです。国立大学に行っているのに偉ぶらないで、私のことも優しく接してくれて、学校の男子と大違いで」

「年齢が上だからかもしれないな」

「でも、同じ年齢でも失礼な人もいますよ」東条さんを思い出して、首を振った。思い出したくない。

「そうだね。精神年齢と実年齢が合わない人は大勢いるね」

「私も低いからなあ。恋愛年齢が小学生だと言われることがあって」

「そう？　好きな人はいるんだろう？」

「友達がデートした数が多いから、それで言われてしまつて。私はゼロだから」

「そうなんだ。一度、デートしてみるとか？」

「友人に薦められた相手は友達としか見えなくて」

「そうか。じゃあ、無理しなくてもいいんじゃないかなあ」

「先生は恋愛に悩んだことはありますか？」

「うーん、それなりにあつたけどねえ。何しろ、昔のことだし」

「昔ですか」

「僕も一度だけ結婚したことはあるけどねえ。逃げられちゃつたし」

「逃げた？」と言つてから、

「すみません」とうつむいた。

「いや、お客さんもこの辺りの人もみんな知ってるからいいよ」

「そうですか」自分の家のことを思い出した。それだと色々言われるだろうなあ。

「色々あるかもしれないけど、真珠ちゃんは真珠ちゃんらしくしていればいいと思うよ」

「私らしくですか」うーん、難しいなあ。人の恋愛を占つてばかりいて、友達のデートや喧嘩話はいっぱい聞いてるけど、自分のこととなると。

「やっぱり無理ですね。よく分からないし」

「明るくしてなさい」と言われて、うなずいた。

リサーチ4

帰える途中で東条さんの車が止まっっていて、嫌だったので駆け出したら、慌てて東条さんが降りてきて追いかけられてしまった。早めに走ったつもりだったのにすぐに追いつかれ、

「意外と早いな」と言いながら、それほど息も切れていなかった。

私は、「はあはあ」言いながら、

「離してよ」腕をもたれていたので払ったら、

「何、怒ってるんだ？」と驚いていた。

「無神経にもほどがある。……昨日、何したのか覚えてないとでも

……言うの」息も絶え絶えになんとかそう言ったら、

「ああ、あれ」と軽く言ったので、

「何で、あの人の目の前でああいうことをするのよ」

「別にいいだろ。それぐらい」

「そ、それぐらいってねえ」呆れてものが言えない。

「あなたと違って、こっちはそれぐらいじゃないの」

「ふーん、そういうのを大事にしてるんだな」

「あなたはそれほどじゃないかも知れないけど、私にとっては大事なの」

「ひょっとして初めてなのか？」と聞かれて、思いつきりにらんだ。

「ふーん、それは知らなかった。その年だと経験済みが多いと思ってたからな」

「あなたとは違う」

「俺は小学生だったし。しかも、何人にも세가まれて」

「はあ？」

「それぐらい普通だろ」

「おかしい。あなたは絶対におかしい」と言い合っていたら、そばを通り過ぎる人がこちらをちらちらと見ていたので恥ずかしくなった。

「送ってやるよ。ここで話すのもおかしいからな」と言われて、辺りを見回したら、何人かこちらを見ていた。

渋々送ってもらいながら、しばらく無言だった。

「それで？」東条さんに聞かれても窓の外を見ていた。

「反応は？」

「怒ってるわよ」

「それはお前だろ。あの男はどうだった？俺が見たところ、無反応だったからな。だから、あの後も」と言われて、怜奈ちゃんと同じことを聞くんだなと思ったけど、

「抱きしめてくれていただけ」

「あいつが？ありえないだろ。そういうところに気を使わないタイプだな。勉強以外にそれほど興味がないだろうし、およそデートもほとんどしてないタイプだろうな。うちの学校にもいるから、あいうタイプ」

「あなた、どこの学校よ」

「宝陽」

「お金持ちの行く学校ね。見栄っ張りなあなたにぴったり」

「見栄ねえ。確かにな。親のエゴも関係あるかもな」

「エゴ？」

「父親は特にそういう部分を気にする。ああ、母親も同じだったな」

「過去形ですか」

「うちも離婚してるから」

「『も』？私のところは違う」

「だって、今はいいんだろ」と聞かれて、悲しくなって横を向いた。しばらくしてから、

「ごめん」と東条さんが謝ってくれたけれど、説明するのも嫌だった。

「雪人さんとは違うね。あの人は、国立だから」

「東大か？」と聞かれて黙った。

「じゃあ、別のところだ。H大って雰囲気じゃないな。T工大か、T農工大？」と聞かれても黙っていたら、

「当たり前だ」と笑っていた。

「別にいいでしょ」

「ふーん、なるほどな。そういう感じではあったな。でも、諦めろ」
「なんでよ」

「お前に脈アリなら、それなりに反応するだろ。でも、ノーリアクションだったから。お前の気持ちにすら気づいてないかもよ」
「え？」

「そういうタイプもいるさ。お前がいくら好きだと言う目線で相手を見ていても、それに鈍感なタイプもいるから。あの人はお前がはつきり意思表示しないと分からないタイプだろうなあ」うーん。

「でも、お前にはそこまで無理そうだ。俺にしておけ」

「やだ」

「即答するな」

「あなたのコレクションに加えられるのは、嫌。いくらでもいるでしょ。デート相手」

「ああ、あれね。デートと言えばデートだけど営業もあるし」

「営業なの？」

「半々かな」

「ホストみたいだね」

「お前、何か勘違いしてないか？」

「家まで迎えに行つて、食事をおごつて、相手をほめて、その気にさせて、家まで送ってあげれば、誤解されるでしょ」

「ああ、そこまではしないよ。ほとんどは女性の奢りだから」

「それはひどくない？」と聞いた。

リサーチ5

「そういう相手しか受けてないよ。こっちが払う相手だとお金が続かないだろ。それに勘違いされない程度で抑えているし、家まで送らない。せいぜい、駅まで。迎えに行くことはしたこともないし」

「ふーん、でも、デートでしょ」

「デートと言えばそうかな。でも、リサーチをかねてるし」

「リサーチ？」

「女性との会話で色々勉強中だからね」

「呆れた。それじゃあ、相手がかawaiiそうじゃない」

「喜んでるよ。相手はうれしそうに食事してるし、気分良く帰ってるし」

「次のデートでも？」

「ああ、合わないタイプ、会話しても底が見えるタイプは二度目はないよ。でも、続いても、せいぜい数回程度」

「とつかえひつかえになるわけだ」

「誘われると断れなくてね」

「評判が悪くなりそう」

「そうか、俺の周りも似たようなものだけど」

「宝陽って、遊び人のナンパ師が多いって聞いたことがある」

「誤解だな。俺は誘われたことはあっても、そこまで誘わないよ。深入りされると困るし」

「浅い付き合いなんだ」

「広く浅くがモットー。親父と同じ」

「お父さんに似たのね。うちの父親と大違い」

「お前の父親のタイプなら分かるな」

「知らないくせに。有名じゃなかったよ」

「有名？」

「画家だったの」

「ふーん。でも、分かるって言ったのは別の意味。雪人って人に似てるだろうな。性格か顔か、そういう部分が」と言われて驚いた。そう言われてみたら、確かに似ている部分があった。父も優しくて怒ったところを見たところがない。穏やかで海のような人だった。思い出して辛くなつてうつむいてから、

「気にしない」と呪文を唱えた。

「なにが？」と聞かれても黙っていた。

「画家の娘にしては、趣味が悪いかもな」

「趣味？」

「受ける場所に合わせて服装を選んでこないからな」

「え、どういう意味？」

「普通はサバトを受験する前に、リサーチはするだろ。その有力者の好みの服装って言うのがあるだろうから、それに合わせて服装から髪型とか、色々変えてきてもいいと思うけど。お前は野暮ったかったから」

「失礼ねえ。普段着で行って何が悪いのよ」

「今度からそれぐらいは気を使えよ。占い以外にも気配りは必要だし、そこまで考えてなかったの、ちよつと落ち込んだけど、

「母子家庭だと無理だよ。あなたのようにおこづかいたっぷりじゃない。バイトも許可が要る学校だしね」

「家でバイトしろよ」

「プロキオンと違って、お客さんはそれほど来ないの」

「営業努力が足りないな」

「お坊ちゃまに言われたくない」

「俺は高校までは確かにおこづかいはもらってたけど、大学からは自力だ。だから、ずっとバイトしてるんだし。友達もあまりただでは占わないからな」

「え、そうなの？」

「母親がそうしたんだよ」

「お父さんがくれるんじゃないの？」

「父親は見栄っ張りだけど、車を買ってくれた程度。おこづかいとか生活費とか、そういうものは親父の秘書が管理していて、俺がもらえるのはお前と変わらない程度のおこづかいだけ。母親は気前は良かったけど、大学からは『自分で何とかしろ』って言われたからな」

「ふーん、でも、もらえるだけいいじゃない。お姉ちゃんなんて、学校に内緒でバイトして貯めてた」

「ふーん、しっかりしてるな」

「ある部分だけしっかりしてる」

「お金だろう？」と聞かれて、にらみたくなった。

「ああいうタイプは早めに終わらせたくてね」

「え、それで、早めに席を勧めていたの？」東条さんは姉だけは世間話は少なめで、早めに席を勧めて、早めに占っていたように感じた。

「ああ。相手に合わせるからな。せっかちな人には早めに、苦手なタイプはそれなりに、学生は毎回似たような相談だから、それで早めになるし」

「そう言えば、気になってた。学生割引と内容の濃さが関係あるってどういう意味？」

「だから、働いている人だとそれなりに悩みが深かったりするんだよ。学生だと成績や親、友達、恋愛が一番多いからな。それでそこまで時間は掛からないから早めになるだけ」

「料金に合わせて占ってるってこと？」

「そういうわけでもないけどな。働いている人だとじっくり占いを聞きたがる人もいるよ。それで時間が掛かる人が多いだけ。学生だとそこまで熱心なのは少なかったよ、俺はね」

「あなたの場合はファンが多そうね。雑談のほうが多くなるタイプでしょ」

「それも大切だろ。また、来てもらわないといけない。気分良く帰ってもらい、また、来たいなと思ってもらわないと。リピーターが

多くないと成り立たないからな」
「商売上手だね」としか言えなかった。

リサーチ6

「お前もそれぐらい努力しろよ。まだまだなんだよな。しばらく掛かりそうだ」

「どういう意味？」

「俺と付き合ったら教えてやるよ」

「断る」

「即答だな。少しは考えろよ」

「好みじゃない」

「俺は好みだけだな」

「この間から何度も見かけた女性にも同じことを言ってる」

「それなりには並べるよ。相手が喜びそうなことをね。ただし、本気になられたら困るから、抑えるけど」

「ホストになったほうがいいんじゃないの？」

「同じだろ。話を聞いてもらいたい、優しくしてもらいたいってところはね」

「え？」

「相談に乗るんだから、そういう部分で気を使えよ。お前の場合はまだまだだよな」

「うるさいの」

「あの人は教えないのか？」

「あの人って誰よ」

「お前の先生」

「え？」

「エッグシエルで働いてるんだろ」

「何で知ってるの？」

「プロキオンの占い師が教えてくれた。女子高生が働いてるって。近所で評判になってたみたいだね。それで、分かったんだよ。お前だろうなって。この間から何度も見かけたのはそれだったんだと気

づいたからな」

「あそこが評判になるものなの？ お客さんが少ないよ」

「だって、あそこはある意味、みんなが知ってるぞ」

「どういう意味？」

「だって……、」と言いかけて、「まあ、いいや。それより、どうだ？ 割と評判はいいらしいな。占いとしてはどうか知らないけど」

「どういう意味？」

「ああいう人も占い師として必要だってことだ」

「意外。あなたは認めないんじゃないの？ ああいう人は。お客さんも少ないから、自分のところは多いから、相手にもしてないように見えた。街角の占い師なんて認めなさそうに見える」

「馬鹿。意外と、ああいうところはリピーターが多いんだよ。それで何年も続けていたりするからな。あの人も同じだ。お客さんは少なくても大丈夫だろうし」

「そう？ 家ぐらい綺麗にした方がお客さんが増えるだろうし」

「商売としてやってるんじゃないかもな」

「え、どういう意味なの？」

「先生に聞けよ。さすがにあの前には車が止められなくて、通りで待ってたけど、逃げ出すことはないだろうに」

「待ち伏せしてたの？」

「あの後、どうなったかを確かめてくてね」と笑ったので、

「最悪よ。あなたのせいだね。顔を合わせられない」

「俺にしておけばいいさ。今度、大学にでも遊びに来いよ。学祭の打ち合わせもあるし」

「学祭？」

「俺も実行委員会主催のイベントに参加するから」

「ふーん、いいよ、行かない」

「迎えに行つてやるから」

「来なくてもいい。塩を3度もまかれたくない」

「なんだよ、それ？」

「あなたが帰った後にまいてたからね。よほど嫌われてるよ、あなたたち親子」

「親父が泣かした女の一人かもな。親父も手が早いから」
「似たもの親子だ」

「携帯番号、後で教えるよ」

「絶対に、嫌」とにらんだ。

勘違い 1

「また、振られたんだよ」と、クラスメイトの高津が目の前に座った。

「またあ？」そばにいた連中がいつせいに笑った。高津は女の子にだまされてばかりいる。男子は女の子の表面しか見てない人も多いから、見た目だけで選んでは、貢がされて終わったり、二股掛けられたり、化粧が上手だったのに目が大きいと勘違いして、すっぴんを見てから冷めたり、ということが多く、それでばやいている人も多かった。

「かつこいいと言われた」「目が合った」「ほめられた」と言った男子が、全部、「俺に気があるようだ」と言うたびに、

「ないない」と女子に笑われている。それぐらい勘違いしやすい人も多い。私も目が合っただけで相手が勘違いする目つきで見たり、態度をされたりしたことは何度かあった。ただ、いちいち相手にしていられなくてほつといた。怜奈ちゃんは何度誤解されているか分からないぐらいあるらしく、噂はいくつか流れていた。でも、怜奈ちゃんは、

「ありえないから」と言っていた。相手がかわいいとそれだけ誤解される率が高くなるところが不思議だ。

「男子って単純だからねえ。また、同じ理由でしょ」とみんなが呆れていた。デートコースを決めていない、途中で無神経な言葉を言った、ペース配分を考えず歩き続けて疲れさせた。と言うのが主な理由だった。

「神経つなげるほうを先にしなさい」クラスの女子に説教されていて、

「気をつけてるよ」高津がばやいていたけど、

「つながつてるように見えるか？」そばで男子が言い合っていた。

確かに高津は無神経と言われてもしかたないくらい、変なことを

平気で言う。「指、太いな」「太ったんじゃないの?」「髪型、前のほうがいい」と言っては、「それを口に出す必要はないでしょ」クラスで仕切ってる女子にかなり怒られていた。かわいい子以外は女じゃないぐらいのことを平気で言う。

「占ってくれ」高津が頼んできたけど。

「ごめん、無理」と断った。これで何度目か。気前はいいので映画のチケットをくれたり、イベントのチケットをくれたりして、それはそれでいいけど、

「ごめん。占いはしばらくできない」

「え、なんで?」と聞かれて、

「みんなも断ってるぐらいだから、ごめん」頭を下げた。東条さんの言うとおり、中途半端だから、占いをできる心境じゃなかった。気軽に友達に占うのも、今は抵抗があった。

「なんだよ、いいじゃないか」とぼやいていたけど、

「ごめん」と謝った。

「無理だつて。何度注意したつて、それで終わりじゃない。高津が反省して学習したのは見たことないよ。都合が悪いと流すくせに」女の子が怒っていた。前に高津と付き合っていたらしいとは聞いていたけど、高津とは良く喧嘩している女の子がぼやいていた。

「お前の振られた記録、塗り替えておかないとな」と後ろの席に行つて、紙にバツ印をつけていた。数字を書き入れて、

「今度も日数が少ない」とみんなが笑った。

「悪趣味だよ」クラスでもしつかり者の女の子が怒っていたけど、みんなはそういうところで気にしない人も多い。遊びやいたずらが多いから、それで、そこまで気にしていないようだ。男子は落着きがないうし、女子はおしゃべり好きが多くて、にぎやかなクラスだった。一部の女子を除いて、割と仲がいい。

「ほつところ」怜奈ちゃんがそばに座った。高津は怜奈ちゃんにもデートを誘っていたけど、今は諦めたみたいだ。怜奈ちゃんの好みじゃないらしい。

「男子って、何で、何度も同じことを繰り返すのかしらね」そばにいた女子が言い合っていて、私はぼんやり考えていた。

勘違い2

学校から帰る途中に嫌な車が止まっているのが見えて、

「げ、なんで」と思わず言った。近くにいた神宮寺が聞こえたらしく、

「なにかあったのか？」そばに寄ってきて、

「えっと」説明するのもどかしかったけど、あいつが車から降りてきて、近くに寄って来てしまい、

「迎えに来た。家に電話しても居留守使うだろ」と言われて東条さんをにらんだ。携帯番号を教えなかったら、ムーンフェイスのほうに電話をしてきて、「営業妨害」と言って電話を切った。その後は全部居留守にしておいた。エッグシエルで待ち伏せされても困るなと思ったけれど、そういうことはしなかったので安心していたのに、「知り合いか？」と、神宮寺が気に入らなさそうな顔をしていた。「ナンパ師」と答えたら、神宮寺が上から下まで見た後、
「なるほどな」と言ったので、

「誤解してるな。俺はナンパなんてしたことは一度もない」と東条さんが反論していたけれど、

「お店でしてるくせに」

「あれは営業」

「とにかく、行こうぜ。打ち合わせがあるし」と腕を持ってきて、
「絶対に嫌。係わり合いになりたくないから、二度と来ないで」と腕を払った。

「約束があるし、お前が何度も電話を拒否するから」

「あなたと関わりたくないの。二度と来ないで」

「そういうわけには」

「嫌がつてるだろ」神宮寺が止めてくれて、

「君には関係ないよ」東条さんがそっけない態度だったので、

「俺の彼女にそういう態度しておいて、『関係ない』は、ないだろ」

と神宮寺が言い出して、驚いたけど、

「『彼女』ねえ。『今だけ彼氏』に言われたくないな」東条さんがおかしそくに笑っていて、

「これからデートだよ。悪いけど、おじさん、帰ってくれよ」

「おじさんか。似た者同士だな。でも、約束があるから引き下がるわけに行かなくてね」無理やり腕を持ってきて、神宮寺がその腕を引き剥がしてくれたと思ったら、次の瞬間、神宮寺が反対に押さえ込まれていた。

「え、どうして？」としか言えなくて、

「彼氏の振りして逃げるのは無し。そういうのは分かるからね、俺と言うわけで、俺の勝ち」と言いながら、東条さんが腕をつかんできて、その後、身体を抱え込むようにしてきて、歩かされて、

「ちょっと、大丈夫なの。神宮寺」うずくまってる神宮寺が心配で何度も振り返ろうとしても東条さんが無理やり強い力で押してきて、

「大丈夫。それなりに手加減したから」

「手加減って、神宮寺に何をしたのよ？」

「力で抑え込もうとしたから、返しただけ」

「ひどいじゃない」

「お前が素直に従っていたら、こうなってないだろ。あいつのことはほっとけ」

「冷たすぎる」東条さんは意外と力が強くて、無理やり車に乗せられてしまい、

「神宮寺が」と言っただけで、

「言うことを聞けよ。あいつなら、ほら」と見たら立ち上がっていた。神宮寺が走ってきて、

「何するんだ、オッサン」と怒っていた。最初が「おじさん」だったのに、「オッサン」に格下げされていた。神宮寺は育ちは悪くないのでそういう言葉遣いはしないほうだけど、今は怒っているように、

「ほら、逃げるぞ」いつの間にか、ドアを閉められていて、東条さ

んが運転席に座り込んでいて、神宮寺が追いついたときには車をスタートさせていた。

勘違い3

「ひどすぎるよ。神宮寺が心配してるから」神宮寺はしばらく車を追いかけてきてくれたけれど、そのうち姿が遠くになってしまい、角を曲がって見えなくなってしまった。

「大丈夫だって」と言っていたら、携帯が鳴って、出たら、すぐに降りろ。大丈夫か？」と聞いてくれたけれど、

「えっと」と東条さんを見たら、笑っていて、

「笑い事じゃないわよ」と怒った。

「おい、大丈夫なのか？」神宮寺が心配してくれて、仕方なく、
「大丈夫だから、このおじさんと一緒に行かないと。結構、しつこいの、このおじさん」

「何度もおじさんと言っなよ」東条さんが怒っていたけど、
「後で電話しろよ。心配だから」と言ってくれて、後で説明すると告げてから電話を切った。

「訂正しろ。おじさんじゃないからな」

「クラスの男子が、『オッサン』と言ってたよ。大学生に彼女を取られた男子だけど」

「ふーん、悔しかったら取り返せばいいだろ」

「無理。その男子、『お金がないから振られた』って言い訳してたけど、素行があまり良くないらしいから」

「そうか。お前の学校ってそこまで荒れてないだろ」

「ごく普通だよ。それなりにお金持ちもいれば、それなりに貧乏もいるからね。うちみたいに」

「なるほどな」

「あなたとは住む世界が違うから分からないだろうけど」

「いや、話は聞いているよ。お客さんで来るからな」

「そう。女性専門でしょ」

「違うけど」

「だって、男性を見かけないよ」

「少ないだけだよ」

「先生のところと違うね。秋さんも男性が何人か混じるよ。お母さんは年配の男性も占ってるし。あそこは若い女性ばかりだから驚いたもの」

「客層の違いだけだろ」そうかなあ？と首をひねってたら、雑誌にテレビで紹介されたら、お前のところもそうなるさ」

「昔は来てた。女子高生がいっぱい来てたときもあるけど」

「なら、分かるだろ」と言われて、横を向いた。

「どうかしたのか？」

「東条さん、男性に嫌われるタイプなのかもね」

「嫌われてないよ。友達は何人かいるし」

「神宮寺には確実に嫌われたと思うけど」

「時間が掛かりそうだから撃退しただけ。ライバルなら当然だろ」

「ライバル？」

「彼女にしたいって思ってるだろうから、あいつも」

「『も』じゃない。あなたはコレクションの一人に加えたいだけ。

彼女じゃない」

「ずっと探してたんだ」

「なにをよ？」

「彼女になりそうな子を」

「意味不明」

「そのうち教えるよ。お前は貴重だからな。今までより長く掛かってるし」

「今まで？」

「それより、あの男のほうがお前向きかもな」

「どういう意味？」

「雪人って男より、はるかに脈アリだろ」

「あれで？ 神宮寺は友達だってば。それに、あなたから助けくれようとしただけ」

「彼氏の振りをしてまでか？」

「いいじゃない。善意の行動よ」

「善意ね。あいつ、お前のことが好きだろうな」

「どうして？」

「『雪人さん』と違って、怒ってたから。だから、言っただろ。気がある相手ならあやって反応があるって。見事に出てたな」

「神宮寺は友達だから怒ってくれたの。失礼なおじさんから守るための嘘をついてくれただけでしょ」

「お前、かなり鈍いんだな。それで占い師見習いなのか？」

「うるさい。それより、私を連れて行く意味がわからない」

「着いたら分かるよ」とうれしそうに笑っていて、

「あなたの行動がつくづく分からない。変な人」と言ったらさらに笑っていた。

勘違い4

無理やり連れて行かれて、大学に制服で入っていくのは初めてだったので、ちよつと緊張したけれど、何度が挨拶されていて、

「あなたって、顔が広いね」

「営業もしておかないと、将来の顧客候補」

「商売上手ね」

「当たり前だろ。俺はそれを仕事にするつもりだから、今から準備しておかないと。あいつらは、いつか仕事などで成功するかもしれないしね」

「成功しなかったら？」

「してもしなくても、相談に来る人はいるだろうな。誰でも、何かがあるだろうから。親、恋人、結婚相手に、子供ができたら、それで色々」

「ふーん」としか言えなかった。私はそこまで考えている余裕がなかった。かなり歩かされて、たどり着いた場所では何人か人がいて、あちこち話し合ったり、うるさかった。学園祭の実行委員会ではそれなりに資料を作っていて、絵コンテなのか紙に説明文が書かれたものがいくつか机に散らばっていた。男性が寄って来て、

「今度の目玉にするからね。占いの企画に花を添えたかったけど、東条さんの好みにしては珍しいね」と言われてしまい、

「地味ね」そばにいた女性がこつちを見ながらどこか馬鹿にするような雰囲気、ちよつと嫌だった。そこまで言わなくてもいいのに。「制服だから、いいよなあ」細い目の男性がじろじろ見ていて、ちよつと気持ち悪かったけど逃げるようにして、東条さんのそばに行つた。

「あれはなに？」と聞いた。

「占いの企画で、俺の意見を聞きたいって言うからな。それで、お前にも参加してほしいだけ」

「やだ」

「そういうことを言うな。ここまで来ておいて」

「無理やり連れてきたのは、誰？」と言いついていたら、

「あら、珍しいね。いつもはフェミニストなのに言い合いして」優しそうな綺麗な女性がそばに来たので頭を下げた。

「かわいらしい人ね。珍しいわね。今までで一番若いんじゃないの？」相手に言われて、東条さんを見たら、

「小学生もいたから」と答えていた。

「全滅だったんでしょ。推薦してくるなら、よほど気に入ってるのね」と言われて、東条さんをにらんだ。いったい、何人、連れてきたんだ。東条さんは笑っているだけだった。

帰る途中で、「お前には珍しい子を連れているな」と、男性が寄ってきて、私をじろじろ見ている、

「お、また、女連れ」男性のグループが近寄ってきて、東条さんの友達らしく、何か言い合っていた。

「お前も懲りないね。今度で何人目だ？」

「彼女は違うよ。お客さんじゃなくてね」

「ふーん、それで冴えないんだな」とはつきり言われてにらんでしまった。

「気は強そうだ」相手はひるむことなく、笑っていて感じが悪かった。お金持ちの家の出なんだろうなと言う服装や持ち物で固めていて、好きになれないタイプが多かった。

「じゃあな。今度も報告しろよ」と、行ってしまった。

「私が落ちたら報告するの？」と思わず聞いたら、

「良く分かったな」と笑っていた。前にクラスメイトがやられたことがある。大学生で落とした女の数を競いあっていたそうで、相手が本気になったら捨てておしまい。大村よりも性質が悪かった。

「ああいうのはちよつと駄目」

「はつきり口に出さないほうがいい。あれでも親が力を持ってるか

ら。うらまれたら、お前の店なんてひとたまりもないぞ」

「気に入らない相手に、そういうことをするような人たちと付き合い
つてゐるの？」と驚いたけど答えなかった。

勘違い5

送ってもらいながら、

「あなたの場合は友達が悪いから、ゆがんでるのかもね」

「口に出すなと言っただろ。付き合っただ損はない連中だよ」とそっけなかった。

「友達じゃないの？」

「さあな」と言っただので、驚いた。

「だって、宝陽なら、小さいころから一緒にいるでしょ」宝陽はエスケーター式で、よほど素行や成績が悪くなければ、そのまま上まで上がれると聞いている。

「友達は何人が変わったよ。でも、それなりに付き合いはいるさ。

親の商売にも関係あるだろ。お前も気をつけるよ。あいつらの言葉は聞き流せばいいさ。見下されてもね」

「それが友達なの？」

「お前の学校にはいないのか？ 親の権力で威張ってる連中」

「一部だけ。バラバラだよ。そばにも寄れない人はクラスにいるよ。取り巻きと一緒にいるだけで、行事にもほとんど参加しないぐらいだし」

「行事？」

「運動系は見学が多いし、学園祭も何もしない。文句は言うけどね」

「ふーん、そういう人もいるかもな」

「だから、クラスでは浮いてる。うちのクラスは無関心な人もいるけど、割と行事好きが多くて、盛り上がるのが好きだからね」

「なるほどな。あの男もか？」

「誰？」

「神宮寺」

「呼び捨てにしないでよ。あいつは違うクラス。それに、向こうのクラスはバラバラで行事も無関心な人が多いらしいから。担任がや

る気ないからね」

「それはあるかもな。担任の性格がクラスの気質に影響はあるだろうな」

「そうかも。友達の性質が女性をとつかえひつかえするのに影響があるのと同じ」

「そうか？ 俺の場合はあいつらの影響もあるかもしれないけど、親父のほうが強いのね。向こうもデートに忙しくて家になんて帰ってこなかったし」

「今も？」

「付き合いが多いからね」

「ふーん、あなたも卒業したら同じことをしそうだね」

「しないよ。しばらく見習いだし」

「でも、今と同じことを続けそうだね」

「さあな、飽きたらやめる予定だけど」

「やめられるの？」

「お前が付き合い合ってくれたら、やめてやるよ」

「私には関係ない」

「関係あるさ。それに、女性心理を勉強するにしても、最近はマンネリ化してきたから、そろそろ本命を見つけてもいいかもな」

「本命ってね」と呆れていたら、

「俺で勉強したらいいさ」

「勉強にならないでしょ」

「男の本質、女の本質を知らないと占うには無理だろ。お前は基本的に恋愛関係の勉強がなってる」

「だからって、とつかえひつかえ女性と付き合い合っとうするのよ」

「色々なパターンの女性がいるから、勉強してるだけ」

「ものは言いようね」

「人のことをとかく言う前に、初恋相手とデートしてきたら。一度、男女の関係になったら、相手の本質が分かるさ」

「だ、男女……」とそれ以上言えなくて、顔が赤くなっていたらし

く、

「顔が赤いな。これだから、お子ちゃまは困るね。占いに来る女性
の一番の悩みは恋愛。今からでも遅くないから勉強したら、それと
も、俺が教えてやろうか」

「あなただけには教わりたくない」

「あいつには無理だと思うけど。同じ年とデートしても、喧嘩して
終わりだろうな」

「あなたとも同じだと思う」

「デートしてから言えよ」

「絶対に嫌」

「余裕がないねえ」

「絶対に無理だよ。母は反対するからね」

「母親に反対されたぐらいで諦めるのか？」

「心配掛けたくないし」

「子供だな」

「お姉ちゃんと同じことはできないよ」

「なんで？」と聞かれて黙った。

「勇気がないだけだろ」

「違う」

「じゃあ、なんだよ」

「言いたくない」とそっぽを向いた。

神宮寺1

神宮寺には電話はしたけど、怒っていて、なだめるのは大変だったけど、学校で会ったときに、

「あいつ、やめておいたほうがいいぞ」と言ってくれて、ため息をついた。私もそう思うけど、向こうはそういうのでしつこそうだよほど、振られたくないのかもしれない。武勇伝に泥を塗りたくないだけかもしれないな。

「俺が追い払ってやるから」

「いいよ」

「恋人として追い払ってやれば」

「その手は使えないんだよね。この間のもバレちゃって」

「本当にすればいいだろ」と言ったので驚いた。

「どういう意味？」聞いてから後悔した。真面目な顔をしていたからだ。それで目をそらした。

「お前、俺のこと、どう思ってる？」と聞かれて、考えてしまった。そんなことは考えたこともなかった。

「ごめん、友達」

「それ以上は？」と聞かれて、

「ごめん」と謝った。雪人さんのことばかり見ていたから、神宮寺が言ってくるとは夢にも思わなくて、考えられなかった。

「一度考えてみてくれよ」と言われて神宮寺を見た。

「だって、神宮寺は何度かほかの子とデートしてたから、私は好きじゃないんだと思ってたし」

「言えなかったただだよ。そういう顔をするだろうと思ってたし」と言われて驚いた。

「え、どうして？」

「鈍すぎる。俺が告白したら、お前は困るだろうと思ってたからな。お前、大学生で好きなやつがいるだろ」

「どうして知ってるの？」

「クラスの女子に聞いた。お前と澤井が話していたのを聞いていたみたいだぞ」怜奈ちゃん以外には教えてないから、誰かに聞かれてしまったのかもしれない。

「ごめん」

「その人と付き合うつもりか？」と聞かれて首を振った。

「無理。あの人は私のことなんて、見てくれてないらしい……から」態度の違い、確かにあるかもしれない。神宮寺のあのときの態度は雪人さんと明らかに違っていた。

「そうか。だったら、考えてくれよ」

「そう言われても」

「嫌なのか？」

「違う。神宮寺とは友達として見てたから、いきなり言われても、どう考えていいか」

「じゃあ、今から考えろよ」そう言われても、苦手だなあ。こういうのってどうしたらいいんだろ。

「やっぱりそうだったじゃない」帰るときに怜奈ちゃんに相談したら、呆れられてしまった。

「どうしたらいいと思う？」

「自分で決めなさい」

「それは分かってるよ。占いでも人にはそういうことは言ってるけど、いざ、自分のこととなると困る」

「東条さんはどうするのよ？ 噂にはなってたよ」それは嫌というほど聞かれたから分かっている。神宮寺とのやり取りを見かけた子が好き勝手付け足して噂を流してくれたらしい。

「無理。あいつだけはありえないよ。一番苦手だから」

「そう？ 意外と向こうは本気かもしれないよ」

「そう思えないよ。とつかえひつかえの現場を見た後に誘われても、うれしくもなるともないよ」

「それでもめげないかもしれないね。あの人、慣れてはいるだろうしね。強引だし」

「ほっとく。関わりたくない」

「雪人さんに告白したら」

「振られるの怖い」

「振られるかどうかは分からないでしょ」

「毎日、会うからね。それになんだか悪くて」

「どうして？」と聞かれて黙った。

「ひょっとしてお父さんのこと？」と聞かれてうなずいた。

「真珠の恋愛音痴ってそこから来てるかもね。ファザコンなんじゃないの」

「違うよ。お父さんにちゃんと紹介したいの。今はそれができないから」

「そう」怜奈ちゃんがこちらを見ていた。

「雪人さんに何度も告白しようと思ったけど、でも、なんだかできなくて。お父さんがいてくれたら、どう言ってくれただろうなあ」

「真珠のことを一番考えてくれると思うけど。真珠が笑顔でいることが一番だと言いそうだね」

「笑顔か。確かにそれは何度も言われた」

「好きだったら、言ってみたら、卒業されちゃったら困るでしょ」と言われて考えていた。

神宮寺2

雪人さんの住んでいるところに行って待っていた。怜奈ちゃんに言われて、その勢いでこうして来てしまったけど、やはり戻ったほうがいいかなと思っていたら、雪人さんがやってきて、

「どうしたの？」と優しく聞いてくれた。「父に似ているはずだ」と、東条さんが言ったけど、顔は全然似ていない。雰囲気は、似ていなくもないけど……という程度だった。

「あの」

「話があるの？」と聞かれてうなずいた。人がいると話せないと言ったら、雪人さんが家に入れてくれたけれど、玄関を少しだけ開けて靴をはさんで、チェーンだけ掛けていた。ドアも少し開けていて、「女の子と二人きりだと誤解されると困るからね」と笑っていて、意外とこういうところは気を使うんだなと思っていたら、

「研究室で注意されてね。夜遅くだと、ああするんだよ」と、ドアの方を見ていた。

「え、そうなんですか？」

「問題が起きた学部があつたらしくて、それで、指導に従って、そうしているんだよ」そうか、それでねと驚いた。

「秘密の研究していると困っちゃうでしょう？」

「そこまではないよ。確かにいくつかの研究室では外部持ち出しファイルがあると思うけど、僕のところはそこまではないからね」と笑っていて、笑顔が優しく、やっぱり素敵だなあと見とれていた。

「今日はどうしたの？」と優しく聞いてくれたので、

「あの」とうつむいた。資料が山積みされていて、

「勉強、大変ですね」と言ったら、

「ああ、試験勉強だよ」と言ったので驚いた。

「試験？」

「地元の大学院に行きたくてね」と言ったので、びっくりした。

「絶対に嫌です」

「親子そろって似たようなことを言いますね」

「あなたも父親似ね。笑顔もごまかし方も同じだわ。だまされないからね」

「父と何かあったんですか？」

「あの男にでも聞けばいいでしょ。もつとも言えないでしょうけどね」

「どついう意味ですか？」と言いつ合っているところを帰ったら、

「ああ、遅かったな」と言われてにらんだ。エッグシエルには時々行く程度にして、秋さんに紹介してもらった場所で下働きをしながら、見学を時々させてもらっていて、

「ちよつとね」と言つてから、塩を持っている母を見て、

「いくら嫌いでも、直接掛けないでよ」と、呆れた。

「この男にだまされたら駄目よ。父親と同じことをするに決まってるわ」

「父が何か不快になるようなことでも」東条さんが平然としながら聞いていて、

「父親に聞いてみなさいよ。『藍子』^{あいつ}と言つ名前を覚えていたら教えてくれるでしょうね」

「藍子？」東条さんが不思議そうな顔をしていて、

「お母さん、もう、いいから」と追ひ払った。

「変わった造りだな」東条さんが店内を見回していた。

「昔、カフェをしていた時期があるだけ。それより、用件は何？」

「携帯番号を教えるよ。ムーンスフェイスに掛けてもつながらないと困る。連絡したいからね」

「断る」

「お前のところも宣伝してやるから、いいだろ」

「宣伝？」

「学園祭でお前の名前とお店の名前をチラシなどに入れるだけ。宣伝効果は薄いかもしれないが、それぐらいはしたほうが良さそうだ

ぞ。おこづかいが増えるかもしれないから「痛いところをついてくる男だな」思ったけど、

「でも」と母がいるほうを見てから、

「しょうがないな」とため息をついた。

必要な場所 1

東条さんから電話があつて、呼び出された。学校から少し離れたところで待ち合わせをした。噂のネタになりたくなかった。

「どうした？」私の顔を見て聞かれてしまい、

「なにも」と答えた。こいつと会つてるとあれこれ言われそうだなと考えていたのが顔に出ていたらしい。

「占い師になるつもりなら、お客の前だけは平常心を保てよ。まあ、パフォーマン스로売るなら別だけどな」

「パフォーマンスね。母の知り合いにはいるけど、キャラを変えてばかりいるって聞いている」

「ああ、それはあるのかもな。飽きられると人が来なくなるから、それで変えているんだろ。うちではそういう人は取らないようにしてるけどな。一時的に人気が出たとしても、ずっと人に来てもらうには難しいからね」

「そうなのかな？」

「リピーターが多い人にはそれなりに理由があるんだよ。固定客が多い人はそうだからね」

「あなたも？」

「俺は見習いだからな。今の一番人気の人は割と長く一位を維持してるし」

「一番人気？」

「ロビーの掲示板にあつただろ」

「そうだった？」

「人気順で載せてあるから、絶えず入れ替えしてるし、部屋の広さも料金も違う。お茶のサービスをつけたりしてる人もいるし」

「お茶ですか？」

「ハーブティーを出してるんだよ。気分が落ち着くようにと自分で用意してる。料金が高いのは一番広くて調度品が高級だから。人気

が高い人から広い部屋になってる」

「え、そうだったんだ？ あなたのところも綺麗で広がったじゃない」

「俺は見習いだから、あれは一番下のランクの部屋。今度、お客がないときにでも見せてやるよ」

「いいよ、そこまでしてもらわなくても」

「普通の女なら喜んで見ていくぞ」

「私はあなたに借りを作りたいだけ」

「いいじゃないか。ライバルに育てているだけだし」

「ライバル？」と驚いた。

「何人が候補はいたよ。荒削りだけど勘が良かったり、筋が良かったりした人も多かった。でも、途中で駄目になるケースも多くてね」
「どうして？」

「恋愛に走ると占いの勘が鈍るからな。お前は恋愛してないみたいだから、大丈夫そうだ」

「ふん」と横を向いた。

「恋愛にのめりこむことだけはしそうもないからな。そのほうがいいぞ。適度に抑えろよ」

「あなたの場合は抑えてるんじゃないでしょ。広く浅くのほうが都合がいいだけでしょ」

「そうか？」と笑っていた。

「この間の男とは進展は？」と聞かれて横を向いた。

「その分だとないな」雪人さんにはあの後も会ったけれど、結局言えなかった。帰っちゃうのがかなりショックで、卒業したら会えなくなるのが寂しくて仕方がなかった。

「なんて、顔してるんだ？」東条さんに言われて、

「あなたに関係ない」と言ったら笑い出した。

「お前は母親似だな」

「そう？ あまり似てないよ。容姿はおねえちゃんのほうが美人でお母さん似だと言われて大きくなったよ」

「今はお姉さんはそれほど似てないだろうな。お前のほうが似てる。小顔で、目元が似てるし、かわいらしい顔だから。お姉さんは丸顔だけど、ちよっときつい感じだよな。性格も何もかも。後はお金優先」

「そこまで言わないでよ。身内なのに言われるとちよっと困る」

「当たってるからだろ。ああいうタイプだけはどうも苦手だな。自分優先の女は昔から駄目。わがママを聞きたいとも思えないし」

「ふーん、トラウマ？」と聞いたら黙っていた。

必要な場所 2

大学で実行委員会が揉めていた。一部は熱心に動いて計画を話し合っていたけど、一部の人は女性と話していて、

「そこ、気が散る」と怒られていて、

「うるさいよな」と相手が怒っていた。

「もうすこし詰めてから参加するよ」

「原西は、いつもそれだな」と言い合っていて、高校の学園祭とは違うなと思った。学園祭もそれなりにはやっているけど、勉強優先の人はそれなりしか参加しないし、一部のお祭り好きが意見を言い合ってまとめている。後はそれに付いていくだけという形が多かった。今度は自分の意見を通したい人が多いクラスなので、うるさそうだったけど、先生は「楽しそうでいいな」としか言わない。ほとんど干渉してこない先生だった。

「東条君、どう？」紙を渡されていて、

「お前もあるか？」と東条さんに紙を見せられて、

「ここはこうしたほうが」東条さんがいくつか注意点を挙げていた。「時間と予算が掛かると困るでしょ」と言い合っていた。占いをみんなの前で見せるとか、占いボードを作って、それで参加してもらうとか、色々案が並べられていて、そのうち、いくつかに丸がついていた。

「これだと盛り上がりがないかもしれないな。うちの目玉はミスコンと公開合コンぐらいなもので、後は適当にバンド演奏がある程度だし」と言い合っていて、良く分からなくて聞いている。

「公開合コン」と思わず言ってしまったら、

「ああ、高校ってやらないの？」とそばの人に聞かれた。うれしそうに私のほうを見ている。でも、制服を何度も眺めるのがちょっと嫌だった。

「さあ。そういうのはあまり」とだけ答えた。そういう話はチラッ

としか聞いてない。集まりみたいなものに参加して知り合うと聞いたことはあった。

「学校でも人気のある学生同士で合コンするんだよ。選抜された子が出場するため、レベルが高い子が多いだろうから、参加希望が多くてね」そばの男性がうれしそうに答えてくれた。

「俺、学校の子はそれなりに把握済み」と原西さんが言ったため、「お前の場合は出会いすぎなんだよ」とみんなに笑われていた。確かに簡単に携帯番号を聞きそうな顔をしていた。

「尚毅には負けるだろ。いつも、女連れだろ」と言われていて、

「ああ、あれはやめる予定」と東条さんが言ったので、

「嘘だろ。あれだけ続けてきて、やめられるわけがない」

「そうだよなあ。お前、いったい何人と付き合って、本命がいたのかいないのか」

「いないよ」東条さんが軽く答えていた。

「まさか、この子に絞るつもりじゃないだろうな」原西さんが笑いながら聞いていて、

「さあね」東条さんは軽く流していた。

必要な場所3

送ってもらいながら、

「私は参加しなくても良さそうに見える」

「お前にも占ってもらおう必要が出てくるかもな。公開占いもしたい
って言う話が出てくるぐらいだし」

「え、人前では絶対に無理」

「なんで？」

「アガリ症だし、集中力が途切れると占えないの」

「ふーん、誰がいても占いができるぐらいにしておけよ」

「無理。日によって違うから。占えない日があるぐらいだし」

「それじゃあ、無理だろ。プロになれそうもないな。素人止まりだ
な」

「そう言われても」と横を向いた。

「女性だと気分で差がある人も中にはいるけどな。親父の秘書みた
いなことをしてる善波さんがそうだから」

「善波さん？」

「美人だけどきつい性格だ。うちの金庫番だから親父も頭が上がり
ないぐらい。俺もどちらかと言うと苦手」

「苦手な女性なんていないと思った」

「隠してるだけ。それが分かるとお客も嫌がるだろうから」

「そう」

「それより意見を言えよ」

「言いづらいよ。みんな年上だからね」

「お客さんはお前より年上も来るだろうから、慣れるよ」

「じゃあ、お守りを作ったら」

「お守り？」

「あなたの店でも売っていたじゃない。あれを学園祭で売るのが
そんなものを買う人があるものなのか？」

「学園祭限定バージョンを売るのが」

「売れないと思うけど」

「じゃあ、おまけ付き」

「なんだよ、それ」

「パワーストーンとかそういうものを10個あるうちの一個に入れておく。当たった人はラッキーと思うだろうし」

「それだけでは満足しないと思うけど」

「じゃあ、更に当たりくじを入れたら」

「当たりくじってなんだよ？」

「当たり券を入れておくの、品物は、そうだな、何か商品を」

「そんな予算はなさそうだな」

「だったら、あなたに占ってもらえるっていうのは？」

「ふーん、なるほどな。それなら売れるかもしれないな」

「と、適当に言ってみただけ。責任持てないからね」

「お前の場合は呆れるな」

「前にそういうのを学園祭で売りたいって言い出した女の子がいたの。でも、先生に反対された。ギャンブル要素が強いものは困るって」

「先生が言いそうな言葉だな」

「だから、それを思い出して言ってみただけ。ただ、そのときは外れくじは飴玉と交換だったから」

「お守りは？」

「お守りは売ってないよ。ただ、あなたの店でストラップとかパワーストーンとか売ってたから、そういうのを売ってみたらどうかと思っただけ。個数を限定したらそれなりに売れるかもしれないし」

「個数限定ね。そのほうが売れ残る可能性は低くなるかもな。清水が喜びそうだな」

「清水？」

「実行委員長。ひょっとしてお前、紹介したのに名前と顔が一致してないとか言うなよ」

「ごめん、すぐ逃げるつもりだったから」

「お前、完全に舐めてるだろ」

「違う、あなたと係わり合いになりたくないからね。原西さんは覚えたよ」

「お前にやたらと話しかけたのが佐藤。それから、美人がいたら、彼女が浅木さん」

「あなたの本命？」

「ああ、いい勘してるな。隠してもバレそうだから言っておいたほうがいいか。元カノだよ」と言われて驚いた。

必要な場所 4

「元？ 今じゃないの？」

「お前の母親と同じだよ。後腐れはないよ、彼女のほうは」

「母親？」

「親父に聞いてみた。『藍子』^{らんこ}なんて名前は珍しいから覚えてい
だろうと思ったら、反応があつた。多分、昔の彼女だな。お前の母
親の態度はそう見えた」

「えー、ないよ。母の好みと逆だよ」

「好み？」

「父は優しくて野心家じゃないもの」

「親父は野心家と言われたらそうかもしれないけど、態度は洗練さ
れていると思うけど」

「そう？ テレビで見たときは、そう見えたけど」

「母親の解説つきでだろ。そうすれば色眼鏡で見るに決まってる。
学校の先生を見下している生徒の親も先生を信頼してないことが多
いからね」

「そうだった？」

「それと同じだよ。だから、親父と直接話してから意見を言えよ。
自分の意見をね」

「そう言われても」

「自分の目で見て確かめてから言えってこと。第一印象だけで決め
るな。話してみたら性格が違ふことなんていくらでもあるからな。
ただ、そのままの人も多いけど」

「あなたの友達とは話してみたいと思えない」

「口に出すなと言っただろ。あいつらに根にもたれるとやっかいだ」

「そういう相手とどうして付き合えるのかが不思議」

「そうか。お互い似たような価値観だと違和感はなくなるだろ」

「あなたも同じなんだ？」と聞いたら黙った。

「女性に対しても、それほど好きになったことがないのかもしれないね」

「知ったような口を利くな。恋愛初心者」

「そのことは言わないで。何度も怜奈ちゃんに怒られた。人の恋愛を占っている場合じゃないって」

「あの先生のところにもいても、そういう方面では占えないぞ。あそこの顧客は年配が多いから。お前は別のところに行けよ」

「別のところ？」と聞いた。

必要な場所 5

東条さんに連れられて一緒に歩いていた。街角で占い師が誰かを占っていた。相手は学生だろうなと思える年で、私より若いかもしれないなと思った。少しだけ離れたところで東条さんが止まった。それで、「会話してるような振りしろよ」と小声で言いながら、そばでその人たちの声を聞いていた。占い師が女の子を何度も叱っていて、「馬鹿だねえ。ちゃんとやわないと」「駄目だよ、それじゃあ」と何度も怒られているのに、女の子はうなずいていて、最後は泣き出していた。

「泣くんじゃないよ」と慰めながら、色々と言教をしたりアドバイスをしていた。

「あれって」さっきの二人からかなり離れてから東条さんに聞いた。「占い師でも色々いるんだよ。人生相談や子供の相談相手までね。ああいう子があそこに行くのには訳があるんだよ」

「どんな訳？」

「いい親、いい家庭ばかりじゃないからな。中には親が暴力を振るう、無関心、そういう親もいるからな。成績だけで判断したり、兄弟と比べたり、親の基準に合わないと思われて見捨てられたり。家出したりする子はプロキオンにはあまり来ないしね」

「そう。でも、何で、あの子は叱られても怒らないんだろうね」

「逆。叱ってもらいたいんだよ。親が無関心な家かもしれない。他の誰かにかまってもらえるのがうれしいってこともあるんだろ」

「そうなの？」

「怒ってもらったり、話を聞いてもらったり、それだけでうれしいんだろうな。受け止めてもらえたと思えるんだろうし」

「え、どういう意味なの？」

「家に帰っても、親と会話がなかったところもいくらでもあるんだよ。」

携帯で連絡さえ取れたら、それでいいと言って、家に帰らない子もいるからな。お前の学校にはいないのか？」

「夜遊びがすごいらしいと言う噂は聞いているけど、話したこともない。学校でもほとんど話さない子がいるから」

「じゃあ、その子もそういう事情があるのかもしれないな」

「そう」

「受け止めてくれる場所があればいいけど、そういう人も場所もない人だと、ああやって話を聞いてもらうんだよ」

「先生に相談するとか」

「それは無理だろうな。先生にお前、家庭の事情を話せるか？」と聞かれて首を振った。

「そうだろ。自分の名前も知らない人だから言えるってこともあるんだと思う」

「そう言われるとそうだね」

「カウンセリングとか相談所とか日本だと通うのに抵抗があるけど、占い師だと芸能人や有名人も通っていたりするだろ。それで、抵抗が少ないんだろうな」

「相談する場所として必要ってことなの？」

「自分ひとりで解決できなくても、話だけでも聞いてもらいたいものだと思うけど」

「あなたは どうして分かるの？」と聞いたら黙った。

「女性と多く付き合ったから分かるの？」

「お前より年上だからな」

「そう？」

「お前も経験を積み。視野を広げるところからやらないとな」

「分かってるよ。さすがに気軽に占えなくなったから。今は断ってる」

「占えばいいだろ。練習を積んでもらう必要があるからな」

「え、どうして？」

「人前で占ってもらうことになるから」と東条さんがやっと笑っ

ていた。嫌な予感がある。

バイトの理由1

東条さんから提案されたことを親に相談した。見習い料金で占いを始めるように言われたからだ。

「学校でもお金を取る気なの？」

「それは無理でしょ。問題になるから。お客さんとしてここに来てもらって、練習代として払ってもらうようにと言われて」

「誰に」母がにらんだ。仕方なく事情を説明した。東条さんの大学の学祭で占いで協力を頼まれたこと、そのために練習が必要なのとも。

「駄目よ。あの男に関わっては駄目」と怒られたけれど、宣伝のために必要だと説明した。

「あの男がそう言ったの？」と聞かれて、

「確かに癪に障るような男だけど。背に腹は変えられない。宣伝になりそうなことならやってみたいし。練習も積んでおきたいから」

「学校を卒業してからでもいいでしょ」

「お金を貯めたいの。一日でも早く」

「なら、ちゃんと就職して」

「お父さんを探したいから」と言ったら母が黙った。

「お金を貯めて時間を作って、ちゃんと探したいの。だから」とうつむいた。

「真珠」母が名前を呼んだ後、黙ってしまった。

「ここにお客さんを増やす必要があるし、私も経験を積みたいの。だから、お願いします」

「真珠。お父さんがいなくなって、もう、何年も経ってるのよ」

「分かっているけど、でも、気にするなと言われても気になるの。お父さんがいないままなんて耐えられない」

「真珠、あなた」と言ってから、

「しょうがないわね」と母が言ってくれて頭を下げた。

学校には先生に相談して、先生は渋々了解してくれた。今までの家での手伝いをするという報告しかしていなかった。

「そこに行く生徒が増えるのはどうかと思いますが」と女の年配の先生が目くじらを立てていたけれど、先生が事情を説明してくれた。父を探すためにバイトをしていることを。学校にはやむを得ず本当のことを話しておいた。

「そう、そうだったわね」とその先生もそれ以上言えなくなっていた。

バイトの理由2

怜奈ちゃんに相談して、その後、占いを頼まれた子に事情を話した。

「うーん、しょうがないなあ。学園祭って、どういふことするの？」と聞かれて、

「さあねえ」としか言えなかった。クラスの子には父を探すとは言えず、学園祭に参加するために練習する必要があるし、お金も必要だからと教えておいた。

「頼りないなあ。面白そうだったら行くから、チケットお願いね」と言われてしまった。

「そう言われても、そこまで仲良くないし」仲良くしたいと思えない人が一部混じっている。東条さんのお友達と言う人も好きにならない。遊び人っぽい人はどうも苦手だった。

「じゃあ、お店に行くね」と何人かが言ってくれて、
「ご協力お願いします」と頭を下げた。

「大丈夫か？」神宮寺がクラスに来て聞いてきて、移動した。事情を話したら、

「あの男だけは関わらないほうがいいと思うけど」

「最近、お店にお客が減ってきて、やむを得ずだから」

「でも、あいつ、手が早そうだし強引だし」

「そこは気をつけるつもり」

「お前、考えてくれたか？」と聞かれて、どうしても考えられなかったとは言いづらかった。

「そういう顔をするなよ。俺としてはお前とちゃんと付き合いたいて思ってるし」

「勉強があるでしょ」神宮寺は大学進学を目指して勉強している。お兄さんも有名大学に通っているため、負けたくないらしい。

「分かってるよ。息抜きにお前とデートしたいだけ」

「そう言われても、私は」

「映画ぐらい付き合えよ」

「忙しくなるから、無理だよ」

「あいつとは行くなよ」

「分かってるよ。さすがにね。父に怒られそうだから」と言ったら神宮寺が黙った。

「でも、ちよつと許せないよな」神宮寺が話題を変えるように言い出して、

「なにが？」と聞いた。

「あいつ、何かやってるのか？ 護身術か何か」

「さあ、どうして？」

「だって、俺、力では負けなと思うし、運動神経はいいからな。それなのに軽くやられて悔しいから、聞いておけよ」

「なんで？」

「負けたままじゃ面白くない」

「それは分かるけど、聞く必要があるの？」

「敵の力量を測る必要があるから」完全に敵になってるよ。

「ほつとけばいいよ。神宮寺と身長が違っただけだし」

「俺より高いのが気に入らない」神宮寺は割りと背は高いほうだけど、東条さんはそれより更に高かった。

「そう言えば、父親に似てるから、それでもかもね」東条の父親は武道をやっているかもしれない、そう言った。

「俺は良く知らない。そういう方面は詳しくないし」

「男子って占いに興味示さない人がいるからね。神宮寺も同じだものね」

「俺が興味があるのは占いじゃなくてお前だけ」と言われてむせた。「占いができようとできまいと俺はお前自身に興味があるからな。だから、あいつに近づくなよ。あいつはお前が占いができるから近づいてくるだけだから」

「やっぱりそう思う？ 言葉の端々にそういうのは感じるんだよね。占いてなかったら見向きもしないだろうね。あの人、乗ってる車はいいし、持ち物も高級そうだった。それに比べてうちはちょっとなあ。住む世界が違いすぎるし」

「バイトががんばれよ。真珠はそのままでかわいいと思うから」と言われて、思わず赤くなった気がした。友達だと思っていた男にいきなり言われて、ちょっと恥ずかしくなった。

「うぶだ」神宮寺が笑っていて、

「うるさいの」とにらんだけど、ずっと笑ったままだった。

バイトの理由3

久しぶりに橋添先生のところに寄った。あいかわらず汚かったけど、

「看板を持ってきました」と言ったら、

「なんだ、気を使わなくて良かったのに」と言われたけれど、新聞紙に包んであったボードを取り出した。

「かわいい感じだね」と先生が笑った。

「エッグシェルって感じで頼んだら、これです。うちのムーンフェイスは丸顔って意味もあるから、それで丸顔の女の子の絵が入ってるの。妖精だから、かわいいでしょ」卵の殻から飛び出した妖精の絵が描かれていて、その横にエッグシェルと書いてある。

「でも、この看板で入られたら、詐欺と言われそうだ」と先生が言ったので、

「きっと……大丈夫です」と言って、看板をどこに飾ろうか相談していた。

「エッグシェルって、どうしてつけたんですか？」最初に聞いたけど教えてくれなかったので、再度聞いたけれど、

「そうだね、色々な意味があるよ」と笑っていた。その後、電話が鳴った。先生が出て、お客さんだと思っていたら、

「え、また？」と親しそうに話していた。でも、様子が変で、

「今すぐは無理だよ。そこまですぐには、……しかし、……しょうがないな」と言って電話を切っていた。先生は、

「出かけてくるよ。すぐに戻るから」と言って、一度2階に上がったから外に出かけてしまった。

「先生遅い」フラッと遊びに来た近所のおばさんが、

「まあ、ここは開店休業状態だし」と笑っていて、一緒にお茶を飲

んでいた。

「慣れたの？」と聞かれて、世間話をしていたら、

「用意できたの？」と女の子が入って来て、驚いた。化粧が濃い。

どこまでが目か分からないくらい塗っている。服装は派手で、ここにお客としてくるような人には見えなくて、

「先生は今、留守ですが」と言ったら、

「あのジジイ。待たせやがって」と怒っていた。

「早くしやがれ」と言って、テーブルを蹴ったので、

「なにするんですか？」と怒ったら、意外にも近所のおばさんが止めてきて、

「うるさいね。あんたは引っ込んでろ」とすごんでいた。おばさんが小声で、

「お孫さんだよ」と、教えてくれた。さすがに驚いてしまった。先生は何も教えてくれていなかった。

バイトの理由4

「いつまで、待たせるんだよ。おせえよ」と橋添先生の孫と言う人が、ずつとぼやいていて、やがて先生が戻ってきて、

「おせえよ」

「その言葉遣いはやめなさい」と先生が優しく言ったけど、

「あんたに言われたくないね」と女の子がにらんでいた。

「早くしろよ。待たせてるんだからさ」とその子が言ったけれど、

「言葉遣いを直さないと駄目だ」と先生に言われて、渋々、

「次から考えてくるよ」と言つて、先生に手を出していた。先生が上着から封筒を出したらひったくるようにして、中身を確かめていた。札束だった。一万円札が何枚も入っていたので、びっくりした。「何だよ、言つた金額より少ないじゃないか」と女の子が怒つていた。

「さすがにそんなに渡せないよ。友達が病気と言つのは本当か？」と聞いていた。

「ある意味、病気。じゃあな。また来るよ」

「言葉遣いを直しなさい」と先生が言つたけれど、女の子は聞いておらず、さつさと店から出て行った。

「悪かつたね」先生が言つたけれど、何も言えなくて、

「渡さないほうが良かったんじゃないのかい。あれじゃあ、遊ぶ金にしか使わないよ。病気とは思えないよ。友達が病気なら、その友達の親に頼るだろうし」と近所の奥さんが言っていたけれど、先生はため息をついていた。

「あなたのお金が目当てだろうね。縁は切れているんだから、渡さないほうがいいよ。あの子はどんどんエスカレートして、金をせびりに来るだろうし、そのうち、よくない友達を連れてくるかもしれない」

「そうは言っけど」先生が困っていた。

「やめたほうがいいよ。いくらお金が余ってるとしてもね。それぐらいなら店を立て替えたりしたほうがいいよ。真珠ちゃんだって、綺麗なお店のほうがうれしいだろ」と言われて、先生を見た。

「いや、ここはこのままでいいよ」

「物騒な世の中だよ。あの子の友達が来たら困ることになるよ。知り合いでいたからねえ。金の無心されたらしくて、親も見離しているような子だったから、大変そうだったよ」

「困っていると言うからね」

「人がいいねえ。橋添さんもあいう人に狙われやすいからね」と言ったので驚いたけど、近所の人はそのまま帰っていった。

「見苦しいところを見せて悪かったね」

「いえ」

「あの子の親とはずっと会ってなかった。若くして結婚したけれど、妻は僕に愛想をつかして、別の男性と結婚してね。あの子も私とはほとんど会ったこともないくらいだったが、誰かに聞いたんだろう。親には内緒で連絡をくれてね」

「そうですか」

「でも、つき離せなくてね。苦労したようだなじられてしまったて」

「苦労？」と言ってから、

「すみません」とうつむいた。

「妻は再婚相手に逃げられたそうだ。それから苦労したようだけど、娘には一度も会わなかったからね、事情があつたから」

「そうですか」

「あの子にお金を渡さないほうが良かったかもしれないな。一度目は後ろめたさもあって、小額だったので、つい、渡してしまった。二度目から、あの口調になった。でも、今度のことも嘘かもしれないな」

「大丈夫でしょうか」

「もう、渡さないよ。私は自分で使うことなんて知れているから、罪滅ぼしのつもりで渡してしまっただけど、本当は渡さなければ良か

ったよ」と先生がため息をついていた。

先生の正体 1

東条さんから呼び出されて、学校帰りに待ち合わせた。

「今日はなに？」と聞いた。

「奢ってやるから、機嫌を直せ」

「ここで？」と見回した。デザートショップだったからだ。それほど高いものは売ってなかった。

「いいだろ。お子ちゃま向きだ」と言われてにらんだ。

「なんだか、色々ある。自信無くなっちゃった」

「なんで？」と聞かれて、秋さんの紹介で見学させてもらっているけれど、客によって占い方について迷いがあると教えたら、

「その店のスタイルがあるから、参考程度でいいんだぞ」と言われて、

「スタイル？」と聞き返した。

「人によって、違うからな。じっくり相談に乗ったりする人もいれば、こっちから、色々聞き出していく人もいるし、占い方法も人によって違うだろうし」

「解釈が人によって違うものだね。同じカードでも違ってくるから、その辺でどうしたらいいかを迷うし」

「それはあるかもな。相手によって、その解釈は変わってくるだろうし」

「なんだか、疲れた」

「お前、エッグシエルに看板を描いたのか？」と聞かれて、事情を説明した。看板を描いたのは別の女の子で、占いと引き換えに描いてもらったと。

「なるほどな。かわいいらしいな。俺のところでも描いてもらおうかな。キス一つと交換」

「安っ！」と思わず言ったら、

「高いだろ。俺とキスできるんだから」

「すごい自信」

「そうか？」と笑っていた。

「なんだか、色々あるんだね。人って」

「どうして？」

「見掛けじゃ分からないって意味がなんとなく分かったから」と言ったら、東条さんがじつと見ていて、

「それより、経験を積みめよ」と言われてしまい、

「練習はしてるけど、母はチラツとしか見てくれてない。友達相手に練習はしてるけど、何しろ周りがうるさくてね」

「色々見学しただろ。しっかりしろよ」

「現実が見えたら、自分の未熟さを痛感しただけ」

「最初の威勢のよさはどこに言ったんだよ。俺を突き飛ばした勢いを見せろよ」

「見せられない。それより、今日の用件は？」と聞いた。この間、私が言った案が通ったそうで、

「色々と考えておくから、お前もそのうち参加しろよ。その前に練習しておけよ。小金も貯められるからいいだろ」

「旅行代が貯められるけどね」

「旅行？」と聞かれて、

「まあ、色々」とごまかした

先生の正体 2

「ふーん、洋服代を先にしろ。それから、メイク道具も揃えておけ」
「え、なんで？」

「まさか、お前、そのままの格好で出るつもりじゃないだろうな」
「いけないの？」

「却下。ちゃんとした美容室に行つて、服装もそれなりに揃えろ。
それから、メイクもしてもらう。俺と一緒に出るなら、そうじゃないと恥ずかしいだろ」

「あなたと出ることがすでに恥ずかしい」と言ったら、パコツと叩かれた。

「痛いなあ、もう」

「お前だけだよな。俺にその扱いは」

「占い雑誌に写真つきで掲載されて、人気が出るからつて天狗になつてるでしょ」と聞いた。この間発売されていた占い雑誌にプロキオンの期待の星として掲載されていた。

「中々良かっただろ。あれでお客さんが増えたんだよな。予約が中々取れない占い師として格が上がったから」

「見習いからも昇格なの？」

「まだだよ。卒業してからだよ。そう言われているからな」

「ふーん。だったら、卒業間近の受験でも良かったじゃない。プロキオンは年2回受験できることになっている。」

「早めに受けたかっただけ。前から占い見習いとして時々やらせてもらっていたからな。でも、形としてちゃんと受験しておいたただだよ。早めにね」

「コネと言つて、悪かったわね」

「やつと認めたんだな」

「占い師としてはね。男としてはアウト」

「何でだよ。いい男だろ、俺」

「自分で言い切るところがアウト」

「周りにも言われるよ」

「あっそ」

「お前は子供だから、俺のよさが分からないんだろうな」と言ったのでにらんだ。ここまでうぬぼれが強いと何も言えなくなるな。学校の先輩で一人いた。勉強ができて、それなりに人気があった。でも、過剰の自信満々さで一部にしか人気はなかった。大村も一部の女の子には人気があるけど、それは顔がいいからだ。スカウトされたことは何度もあると自慢していた。話す内容と言ったら、そういうことばかりらしいと聞いたこともある。私はそういうのは苦手だった。

先生の正体3

「あなたも評判が両極端になりそうだね」

「どういう意味だ？」

「そのままの意味」

「お前は恋愛したこともなさそうだな。俺が鍛えてやるから、楽しみにしておけよ」

「はあ？」と呆れてしまった。

「まだまだ、だからな。色々と改造しないとそのままだと俺とつりあわないし」

「あなたと同等に見られたくないんだけど」

「その言い方はやめるよ。うれしくせに」駄目だ。どこまで言っても、おめでたい男だ。つける薬がないタイプに違いない。

「自分を改造したほうがいいよ。あなたの場合はいつか、刺される」

「視線が刺さって痛いね」

「あつそ」と言ったら、

「お前は俺をちゃんと見ろよな」

「占い師としてしか興味ないからね」

「子供だ」

「うるさいの」と言い合ってから、ため息をついた。

送ってもらいながら、

「気をつけるよ」と言ったので、

「なにを？」と聞いた。

「色々あると困るからな」

「あなたの友達のことは言わなければいいんですよ」

「ああ、あいつらも気をつける必要はあるけど、それは一部だけだよ。今度、教えるよ。怒らせるとまずいやつが二人いるけど、それ以外は張り付いているだけだから。そっちじゃなくて、お前の先生

のほうだ」と言われて、この間のことを思い出した。先生は辛そうだったので、何も聞けなかった。

「あの人の孫が来たんだろ」

「どうして知ってるの？」

「近所の噂。あの人の場合は噂されやすいからな」

「どうして？ 最初は変わった人なのかなと思っただけ、話しやすくて優しい人だよ。相談も親身になって乗ってあげてる。偏屈だと教えてくれた人がいたけど、全然違ったよ」

「偏屈ね。それは言われているさ。あそこに住んでるから、やつかみでそう言っただよ」

「やつかみ？」と言われて首をひねった。やつかまれるようなことはしそうもなかった。

先生の正体 4

「ひょっとして、お前、知らないのか？」

「なにを？」

「あの人、近所の人たちはほとんど知ってると思うぞ。お世話になってるし」

「お世話？ 占いで？」

「違う。あの辺りいつたいの土地はあの人所有だから」と言ったので、さすがにびつくりして、

「えー！！」と大きな声を出してしまった。

「あれだけそばにいて知らないなんてな。誰も教えてなかったんだな」

「全然知らなかった」

「だから、それで偏屈と言われてしまっただよ。かなりの金持ちだと思うぞ。俺のところもあの人所有だったからな。母があの人ところから買ったんだよ。でも、駐車場はあの人土地を借りているから」

「知らなかった。だから、お金を」と考えてしまった。それを知っていて、お金の無心に来たんだな。

「いくつかビルを所有してるはずだし、あそこ以外に部屋を持つてると聞いているよ。でも、住んでいるところはあそこだしね」

「そうなんだ。どうして、あそこに住んでいるんだろう。建て替えてもいいのにね」

「さあな。みんなが聞いても答えない。本人がそうしたいのならいいんじゃないか。ただ、俺なら、ビルの最上階に住んで、毎日パーティーでも開いて楽しむけどな」

「あなたと同じにしないでよ。先生はあなたとは違うだけ」

「そうかもな。占いをやってる理由も暇つぶしだっていう人もいるけど、多分、好きだからだろうな」

「そうなんだ。なんだかびつくりだね。お金持ちなのに、そういう部分は気にしないんだ。本当のお金持ちって見栄を張らないんだね」東条さんを見たら、

「俺を見て言うな」と怒っていた。

「だって、あの辺りの土地って高そうだし」

「確かに収入はすごいだろうな。管理してくれる人がいるって聞いているし、手元にお金なんて置いてないって噂だからな。全部、貸金庫に預けているだろうしね」そう言われたら、わざわざお金を下ろしに行っていたなと思い出した。

「お孫さんが来てもうれしそうじゃなかった」

「それはあるだろ。自分に懷いて来てくれるのなら喜んで出すだろうけど、お金だけのために来ているような娘だって、噂になってたからな」

「なんだか、色々あるね」

「お前もあるのか？」と聞かれて黙った。

「旅行ってどこに行くんだ？」

「東北」

「東北？ 海外じゃないのか？ 買い物したりするのかと思った」

「あなたと一緒にしないでよ。ちよつとね」

「まさか、雪人って人のところに行くつもりか？」と聞かれて黙った。

「やめておいたほうがいいぞ。あの人、お前は二の次だ。研究に時間を取って、お前とデートすらしなさそうに見えるな。そういう相手だと寂しいぞ。電話だって掛けてくれないだろうし。俺ならしてやれるけど」

「いいよ、あの人の笑顔を見ていられるだけで」

「かわいいこと言ってるよな。女の子発言してるよ、意外」

「うるさい。相手に合わせているだけ。あなたには憎まれ口しか言えないのは、あなたがそうだからよ」

「神宮寺は？」と聞かれて考えてしまった。

「さあ、どうだっけ？」

「あの後、何か言われたんだろ」「こういう勘が鋭いところが嫌だな
あと思っていたら、

「当たり前だ」と笑っていた。

「あいつから始めるのも悪くないかもな。その後、俺に乗り換えて
もいいし」

「絶対にありえません」

「意地張っちゃって、うれしくせに」

「うぬぼれが強い人って、懲りないんだね」

「楽しいぞ、俺と付き合うとね」ウィンクしていて、

「どれだけの女性にしてきたか分かったものじゃないね。あなたの
未来だけは読める。いつか、刺される」

「視線だろ」と笑っていた。

見習い初日1

お店に友達が何人か来て、手伝ってくれた。面白そうだからと言う理由の子もいたし、待ち合わせ前に冷やかに来たと言っていた子もいたけど、一人、実験台になってくれて占った後に興味が無くなったのか、ほとんどが帰っていった。

「占いって、商売にするには大変なのかもしれないね」怜奈ちゃんが笑った。お客さんがほとんど来てないからだ。秋さんの予約と母の馴染み以外は来ていなかった。

「怜奈ちゃん、手伝ってくれて、ありがと。デートしてきてもいいよ」

「午後からだから」と軽く言ってくれて、

「いいなあ、デート相手が次から次へと」

「だったら、神宮寺を断らなければいいでしょ」と言われてしまった。結局、神宮寺とデートするとは返事できなくて、

「友達としてならいいんだけど、なんだか、それだと悪くて」

「真珠は気軽にデートできないタイプだもんね。あの人で練習してるんじゃないの？」

「誰？」

「東条さん」と言われて、母のほうを見た。気づいていなかった。

「無理。あの人の場合はそういう対象には見られないよ」

「向こうはしっかり見てると思うけど」

「占い師として興味をもたれるって、ちょっと嫌だからね」

「そう？ それも最初の取っ掛かりとしてはおかしくないでしょ。

容姿から入る、条件から入るのとそれほど違いはないでしょ。同じ趣味から入ってるんだからね」

「趣味じゃないってば」

「でも、同じことに興味があるってことだもの。それだけで話が弾むからね」そう言われるとそうかもしれないけどなあ。

「でも、あの人と何もかも違いすぎるよ。価値観が全然違う。見栄っ張りで高級なものに囲まれたいタイプと私ではね。超庶民の小市民は相手にもしないって感じの人たちと付き合ってるよ。美人とかかわいい子以外は女じゃないと思うっている高津と同類の垣根を感じる」

「高津はほつときな。ああいうやつは死ぬまで直らないって言うてたよ。鴻上さんが」鴻上さんは高津のことでもクラスの男子のこともっともらしく分析していた。ただし、つい、みんながうなずいてしまっぐらい説得力があった。

「鴻上さんって、いったい何を見てきて、ああいうことが言えるんだろう」

「さあね。親か兄弟の影響でしょ。ほとんどの子がそういうのに影響されているだろうからね」

「価値観の違いかあ。高級車に乗って、女の子とデートをいっぱいしたら恋愛に詳しくなれると思う？」

「無理じゃない。あしらいが上手になるかもしれないし、こう言ったら喜ぶ、こう言ったら怒られるって境界線が分かる程度で、相手に真剣じゃなくて深く付き合ってたらず、相手も流すよ」

「え、どういう意味？」

見習い初日2

「適当に人の話を流している男子や女子がいるでしょ。調子のいいこと言っておいて、頼みごととかあっても『いいよ、いいよ』と言いながら聞いてないタイプ。後で覚えてなくて、『そうだったわけ？』と流す。それだと信用されなくなるから、付き合いが浅くなるだけ。明るい子が多いから話す数は多いけど、楽しい付き合いだけなら、それで十分だと思うけど、お互いに支えあうようなつながりにはならないだろうからねえ」

「言っている意味がなんとなくしか分からない。大勢友達がいる方が楽しいじゃない。それに助けてくれる人もいると思うけど」

「薄いつながりがあちこちにできるかもしれないし、遊びの誘いは多くなるかもしれないけど、自分が困ったときに手伝ってくれるような付き合いにはならないだろうって話。違うクラスの子がそれで怒ってたことがあるからね」

「え、なにを？」

「自分が頼んだのにみんなが助けてくれずに逃げたと。面倒になりそうなことを頼んだらしいの。友達と言うか一緒に遊ぶ子はかなりいるから、それで、かなりの人数に頼んだらしいの。日頃、仲良く話している子達にね。でも、誰一人助けなかったらしいから」

「何、頼んだんだろ？」

「お金とか絡んでたらしいからね。私も内容までは詳しく知らないでも、そういう部分まで助けてもらおうとするなら、よほど仲良くないよね。そういうことが分かってなかったから、『白状だ』って怒ってた。でも、鴻上さんが言ってたらしいよ。反対の立場になったら、面倒だから彼女は逃げるだろうって」いかにも言いそうだ。

「デート相手が多いからって、相手とどこまで関わっているかで違っている気がするよ。どれだけ数を重ねても、学習しない高津のケースもあるからね」

「高津って、どうして懲りないんだろ。あれだけ、毎回みんなに怒られているのに」

「無理でしょ。面倒なことは流すタイプだもん。聞いてないのか分かってないのか、同じことを繰り返すだけだと思うよ。真珠も毎回占ってあげても無駄になるかもね」

「そうなのかなあ。どうも、恋愛関係は苦手でどう相手に伝えていか迷って。東条さんなら迷いそうもないし」

「相手が言っしてほしいことは思い浮かぶタイプかもね」と言われて、そうかもしれないと考えていた。

見習い初日3

結局、お客さんは午後から一人だけだった。学校の子が「振られたので復縁したい」と言い出して、それで泣いて頼まれてしまい仕方なく占った。でも、うまくいかないだろうと出ていたので、正直に言おうか迷ってしまった。今までだったら、言葉は選んだかもしれないけど、本当のことを教えた。彼女を見てから、

「相手に再び振り向いてもらうにはね、かなりの努力が要るよ」と答えた。

「そうなの？ どうしたらいいの？」と聞かれて、

「自分を磨くこと。それしかないよ」と教えた。カードにはそこまですていなかっただけ、彼女に足りない部分を考えてそう答えた。

「磨く？ どうやって？」

「自分の魅力を見つけることからやってみて」と言ったら、

「じゃあ、そうしてみる」と言って、お金を置いて帰っていった。

帰るときは元気が出ていたので、あれでよかったのかもしれないなと思った。復縁したい人とはうまくいなくても次につながるかもしれない。彼女の幸せを考えたらそういうことなんだろうなと思った。

「バイト代、中々たまらないわね」秋さんが寄ってきて、

「そうだね」とため息をついた。私は未熟すぎるから、母たちよりも格安料金にしておいた。東条さんのように正式な占い料金の半額なんて、とてももらえそうもなかった。

「でも、頑張ってたね。言葉遣いも変えてたし、相手が元気が出ていたのが一番良かったね」と言ってくれたのでうなずいた。悔しいけれど、東条さんが言ったとおりだった。占いを信じないと言う人も多い。「占いなんて、どこまで当るんだよ」と学校で馬鹿にされたこともある。でも、東条さんの言うとおり、そういうものが誰か

の元気の種になっているのかもしれないと気づいて、私もそういう
占い師になれたらいいなと思った。目先の派手さは飽きられると東
条さんが言っていたけれど、確かに、いつの間にかいなくなる占い
師はそういう人が多かった。

見習い初日 4

「秋さん、占い師を多く抱えている団体に所属している場合は、移り変わりが激しいのかな？」

「そうねえ、知り合いの話を聞くとすぐに辞めてしまうところもあるらしいわよ。働く条件が厳しいところだとそうなるみたいね。働いた時間の割にはお給料が少ないとか、何か売らせるとか」

「なにを？」

「開運グッズよ」

「それならここにも置いてあるじゃない」

「ああ、ああいうかわいい値段のものじゃないわよ。もっと高額なものよ。原価に見合わない金額で売らしいからね」

「へえ、そうなんだ」

「苦情が多いところはそうみたいね。プロキオンはどうなの？」

「さあ、あそこはグッズは売ってたけど」

「あそこはお薦めグッズを占い結果の用紙に書いておくシステムだとは聞いているけど」

「え、そうなんだ」

「それでも、そういうので買っていく人は多いでしょうね。ここと違っておしゃれなビルだから維持費が掛かるから。そういう部分での儲けも馬鹿にならないだろうし」

「そうだろうね。部屋の中も豪華だったし、あいつの車も高そうだったし」

「真珠ちゃんは、プロキオンで働きたいの？」

「無理。あいつがいるところでは無理だと思う」と母がいるほうを見た。

「そうねえ、怒ってたからね。ちょっと長引いてるものね。怒りが」母は怒りっぱいところもあるけれど、すぐに忘れる体質だ。私もそういうのは諦めと言うか流すほうだけど、母はもっと早い。ただ、

立ち直りが早すぎるお姉ちゃんには負けるけど。

「宝陽の学園祭に出る前に、鍛えておかないとね」と言われてうなずいてから、

「見た目って大事なかな？」と聞いた。

「あら、どうして？」

「東条さんが、見た目を考えろって。メイクまでしろとうるさくて」「高校生だものね。制服で出ても面白いと思うけど」

「やだ。制服だと変な目で見てくる人がいたから」

「そう？　かわいいと思うけど。でも、東条さんが言うならそのほうがいいのかもしれないわね。相手に合わせたらいいじゃない。いつもの真珠ちゃんならそう言うでしょ」

「あいつに合わせると言うのが癪に障^{じゃく}るの」と言ったら笑われてしまった。

頼む子1

みんなにどうだったか聞かれて、

「ははは」と笑うしかなかった。

「ねえ、昨日、神宮寺見かけたけど大丈夫なの？」と違うクラスの女の子に聞かれた。

「さあ」としか言えなかった。お互いのプライベートまで深くは知らない。神宮寺は去年同じクラスだったから、良く勉強を教えてもらった。あいつは親切なところもあるから、クラスの女子に英語や数学を聞かれていた。私も何度も教えてくれて、それが縁でいつも話すようになって、友達になった。怜奈ちゃんは何度か神宮時は気があると言っていたけど、私はそれどころじゃなくて分かっていなかった。雪人さんばかり見ていた。父がいなくなり元気がなかった時期が続いて、あの人が優しく声を掛けてくれて、とてもうれしかった。それまでは時々見かける大学生としか知らなくて、それが縁で何度か夕食のおかずやお客さんからのもらい物の果物や野菜を届けるようになった。いつも優しくしてくれるけど、部屋に入ったのはこの間が初めてだった。本当はもつと話したいけれど、勉強で忙しそうで邪魔をしたらいけないと遠慮していた。デートに誘うなんて迷惑になりそうでできなかった。あの人しか見てなかったために、神宮寺の気持ちには気づかなかった。

「占ってもらいに行こうかなあ。夏休みに遊びに行きたいけど、彼氏ができなかったし」と言い合っていた。もうすぐ夏休みになるから、一部の人たちは浮かれている。

「真珠ちゃん、彼氏紹介して」と同じクラスの子と良く話している違うクラスの子に言われて、

「どうやって？」と聞き返した。そういう紹介ができるような子がクラスにいて、

「あの子に頼めば」とみんなに言われていた。

「違つて、宝陽。あそこは知り合いがなかったから、ちょうどいいじゃない」

「無理。知り合いなんていないし」

「じゃあ、カロンさんをお願いできないかな」と言われて、

「えー!」と言ったら、

「いいじゃない。あの人ならいくらでも知り合いがいそうだし。お願い」と言われてしまった。

頼む子2

紹介を頼まれてもそれほど知らない子で、違うクラスの子だし、そのまま流そうと思っていたら、更にしつこく言ってきたので、仕方なく、東条さんに電話したら、

「いいよ、でも、かわいくないと俺が怒られるから、その辺はどうだ？」と聞かれて、

「さあねえ。自分で確かめたら」と言ったら、

「紹介するならそれなりの子じゃないと怒るやつらもいるからな。制約が厳しくないのでもいいならいいけど、条件が下がるぞ」と言われて、驚いた。

「どうして？」

「条件がいいやつはそれなりにプライドが高いのも多いからね。とにかく出会いたいって心境のやつでもいいなら、いいけど」

「それだと怒られちゃうよ」

「じゃあ、それなりのランクにしておくよ」

「やけに慣れてるね」

「紹介したことが何度かあるからだよ。頼まれることも多くてね」

「合コンにも行くんだ？」

「それなりにしか行かない。営業を兼ねていく場合もあるけど、それを出すと必ずその場で『占って』とか言い出す子がいるから、うるさくてね」

「いいじゃない、占ってあげれば」

「ただ『占って』としつこく言う子は苦手だね。そういう子に限って文句を言う確率が高いから、適当に逃げてる」そう言われて、割と気軽に頼んでくるけど、「そのうちお礼するね」と言って、未だに何もなしの子がいたのを思い出した。こちらが用事を頼んだら逃げられたことがある。しかも、占い結果が気に入らなくて裏で文句を言っていたらしくて、それ以来、その子に何度頼まれても占えな

くなつた。そういうのが分かれると途端にしらけて、相手のことが見えなくなるから占いもできない。でも、かなりしつこくて、怜奈ちゃんに怒ってくれた。

「お互い色々あるんだね」

「お前もどうせ頼まれる口だろ。これからは全部お店に来てもらえよ。それでも来るなら占ってやれよ。文句を言うような子はお金を払ってまで来ないからな」

「そういう人がいたんだ？」

「当たり前。それから、お前も少しはおしゃれしろよ。バイト代は入っただろ」

「ははは」と笑ってごまかしたら、

「ほらな。来ないだろ。お金払ってまで来るなら本物。奢ってもらう程度なら素人なんだよ」

「はいはい。十分分かったから」

「まだまだ、俺のライバルにはなれそうもないね」

「ライバルになる気も恋人になる気もないからね」と怒ったけれど笑って電話を切っていた。

頼む子3

電話を切った後に、

「あいつか？」後ろから声を掛けられて振り向いたら神宮寺がいて、「デートどうだった？」と聞いた。聞かないのもおかしいかなと思つて気軽に聞いたけど、苦い顔をしていた。

「ごめん」

「強引に呼ばれてね。それで行つてみた。でも、会話が続かなかつた」

「残念」

「今度で何度目か」

「そう？ 神宮寺なら合わせられるでしょ」

「合わせられても、自分が楽しいかどうかは別」と言つたので、

「なるほどね」と言つたら、こつちを見ていて、

「ごめん」と謝つた。

「謝るなよ。お前にそんな顔をしてほしくて申し込んだんじゃないぞ」

「分かつてる。ただ、もつと気軽にデートぐらいできたら良かったなと思つて」

「お前は占いしている割には堅いからな」

「お父さんにちゃんと紹介できるようになつてからって、どこかで思つてるからね」

「そうか」

「お金を貯めないと」

「貯まりそうか？」

「まだまだ、営業努力が足りなくて」

「気長に頑張れよ。卒業するまでに貯めるんだろ」

「夏休みに行けたらいいけどね。多分、無理。思い立ったのが遅すぎた」ここまで本格的にお金を貯めたいと思つたのはサバトの受験

前だった。その前は漠然といつか行けたらいいなと思っていた。でも、雪人さんを好きになったことをちゃんと報告したいと思って、それでバイトを始めた。学校には最初、母子家庭でお金が足りないからと説明したけれど、それだけだと姉が働いていることもあつて納得してくれそうもなかったので、しょうがなく父の話も加えた。それで先生も渋々認めてくれた。バイトの許可をもらっているのは親が病気になってやむを得ず生活費の足しにするためとか、母子家庭で色々とお金が掛かるとか、進学のための学費を稼ぐためと言う人が多い。

「ゆっくり頑張ればいいさ。俺も一緒に探してやりたいけどな」

「いいよ、神宮寺は大学に行ったら、誘いが増えるだろうし」

「卒業したって、真珠とは友達だからな」と言ってくれてうれしかった。

頼む子4

「もう、あれは無理」東条さんに頼んで紹介してもらった後に、女の子が私にぼやいてきて、困ったなあと思った。こういうのは苦手だった。相手が気に入らなくても、それなりに流してくれるような人のほうが楽だ。文句を言われても、その場限りの子なら別に流せるけど、

「絶対におかしい。宝陽って、もつといい人が多いと思う。相手、お金持っていないだよ」とずっとぼやいていた。そんなことを私に言われても、と言いたいけど我慢した。

「ほっときな」怜奈ちゃんがみんながいなくなってから言ってくれたけれど、

「あの子、ほしいバックとアクセサリーがあるから、そのための彼氏を見つけたかったらしくて」

「それはちよつと困る。教えてくれていたら、東条さんには断ってくれるように言ったのに」

「あの子が今日、そうやってぼやいていたの。しかも、相手が全部奢ってくれなかったとか、ほしいバックを買ってくれそうかどうか、試したらしいよ。それで、相手は見てもしなかったらしくて、それで怒ってたみたい」

「自力で見つけてほしいね、それだったら」

「そうだね、知ってたら、教えられたけど。あれでは逃げられるだろうね。そういう部分のアピールが露骨だと嫌がられるだろうから」

「そうかもしれないね」

「神宮寺がうまくいかなかったのは聞いた？」

「それは聞いたけれど」

「やっぱり神宮寺とデートしたら？ 占いするにも実体験がないと。それか、東条さんとするとか、もしくは雪人さん」

「無理だよ。雪人さんは勉強が忙しいし、卒業したら帰っちゃうみたい。間に合いそうもないな」

「なにが？」

「お父さんにちゃんと話してから、雪人さんとデートしたかったのに」

「でも、それは」と言っで怜奈ちゃんが黙った。

頼む子5

「分かってるよ。お父さんが帰ってこないのは事情があるんだろうし、それを待つのはやめたほうがいいとお母さんも言ってるけど、でも、なんだか」

「雪人さんだったら、お父さんだって許してくれると思うよ。思い切って誘ってみたら」

「勉強の邪魔になりにたくなくて」

「息抜きぐらいするでしょ」

「遅くまで明かりがついてる。きっと、勉強してると思う」

「真面目」

「そうだね。あいつと大違い。あの人は夜遊びがひどそうだ」

「東条さんって、どういう人か分かったの？」

「遊び人だってことしか分からないよ」

「意外と見かけと違うとか」

「見かけどりの中身だったよ。うぬぼれが強かった。自分と付き合える女性は幸せだと言い切りそう」

「なるほど、じゃあ、ちよつと無理だね。それだと」

「そういうこと」

「じゃあ、神宮寺とデートしてみたら。夏休みにどこかに行けば楽しいって」

「そう言われてもねえ。お金を貯めたいし、修行しないとね。あいつに負けたくないし」

「ライバルなんだ？」

「違う。今のところ見下されてばかりだから、悔しいの。少しでも追いつきたい」

「そこまで腕は確かなの？」

「上手だったよ」

「そうじゃなくて、占い師として、色々あるでしょ。接客が上手な

のは分かったけど、占い師って当るかどうかが一番重要でしょ。」

「さあ、そう言えば、当っているのかどうか。占い結果に苦情はなかったみたいけど」

「見た目がいいから、その辺でだまされているとか」

「さあ、そう言われたらどうなんだろうね」

「真珠のは結構当たってると思うよ。何人かそう言っていたし。東条さんはどうなんだろうね」

「分からない、そこまで見てなかった」

「興味ないのね？」と聞かれて、

「そう言われても、振り回されてばかりいるから」

「そういう相性かもね。あの人は自分優先、真珠は周りのことも考えてしまうところがあるしね。それだと振り回されるほうが大変だ」

「そう言われたら、そうだったね。合わせるのをやめようかな」

「無理じゃないの。真珠とあの人だと、あの人の方が強い気がする。パワーじゃなくて、振り回す力が」

「パワー？」

「自分で考えなさい」と言われてしまった。

頼む子6

東条さんから電話をもらって、謝ったら、笑っていた。

「いいよ。お前がかわいいかどうかを自分で確かめると言った時点で、それほどじゃないだろうと予想したから、それなりレベルの男にしておいたし。相手はめげないタイプだから大丈夫だよ。気にしてないから」

「ごめん、かなり失礼なことをしたんじゃないかと思って」

「気にしなくてもいいさ。時々、そういう子も混じるからね。合コンのときに持ち物検査してるし」

「はあ？」

「お前は疎そうだ。慣れている同士だと、話もスムーズで何度か席替えもするし、それなりに楽しめるけど、値踏み系はちょっと困るから。動きが自分勝手だね。その子が文句言ったら、俺のせいにしておいてくれ。紹介できなくて悪かったと」

「あなたのせいじゃないじゃない。私が余計なことを頼んだんだから。彼女の狙いが分かっていたら、頼まなかったのに、ごめん」

「いいよ」と軽く流してくれて気が楽になった。東条さんはこういう部分が付き合いやすいので、女性も気軽にデートするし、その後、会えなくなってもうらまれないのかもしれない。

「それより、お前、洋服を買っておけよ」

「お金ない」

「バイトしろよ。洋服にメイク道具、髪も切ってもらっし」
「嫌だ」

「困ったやつだなあ。学園祭、どうするんだよ？」

「出たくないんだけど」

「今更、言っなよ」

「だって、今、一番自信がないかもしれない」

「そうか？ お前はいい線言ってると思う。それなりに順調」

「どういう意味？」

「ライバルとしても恋人候補としても育てている段階だし」

「育成ゲームじゃないんだからね」

「似たようなもんだろ」せっかく見直したのに、この言い草、ありえない男だ。人のことを何だと思っているんだか。

「あなたは多くの女性とシュミレーションゲームを楽しんだら」

「十分、楽しかったよ」とうれしそうに言ったので、言うんじゃないなかつたなため息をついた。

厳しい世界1

本屋でバイトをしていた。さすがに見習いだけでは旅行代が貯められないので、先生に相談して、先生がよく行く本屋を紹介してくれた。そのバイト先から帰ったら、母が珍しく夕食の用意をしていた。お客さんがほとんど来なかったらしい。

「開店休業だね。夏休みだと言うのに」とぼやいた。秋さんは来ていない。母が、

「早く学園祭のチラシを配ってちょうだい」と、この間と逆のことを言う。姉とそういうところは似ている。その場に合わせた発言をする。結構、調子がいいところもある。

「無理。できれば出たくなかった。あの人、知れば知るほど、お母さんの言うとおり。薄っぺらさが目立つ」

「親子で似ているわね」

「なにがあつたの？」と聞いてみた。何度か聞いては見ただけで、「そのうち、教えるわ。ちょっとね」としか言ってくれなかった。

「子供は知らなくてもいいの」

「ふーん、お父さんと知り合う前？」と聞いたら、

「あなたは時々勘が良くなるからね」と呆れていた。どうやら、当たりらしい。

「勘って大事かな？」

「そうねえ、占い師としても女性としても大事かもね。鈍すぎて二股掛けられたら嫌でしょうし、利用してくる男がいたとしても途中で気づかないと困るからね。でも、勘が鋭すぎても、これも困るのよね」

「どうして？」

「電話の着信音だけで女性からかどうか見抜ける」と言ったので、「ははは」と笑うしかなかった。私は母にこういうところは似ているようだ。私もそういうところがある。ただ、分からないときも多

いから、占い師としては困るけど。

厳しい世界2

「占い師として、自分を磨くにはどうしたらいいかな？」

「練習は積んでいるでしょ」

「そうじゃなくて、相談内容に深みがないでしょ。人生経験が少ないし。前にあの男に言われたの。学生がなりたいたいと思っている職業の実態ぐらい知っているって」

「確かに高校生では分からないかもしれないわね」

「あの男に言われて、本は読んでみたの。友達が貸してくれたから。でも、あれって、裏のことまで書いてないでしょ」

「裏？」

「テレビ局に行つて、そこで見たの。歌手とか芸人とか、テレビで見るとちよつと印象が違つてたから、驚いて」

「ああ、それはテレビ用に合わせているのよ」

「合わせる？」

「需要に合わせているだけよ。テレビ局のプロデューサーの意見に合わせているの。普段の自分をそのまま出していたって、テレビ画面を通して見ると、印象には残らないし、テンションが合わないのよ。テレビは独特だからね」

「お母さん、良く知ってるね」

「知り合いに聞いたのよ。昔、一時期だけ売れた芸人のお客さんが来ていた占い師がいてね、そこでばやかれたらしいの。先輩にそういうことを教えてもらったらしいけれど、テレビで売れるにはどうしたらいいかと占い師に相談したの」

「へえ、そういうことを教えてくれる先輩がいるんだね」

「でも、その人は向いてなかったのね。今は時代劇のチョイ役をやりながら、喫茶店をやつてると聞いているわ」

「チョイ役？」

「大部屋俳優を多く抱えているプロダクションに登録しているそう

よ。時々、知り合いに頼んで、時代劇などに出演してもらっているそうだから」

「お母さん、そこ、紹介してもらえないかな」

「あら、どうして？」

「聞いてみたいの。実態を」

「楽しい話ばかりじゃないかもしれないわよ」

「分かってる。できれば、歌手を顧客にしてる占い師も紹介してほしい」

「だったら、秋ちゃんに頼みなさい」といわれてしまった。

厳しい世界3

尋ねたところは小さい事務所で、働いている人が2人だけだった。電話と小さなデスクが置いてあるだけ。後は古い書類ケースが並んでいるだけだった。

「君、誰？」と事務所に人に言われて、「大部屋俳優さんに社会見学でお話を聞きたい」とお願いした。

「ふーん、そう言えば、そういうの、頼まれていた気もするな」と言っていた。そのうち、人が来て、事務所の人に仕事の話をして、その人に頼んでくれるようお願いした。

「俺、有名俳優とか知らないよ」と言われて、体よく逃げられてしまった。何人か頼んで、そのうち、派手な化粧の女性が来た。女性は初めてだったけれど、何とか頼もうと思ったら、すぐにOKが出た。

近くの喫茶店で話を聞いた。ケーキも頼んでいいか聞かれて、仕方なくうなずいた。その人の話は長かった。名前は聞いたことのある俳優さんとの共演の自慢話から始まり、映画監督にほめられた話などをしていただけで、何とか誘導して、テレビ業界の話を聞いてみた。

「時代劇も現代劇もそれなりに出るけどさあ、でも、実態なんて、色々あるわよ。ここでは言えないようなことも多いしね」

「いえ、言える範囲でお願いします」

「そうねえ」と色々と教えてくれた。役柄がどうやって決まっているのか。プロダクションの大きさも関係があるとか、有名俳優の子供などのコネもあるとか、番組の責任者に気に入られるといいとか、スポンサーも大事とか、主役級の役者の引き立てられることもある。けれど、その反対に主演クラスの人に嫌われると色々困るとか、犬猿の仲も当然あって、女優同士が目も合わさないと、通りすがりに嫌味を言い合っていたと言う話になって、さすがに、

「怖いですね」と言ってしまった。

厳しい世界4

「あら、それぐらい当然よ。役が小さくても、役の取り合いなのよ。仲間同士に見えて、ライバルでもあるから複雑なの。同じ事務所に登録していたって、友達になんて中々なれないしね」

「どうしてですか？」

「足の引っ張り合いは同じ事務所でも、いくらでもあるからね。スキャンダルをでっち上げられると困るから、同じ仕事をしている人には自分の弱みは見せられないのよ。そういうことを言わないような人に打ち明ければいいと思うじゃない？　ところが浮き沈みが激しいから、数ヶ月で立場が逆になってしまふことも多々ある。そうになると、自分が下になつたら面白くないからって、腹いせで嘘の話も混ぜて知り合いに教えてしまふの。そういうのを記者が目ざとくかぎつけて、記事にされてしまふ。もつともらしく書いておいて、嘘が混じっていても、相手に怒ってもまともに聞いてもくれないし、釈明もできないからね」

「そうなんですか？」

「噂が一人歩きするような状態がいくらでもあるものなのよ。大変なのよ」と言われて、考えてしまった。

「それに芸能事務所も数え切れないくらいあるしねえ。大きいところに所属したいと思ってる子は大勢いるけど、中々難しいからね。プロデューサー、ディレクターの前だところつと態度が変わる子もいくらでもいたわよ。ほら、あの有名な」と名前を出していたけれど、友達が喜びそうな話ではあるけれど、本題からずれているなと思ひ、適当に流して、

「オーディションなどはどうでしょう？」と聞いた。

「アピール合戦になるわね。いかに強く印象に残すか、いかに自分を売り込むかが勝負よ」

「選考者に合わせるってことですか？」

「それはあるわね。選考している人によってどこを気に入るか
ことは計算するわよ。役柄に合わせて服装も選んでいくし、メイ
クも変えるし、かつらもつけたことがあるわ」そこまでするんだ。

「大変ですね」

「それでも、若いころは女優志望だったからね。結婚してやめちや
ったけれど、やっぱり楽しくてね」と言っていたので、それだけ魅
力がある世界なのかもしれないと思った。

厳しい世界5

その人の話を聞いた後、別の男性にも話を聞いてみた。この人は缶コーヒー一本だけで済んだ。孫が同じ年らしくて、うれしそうにしている、

「そうだね。厳しい世界ではあるよ。引き立ててもらわないと何も始まらないからね。目に留まったら、その後も仲良くしておかないと。色々な人とね」

「そうなんですか？」

「下っ端もいつかは出世するからね。ADさんもいつかは出世して使ってもらえるかもしれないから、気は抜けないよ。それに、いくら才能があってもね、容姿が重要なんだよね」

「そうかもしれないですね」

「同じ才能なら、綺麗な人、目立つ人のほうが選ばれる可能性は高いし。それに、好感度も重要だからね」

「好感度？」

「そう、同性に好かれるような人は息が長いと思うよ。異性だけに人気だと一時期人気が出ても、その後続かない人が多かったね。次々に若い人が出てくるからね。男性だと若い女性が好きだし、女性も新しいアイドルが出たら、そちらが気になるでしょ？」と聞かれて、首をひねった。あこがれのアイドルと言われても、昔、それなりにいいなと思った人は何人かいたけれど、熱狂するところまで行っていなかった。

「君は真面目そうだねえ。新しい人が次々出てくると言うことは新鮮味がなくなったら、飽きられてしまうし、常に自分を磨いていないとね」

「大変ですね」としかいえなくて、

「そうだね。努力は必要だよ。世渡りと人間関係と才能と努力。だけだねえ、それだけでも駄目なんだよね。芽も出ずに辞めていく子

が何人もいるから、厳しいんだよ」と教えてくれて、私は何も分かってなかったなと思った。

「無知って怖いね」母に思わず言ってしまった。テレビを見ながら、母が食事をしていて、テレビ画面に映っている人を見て、何も知らずに見ていた時と違って、頑張っているんだろかなと思った。かわいらしい顔をした歌手を見て、「テレビに出られて、綺麗な衣装が着られて、適当にインタビューを受けちゃってさあ。そう、かわくないのに」と言っていた子がいたけれど、そう甘くないなと思った。

「クイズ番組に出て商品もらって、適当に答えているだけだ。あれなら、俺のほうが正解率が高いね」と自慢していた男子がいた。でも、そのクイズ番組に出る前にすでに競い合いがあるのかもしれない。モデルを見て、「私もやせたら、この子よりかわいいのに」と言っていた子がいたけれど、ダイエットするのも大変かなあ。少しでも太ったら、ライバルに、「太った？」なんて嫌味を言われるんだろうか？

厳しい世界6

「そうじゃない？」 怜奈ちゃんと電話して、色々あったことを話して、ダイエツト話とか嫌味を言われるんだろつかという話まで及んで、軽くそう言われてしまった。

「ああいう人たちって、自己顕示欲が強くないと出られないよ。根も葉もないひどいことも言われるかもよ。それでも、平然としてニコニコできるような性格じゃないと無理だと、友達が言ってたし」「そうなの？」

「オーディションとか、受けてる子の友達が教えてくれた」

「なるほどね。色々あるけど、画面には出てないもんだね」

「そんなのが見えたら、誰がテレビを見るのよ」と笑われてしまった。確かに、それが見えたら、しらけるかもしれない。裏で悪口を言う子や見下す子に占えないのと同じかも。

「楽しそうにテレビに出ているのにね」

「楽しいんじゃないの？ 『人前で話すのが大好き、自分をもっと見て』と言う子、時々いるよ」

「なるほどね。楽しいんだ」

「楽しいからこそ、出たい人も多いんだと思うよ。カメラのフラッシュを浴びて注目を集めて、『どう、綺麗でしょう？』と言い切れるような人じゃないとね」

「すごいね、それ」

「桑島さんがそうでしょ」と聞かれて、クラスの派手な女の子を思い出した。学校にお化粧をしてきて、先生に何度も怒られていると聞いている。年上の彼氏が学校まで何度も迎えに来ていて、クラスメイトとも距離感がある。話すのはいつも一緒にいる二人だけ。「あなた達とは違うのよオーラがある」と言っていた子がいた。

「なるほど、良く分かった」

「真珠も努力してるんだね。本屋のバイトはどう？ 出会いはあつ

た？」

「ない。探してない」

「一途だなあ。こっちは明日もデートだから寝ないと。美容に良くない」

「はいはい、怜奈ちゃんはかわいいからいいね。結婚相手が山ほどできそう」

「そうね、今ぐらいから見つけておいてもいいね」

「余裕だなあ」

「真珠も頑張らないと、あの人にしても言いと思うよ。条件は悪くなかったし」

「無理」と言ったら笑われてしまった。

分からない男1

バイトが休みの日に、東条さんが突然やってきて、

「出かけるぞ」と言っただので、

「疲れた。今日は無理。それに出かけようかなと思ってたし」

「約束してるのか？」

「日時は指定してない。『いつか、行きます』って言うてある」

「ふーん、じゃあ、俺に付き合えよ。時間が空いたし」

「あなたの時間を埋めるために、私を使わないで。他の女性で埋めてください」

「だから、言っただろ。そろそろ、やめようと思ってるって。本命候補を育てておかないと」

「候補は何人？」

「一度に何人も無理だよ」と言っただので、

「今まで何人を育ててきたのよ？」と聞いた。

「そうだな」と考えていて、

「はいはい、思い出せないぐらいなのね。あなたには付き合いきれないよ。道楽でやられても困るからね」

「そうか？ 彼女に昇格するまで、時間をかけているだけだし」

「今まで、本命なんていたの？」

「うーん、そう言われると少ないかもな」

「浅木さんもそうなんですよ」

「いや、彼女はそれほど長くないよ。大学に来てからの付き合いで、何人かが誘ってたけれど、俺とだけ付き合ってくれたし」

「さりげなく自慢しないでよ」

「俺、モテるからさ」

「かるーい人だね」

「それより、出かけようぜ」

「溜まっていた家事があるんだけど」

「母親がやるもんだろ」と聞かれて、ため息をついた。

分からない男2

結局、強引に連れ出されてしまった。「学園祭のことで打ち合わせもあるし」と言われて渋々だった。こんなことなら、神宮寺の誘いのほうに乗ればよかったなと思った。

「お前、家事やってるなんて、意外と苦労してるという俺の占いは、また、当たったな」

「またつて、なによ？」

「初恋は実りそうもないからな」

「がんばっているわよ」

「見てるだけだろ。せいぜい、挨拶程度。それで、どうやって進展するって？」

「そう言われても、勉強の邪魔になつたらいけないし」

「ほらな、言い訳をするんだよな。自分ができないことを言い訳してごまかすのはやめろよ。まず、やってみてから考える」

「他のことならそうするんだけど。雪人さんは高嶺の花だから」と言ったら、思いつきり笑っていて、

「失礼なやつ」

「憧れを恋と勘違いしているうちは無理だね。男の本性なんて、分かったもんじゃないぞ。あの男も意外としつかり恋人はいると思うけど」

「知らないよ。多分、いないんじゃないかな？」

「あいつの大学での様子を聞いたこと、あるか？ あいつの知り合いにでも聞いてみる。意外と、恋人と大学で会ってデートしてるかもよ」

「一番不安に思っていることを言わないで」

「臆病なやつ」

「あなたとは違うわよ。軽い付き合いばかりしてるから、分からないのよ。相手がどう思うか怖いなんて思ったこともないでしょ」

「俺は自分がどう思うかが重要だね」

「自分本位」

「相手だって同じだろ。目的なんてね」

「どういう意味？」

「お前だって同じだと思うけど。相手のことを思っているような発言でごまかしているけど、結果がはつきりするのが嫌なだけだろ。振られたら怖いからただだね」

「あなたって、絶対に二重人格だね。お客さんとかわいい子の前だけ、性格を変えてない？」

分からない男3

「多面性なのはみんな同じだろ。お前だって、先生の前、親の前、友達の前、同じ顔で接しているか？」と聞かれて、そう言われたら、言葉遣いも何もかも違うかもしれない。

「怖い先生と気さくで友達感覚で話せる先生と態度が変わるだろ。それと同じ」

「煙に巻かれている気がする。説得力があるような、ないような」「みんなそれぞれ、多面性を使い分けてるよ。無意識にね。一度、心理関係の本も呼んでおけよ。男性心理も分かってないみたいだしな。神宮寺ってやつも苦労していそうだ」

「それは言わないで。悪いなって思ってる。今日だって誘われてたけれど、断ったのに、こんなやつと一緒にいるから悪くて」

「こんなやつと言うな。あいつより俺のほうが楽しいぞ」

「楽しくないよ」

「これだけ話しておきながら」

「あなただと、つい言ってしまうだけ。神宮寺と違う」

「友達止まりだろうな、あいつの場合は恋人になるなら、お前の憧れがぶっ壊れた後しか無理だな」

「ぶっこわれ？」

「そう。お前は振られたり振ったりした経験もなさそうだ。表面だけ見て、相手を好きになっただつてもりでいるだけ。本当に好きだったら、もっと早く言ってるね」

「本当に好きだから、却って言えないもんじゃないの？」

「言えないうちは本物じゃないね」と言い切っていた。こいつと話していると何だかおかしくなってくる。

「ずれてる」

「お前のほうが分かってないだけ。経験不足な真珠ちゃん」

「馬鹿にする言い方をしないでよ。あの人たちと同じなんだ」

「誰だよ？」

「あなたの友達」

「その話は禁句。あいつらは怒らすと面倒なんだよ。今まで、色々あつたみたいだからな」

「色々つて？」

「お前の学校にはいないのかもな。あいつらは親が金持ちだから、有力者とのつながりも強いから、色々あつても話が表ざたにならないからね」

「親がもみ消してるってこと？ 信じられない。どういう人たちと付き合ってるのよ」

「そこまで深くは付き合っていないよ。誘われたときに、時々参加する程度。他の友達とも広く浅く」

「男性も同じなんだ？」

「一人に縛られないだけ。俺、人気があるから」駄目だ。こいつはとことんおめでたい。

「幸せな男」皮肉をこめて言ってみたけれど、

「ありがとう」と平気で言い切っていた。駄目だ、つけるクスリがない。

分らない男4

一緒にウィンドウショッピングをしていた。当日、着る洋服のことで意見が合わなくて喧嘩したり、メイクをするのをどうするかで迷っていたら、お店のお姉さんにちゃっかり頼んで、メイクしてもらって、

「似合わないんだけど」とぼやいた。高校生だから軽いメイクにしてもらったけれど、

「もつと、色々試せばいいだろ。臆病者」と言われてしまった。休日に会った友達が目の大きさが激しく変わっていて、最初誰だか分からなかったということを教えたら、

「それでもいいだろ。その子はがんばってるんだから、かわいいじゃないか」

「そう言われるとそうだけれど、日頃の彼女とギャップがあったから」

「学校と親の前だけそうしてるだけ。そっちが彼女が本当にしたいほうだからな。それぐらい分かれよ。占い師のくせに女の子のそういう心理が分かってないな」

「おしゃれしてる時間とお金がなかったの」

「なんで？」

「小さなころから家の手伝いがあったし」

「ふーん」珍しく東条さんが何も言わなかった。

「あなたとは違うよ。おこづかいたつぷりもらって、ああいうお金持ちの子供と一緒に遊んでいる人とは価値観が違うの。あなたのほうこそ、そういう気持ち、分かっているの？」

「当然だろ。今まであらゆる女と付き合ってきた。大概、何考えているか分かるようになったね」

「あっそ」

「相手の言葉だけで、どういう心理か読めるだろ。この間もお前が

紹介してくれって頼んだとき、かわいいかどうかを聞いたら、お前は自分で確かめると言った」

「それがなによ？」

「かわいい子なら、そうは言わない。『かわいいよ』とすぐに答える。自分で確かめろってことは、お前はそれほどは思っていないってことだからな」

「違う。人によって好みが違うから、私がかわいいと思ってても、あなたは違うってことがあるでしょ。男子に人気がある子と女子に人気がある子の違いってことよ」

「ああ、あれは容姿と雰囲気を選んでいるのと、ライバルになりそうか、好きか嫌いかを本質で選んでいるかの違いだろ」

「本質？」

分らない男5

「女の子が嫌いって言うタイプと男が嫌いってタイプが分かれるのと同じだよ。自分にとって、どうなのかが重要。女の子が嫌いって言うのは、自分の敵になりそうなタイプが多いからな」

「敵？」

「そう振り回しそうなわがままな子も嫌がられるけれど、それは男も同じだけど、女の子だけ嫌われる要素があるからな。男の前だけ態度を変えるとか、抜け駆けしそうとか、そういうこと」

「それはなんとなく分かるけど」

「たださあ、その統計も当てにならないだろうって、女たちが言ってた」

「え、なんで？」

「テレビ局の場合は街角アンケートとかするだろ。それだと積極的な子が気軽にやりたがる。消極的なタイプは逃げたりするから、意見が偏るだろうし」

「え、どういう意味なの？」

「積極的な女性が嫌うタイプは、消極的な女性とは違ってくると思うからね。例えば、積極的な人の場合はおとなしい子やつきりしない子が苦手って人も多い。消極的な子だと、ずうずうしい人、わがままな人が苦手と言うだろうし」

「ああ、そういうことね。統計をまんべんなく取っていたら偏らないけど、取り方によって違いが出てきてしまうってことね」

「そういうこと」

「そう言われるとそうかもしれない。学校で『あの子、駄目』とクラスメイトのことを駄目だししている子達がいるけれど、割と積極的だし、はつきり口に出す子だから。でも、口に出さない子が苦手と思っているのが、その子達なんだよね」

「だから、自分と似たような人は許せるけれど、『このタイプは苦

手』って言うのが一緒だとグループになりやすいただけだろ。男子に聞いたとしても、おとなしいやつらに聞けば、きつと、『清楚で優しく文句を言わない人、ずうずうしくない人』とか並べそうだ」

「積極的な男子だと違ってくるの？」

「俺はそういうので合わせられるから、そこまでこだわらないな。ただ、かわいい子の方がいいけど」

「高津と同じだ」

「誰だよ、それ？」

「『かわいい子以外は女じゃない』って、言い切ったことがあるらしくて。クラスの女子から反感を買ってた。ただ、本人に抗議しても軽く流しておしまい、どこか憎めないところがあって、振られてばかりいるから、それでそこまで言われてないけどね」

「得な性格だな。俺も同じだけど」

「はいはい、自慢はいいから」

「お前だけ、俺をちゃんと評価しないな。今まで何人かいたけれども。小学生に駄目だしされたときは逃げたけれども」

「小学生を彼女に仕立てようとしたの？」

「まさか。占いが当たる小学生として有名だったから、会ってみただけ。でも、駄目だった。自信満々でこの俺に難癖つけてたから。面白くなくて、育てたいとさえ思えなくてさ」

「見境ないね」

「育てるのも楽しいぞ」と笑っていて何も言いたくもなかった。

分らない男6

食事を奢ってくれるというので、仕方なく一緒に食べていた。

「何か魂胆があるの？」

「ないよ。女性には優しいからね」

「嘘ばかり。あなたの場合は隠しているだけでしょ」

「男も女もお互いを理解しあえないだろうな、一生ね」

「え？」

「だからこそ、そばにいたくなる」

「意味不明」

「分かってしまったら面白くないし、そこで終わりだろ。楽しくないし」

「次から次へと行くわけだ」と呆れたら、

「お前の場合は付き合ってから言えと言ってるだろ。学校の友達に聞いているだけでは難しいぞ。実際に振り回されてみるよ。大変だぞ」

「今、この瞬間も大変だけど。あなたに振り回されて」

「ここまで親切にしてやってるのに」

「してやってる？ 上から目線だね。もっと下げてよ」

「子ども相手にはこれぐらいでちょうどいい」

「何が育てているよ。愛情もなしに好奇心だけで育てたってうまくいかないでしょ」

「はいはい、かわいい、かわいい」と言っただのにらんだ。

「そういう顔をするな。真珠ちゃん」

「気安く呼ばないで」

「俺のことも『尚毅』でいいぞ。そろそろね。『東条さん』って言われるのも悪くないけどな」

「じゃあ、カロン」

「そっちかよ。犬みたいだ」と笑っていた。

分からない男7

「カロンって不思議な名前だね」

「プロキオンと同じ。星から取った」

「星？」と上を指差した。

「そう、その星。お前、そういうのは気になっても調べないタイプか？」

「さあ、調べるほどでもないから。そのうち聞けばいいかなと思つて」

「大雑把な女」

「いいでしょ。母親似なの」

「お母さん、綺麗だったな。若いときはさぞかしモテただろうな。お前と大違いだろう」

「そういう部分はおねえちゃんがモテてると思うけど」

「あれは一部だけだろうな。もしくはすぐ冷める」

「ひどい」

「怒ることないだろ。必死さが困るからね。金目当ての女って、意外とすぐ分かるぞ。それをさりげなく隠せる女のほうがいいだろ」

「そう言われても、実態知らない。家ではそういうことを言うけれど、友達も多いみたいだよ。学生時代から遊びの誘いが多かったし、電話も多く掛かってきていたし」

「それは類友だけだろうな。お前のようなタイプなどは少ないはずだ。積極的ではあると思う。遊びと美容情報と男に關してはね。でも、それで彼女が狙っている男にモテるとは思えないけど」と言われてしまい、何も言えなかった。

「良く知らない」

「ほらな。今まで家にまで連れてきたことは？ ああ、ないか。彼女はそういう部分を隠して付き合いそうだな。話が決まってから、やっと紹介するかもね。でも、難しいかもな」

「どうして？」

「ちよっとな」としか言わなかった。

分からない男8

「テレビに出るメリットってなにかな？」食事を終えて、ジュースを飲んでいるときに、聞いてみた。

「メリット？」

「だって、華やかに見えて大変そうだって聞いたから」

「ふーん、やっと調べたのか？ ああいう世界って、確かに浮き沈みは激しいけれど、ファンに応援してもらったり、声をかけてもらったり、そういうのがうれしい人ならいいんじゃないのか？ それに、テレビって言ったって、色々あるだろ」

「女優とかは？」

「賞がもらえる。賞賛される。お金ががっぽり入る」

「がっぽり入るものなの？」

「一部だけね。女優と言っても、映画にテレビ、舞台もあるし。端役すらもらえないような人もいるだろうしね。それだけで食べていける人なんて、ほんの一握りらしいぞ」

「少ないんだ？」

「やりたがる人は多いよ。でも、のし上がるには大変だよ。端役から上にいくのは大変だと思う。女優でも売れる前に面白くない仕事をしていたと言う人は多いだろうな。どれだけ綺麗でも、演技が下手だと飽きられちゃうし」

「そう？」

「それに、画面で見る性格と正反対の人を何人か見たことがあるし」

「え、そうなんだ？」

「親父の付き添いで一緒にテレビ局に行ったことがある。そこで、親父に占ってほしいと頼んできた女優、俳優が何人かいたよ。親父に頼んでいるときは媚びて愛想が良くて、でも、ADには横柄な態度で命令してた。マネージャーにわがまま放題言っているのも目撃して冷めたしね」

「怖い」

「でも、それぐらいきつい性格で、したたかじゃないと残れない世界なんだと思う。だからこそ、占い師に何かと相談しているみたいだからな。親父は何度か頼まれていたし」

「ふーん、そうやって有力者とながりができるんだ？」

「そういう人たちと付き合っておくと紹介してもらえるんだよ。一流スポーツ選手とか、一流企業の社長や重役とか」

「そう」

「お前の母親はしてないみたいだな」と言われて、にらんだ。

「いいところ、中小企業の社長だろ」

「知らない。お客さんのことをあまり話さないもの。守秘義務があるでしょ」

「そうだったな。じゃあ、今のも内緒、と言っても固有名詞は出さないのが鉄則だけだな」

「固有名詞？」

「名称だよ」うーん、そういうのも大事なのかと考えていた。

分からない男9

「今日、どこに行く予定だったんだ？」家に送ってもらいながら聞かれて、

「ちょっとね、知り合いに頼んで、色々と」

「ふーん、俺に言えないことか？」

「言う必要はないでしょ。あなたは赤の他人なんだし」

「恋人候補だろ」

「違います。あなたが勝手にそう思っているだけ」

「じゃあ、何で、今日、付き合っただんだよ？」見透かすような含むような顔でこっちを見ていたけれど、

「敵の実態を知りたかっただけ。ライバルでもないけど、占い師としてのあなたは興味があるからね。まだ、未知数だけど」

「計り知れないだろ？」

「分からない。あなたの占いつて当るの？」

「当ると思えば、当る。当たらないと思えば当たらない」

「なによ、それ？」

「自分で確かめてみれば」と笑っていた。

家に着く直前に、

「これからデートなんですよ」と聞いたら、

「いい勘してるんだな」と笑った。

「夕方からデートする前に時間が空いたから暇つぶしって訳なの？」

「楽しかっただろ」と平然と言い切った。つくづくおめでたい。自分と付き合える女は幸せだと思ひ込んでいる。

「あなたが良く分からない」家に着いて、車を降りてから、

「付き合えば分かるよ」と言い出した。

「絶対にありえない」と言ったら、そばに寄ってこようとしたので、
「やだ」とにらんだ。

「『楽しかったわ。ご馳走さまでした。また誘ってね』と、言えばいいものを」

「ない」

「じゃあな、俺は楽しかったよ」と、言いながら車に乗り込んで行ってしまった。

「呆れるなあ」

「お前のほうが呆れるだろ」怒った声がしたので、振り向いたら、神宮寺がお店から出てきて、

「え、いたの？」

「何がいたのだよ？ 俺の誘いを断って、あんなやつと」とかなり怒っていたので、

「ごめん」と言っただけで、

「呆れるよ。何が気軽にデートできないだよ。あいつと付き合ってるじゃないか」

「学園祭の打ち合わせ」

「言い訳はいいよ。あいつにだけは近づくなって言ってるだろ」

「神宮寺、変だよ？」いつもだと、そこまで怒らないのに、どうしたんだろう？ と思った。

「お前は俺が心配したことも分かってないみたいだ。あいつと付き合い合つとろくなことになるぞ。それくらい分かれよ。俺がどれだけ心配してたか。携帯だって出てくれなくて」と言われて、慌てて、携帯を取り出した。電池切れだった。

「ごめん」と謝った。

「昨日、充電しようと思って疲れてそのまま寝ちゃったから」

「言い訳はいいよ。勝手にしろ」と帰ってしまった。

分からない男10

「神宮寺？」と声をかけたけれど、振り向いてもくれなかった。家に入ったら、

「喧嘩？」母が私の様子を見ていたらしくて、聞いてきた。

「怒られた」

「かなり心配していたわよ。神宮司君、東条さんのよくない噂を聞いたらしくて、それで心配して、わざわざ来てくれたみたいよ」

「え、そうなの？」

「友達と一緒に出かけたらしいけれど、その友達が教えてくれたらしくて」

「悪いことをしたな。今日、神宮寺に誘われていたのに」

「学園祭の打ち合わせと言っていたじゃない」

「半分はね。半分は違うみたい」

「あら、なに？」

「良く分からない。あの人、どうして近づいてきたんだろうね」

「真珠に興味があるだけでしょうね。占い師としてね」

「見習いの卵になったばかりで占い師と名乗れないくらい未熟だよ」

「多分、あなたのことを相当気にしているのかもしれないわね。そういう能力だけはあるのかも」

「え、何の能力？」

「相手の力量が分かる能力よ。彼はライバルになりそうな相手をマークしているだけでしょうね。彼の占いを直接見たんでしょう？ どうだった？」

「さあ、お客は喜んでいたよ」

「接客の仕方とか、そういう部分じゃないわ」意味が分からなくて、母の顔を見た。

「まあ、いいでしょ。そのうち分かるでしょうから。ほっときなさい。宣伝のためと割り切って、それなりにつきあえばいいでしょ」

「お母さんって、すごいね、そういうところ」

「女一人で生きてると流すところは流さないと、疲れるわよ」

「お母さんに似ちゃったね、私。面倒だと、自分が悪者にされても流しちゃうところがあるって、怜奈ちゃんに怒られた」

「自分が悪者にされるってどういうことよ」母がちよつとむつとしていた。

「お母さんだつて、あるでしょ。占い結果と実際の結果がこちらは当たったと思っけていても、相手は当っけていないと言ひ張ったり、納得してなかつたり、振られたら私のせいにされたことが何度かあるから、それで『謝らなくてもいいのに』と、怜奈ちゃんが怒つてた」

「ああ、それね。確かにお客様相手だと、相手の気持ちが一番大事だからね、客商売だとそういう部分でこちらが泥をかぶると言うか謝るケースはあるわね。それなら、納得ね」

「お母さん、変わり身はやい」

「後まで引きずると占い師としては大変なの。あなたも切り替えるようにしなさいね」

「お姉ちゃんはお母さんに似たんだろうね」

「神宮司君も仲直りしておきなさい。心配してくれて、勉強でもお世話になるんだしね」

「お母さん」と言っただけで、聞いてなかつた。お世話になる人だから仲直りするっと言っのがどうも苦手だ。それより友達だから仲直りしたいと思っただ。

相談の数々1

神宮寺には何度か電話を掛けたけれど、出てくれなかった。怜奈ちゃんに相談したら、しばらくほっとくように言われたけれど、お店に遊びに来たクラスメイトから、神宮寺が女の子と何度も目撃されていたようで、

「取られちゃうよ」と軽く言われたけれど、仲直りできないまま終わっちゃうのが心配だった。

「全滅」怜奈ちゃんがお店に来ていきなりばやいた。

「何が全滅？」と聞いてみた。聞かなくても分かってるけれど、

「誘われて、これはと思った人、全滅。全然、駄目」

「そう。残念だね」

「占って、どこに会いが落ちてるか」

「落ちてないでしょ。でも、やれと言うやら、やるけど。半額ね」

「はいはい、友達割引ね」と言って占ってあげた。今の状況、問題点をいくつか挙げて、

「むずかしいね。しばらくは同じようなことを繰り返す」と言ったところで、東条さんが言っていたことと同じだなと思った。あいつの占いは当たっているのかもしれない。

「そうだね、時間が掛かるよ。出会いの数は多いと思う。ただね、怜奈ちゃんが満足するようなものはないね」

「そうなの？」

「自分をもっと磨いたらって、怜奈ちゃんには必要ないかも。多分、譲るところは譲ったほうがいいのかもしれない」

「なによ、それ？」

「妥協できるところは妥協してみるってこと」

「嫌。絶対に嫌」と言ったので、そうだろうなと思った。

「真珠だって分かってるでしょ。私が妥協できない性格だって」

「そうだけどね。怜奈ちゃんは達観してるところもあるけれど、納得できないことは怒るものね。結論としては、しばらく無理ってことで」

「えー、もつと明るい未来がほしい。占いて、そういう結論じゃないと駄目だよ」と怒られてしまった。

「ごめん」

「真珠の占いつて、そうだものね。それで当たることが多いからね」「どういう意味？」

「当たり障りのない結論に変えたりしないし、結構、ズバツと言うからねえ。後でそういう意味だったんだと気づくし」

「え、そう？」

「言われたくないことを言われると認めたくないから、相手を怒るものだからね。当たり障りのないほうが苦情は少ないかもね」

「それほどは言われてないよ。それに怜奈ちゃんには本当のことを言ったほうがいいから、教えたけれど、言わない人もいるよ。相手が怒り出しそうな雰囲気ときはさすがにオブラートに包むって」

「そうだよ。確かにそれはあるよね。人に言われたくないことって多い。高津なんて、その連続。『あなただけには言われたくないわ』って、やりあってるものね」高津とデートまでした子がクラスに二人いる。その二人とは良く言い合っている。

「高津って、あれだけみんなに注意を受けても、どうして言っちゃうんだろう」

「だから、流してるからでしょ。人の忠告なんて聞かない人なんていくらでもいるじゃない」と軽く言われて、そうだけどなあと考えながら、

「それより、神宮寺はいいの？」と聞かれた。

相談の数々2

「電話はしてみた。謝ったけれど、何だかそっけなくて」

「面白くないんだと思うよ。学園祭の打ち合わせって大義名分があるって、デートしたと思ってるんだろ。自分とのデートは断られて、東条さんのは後からの誘いで行ってしまった。男の面子があるから、怒り出して引込みがつかないとか、色々あるんでしょ」

「嫌われちゃったのかな？」

「違うよ。真珠のことが心配だったから、それで怒れただけ。そのうち、仲直りできるよ。それより、東条さんは？」

「誘われても全部断った。神宮寺と仲直りしてからじゃないと」

「律儀だね」

「だって、怒らせたままでは」

「神宮寺だって、仲直りしたいと思うてると思う。ただ、きっかけがつかめないと言うか、言い出せないだけでしょ。そのうち、きっかけができるよ。バイト代は溜まったの？」

「怜奈ちゃんが話を変えた。」

「それなりに」

「そう。雪人さんのほうは？」

「勉強が忙しいみたいで、時々見かける程度」

「早くしないと地元に戻っちゃうよ」

「分かってるけどね」とため息をついた。

知り合いの紹介だと言って、占いに来てくれた中学生がいたけれど、わがままだった。「紹介だからタダにしてくれ」から始まって、占い結果が良くないから、いちいち、「えー！」と言ったり、

「もっといいことを言ってよ」とぼやいたり、拳句が、

「えー、こんな結果なの？ これじゃあ、払いたくない」と言い張ったときは、最初に断ればよかったなと思った。知り合いは誰なの

か聞いても答えられなかったので、その子の顔をつぶすのもいけないからと渋々だったのに、そう言い出して、

「だって、当たらないじゃない。こんなことなら他に行けばよかった」と言い出して、「じゃあ、いいです」と言おうとしたら、

「お待ちください、お客様」と母が寄ってきた。

相談の数々3

様子を見ていたらしい母が来たために、

「なんですか？」お客さんは明らかにむっとしていて、

「お客様が『占ってほしい』と言った時点で、お客様との間に契約が成立します。そして、占い師は誠意を持って、相手のことを占わせていただきます。その代償が代金になります」と言われて、お客の子が、

「うっとうしいなあ」と、言い出して驚いた。

「お客なのに、その言い方、ないでしょ」

「お客様は大切です。でも、誠意を持って占うにはそれなりのものがあります。占いをするには集中力が要りますので体力も気力も使います。相談に乗り、話を聞き、占いを行う。そうして、代金いただくのです。簡単に、「当たらないからお金を払わない」なんて言わないでください。占いを提供した後で、内容が気に入らなかったかと言って、払ってもらえないのは困ります」母がきっぱりと断って、さすがに中学生の子が、一緒に来ていた子に助けを求めた。

「どうしよう？」と相手の子が言い出して、

「払うわよ、払えばいいんですよ。何よ、こんな店」と中学生の子が引っ込みがつかなくて立ち上がって怒り出した。

「占い師が提供するものの対価を最初にお知らせしております。それが気に入らないのでしたら、最初からお断りください」母がひるむことなく、はっきりと相手の目を見て言ったら、さすがに迫力で負けたのか、相手の子がお金を渋々取り出して、

「こんな店、二度と来ない」と言い捨てて行ってしまった。

「大丈夫なの？」と聞いた。そうしたら、

「今の子って、例の子じゃない？」と知り合いがお店に入ってきた。様子を見ていたらしくて、

「大丈夫だった？」と聞いてくれて、
「知ってる子なの？」と聞いたら、

「あの子さあ、学校で何度か噂が出てたよ。お店にクレームをつけて、アイスクリームの代金を踏み倒すとか、ハンバーガーをタダで食べたとか自慢してるらしいよ」啞然。

「やっぱりね」と母が言ったので、

「分かったたの？」と聞いた。

「そうね。そういう人はなんとなく分かるわよ。波長が悪いものがあるから、そばに寄れない人もいるし」うーん、そう言われると途中で何度か気持ちが悪かったのを思い出した。バイトや家事などの疲れだと思っていた。

「困るね。うちの評判が悪くなっちゃう」

「誰も鵜呑みにしないよ。あの子の親なんて、もつと色々あるみたい。クレマーの常習者だって聞いたことがある」

「親子で似てるんだ？」

「だから、二度と関わらないほうがいいよ。次から『タダですつと占いをしてほしい』って言われ続けるだけだから」そういう子は時々いるけれど、さすがにさっきのはちよつとなあと思った。

「困るよね、ああいう子。それより、真珠に占ってもらおうと思つて」

「なに？」

「成績が上がらないからさあ、それで」と言われて、
「どうぞ」と席を勧めた。

相談の数々4

夕食のときに、母に苦情処理のことについて注意を受けた。占いたくないタイプが来たら、他の人がいなければ、用事があるところまかしたり、色々な方法を使って断るらしい。

「そう」

「苦情はこういう仕事をしているといくつかあるわ。でも、こちらが謝らなくてもいい場合は、きっぱり言ってしまったほうがいい場合もあるから、気をつけて。さっきの中学生の場合は、あの子だけじゃなく、他の子も連れてきて、その子達も『タダで』と言い出しかねないし」

「そこまで図々しいの？」

「時々いるわよ。おばちゃんに値切られて、その友達も連れてきてくれるのはいいけれど値切ってくるのよね。それを自慢げに言いふらすタイプだから、知り合いに聞かれて困っちゃったし」

「そう。それは困るね」

「こちらとしては最初に価格を教えるのだから、それに不満があるのなら、最初にお断りしてくださいと言っているわね。占った後で、難癖つけて値切ろうとしたり、タダにしてもらおうとするような人って、いい顧客にはならないの。二回目はないわ」

「え、そう？」

「そうよ。長い付き合いの人はそういう部分ではじめがあるものよ。『知り合いに紹介するから安くしてくれ』、『友達を連れてくるから』連れてきたことも紹介してくれたことも一度もないわね。紹介してくれる人は正規料金をちゃんと払ってくれるし、態度もそこまで馴れ馴れしくないわよ。時間もちゃんと守ってくれるしね」

「そういう人を大事にしないといけないんだね」

「さっきの中学生みたいな人は割合から言うと少ないけれど、印象に残るから後で占う人に、少しだけ待ってもらって気持ちを落ち着

けないといけないからね」人によっては、気持ちを落ち着けるために、お香をたいたり、アロマセラピーを取り入れたり、水晶やパワーストーンを置いていたりする。音楽をかける人もいるけれど、ここでは小さな音で聞こえるか聞こえないか程度のものしか掛けていない。相談者によっては体力も気力も消耗してしまう人もいる。そのために切り替える時間がある。

「波長が悪い人って、時々いるの？」

「そうね、真珠は日によって違うんでしょ？」と聞かれた。私は母のように安定した気分を保てない。占いをするには気分が安定していないとちゃんと占えないので、体調管理をするように秋さんに注意されている。睡眠時間を減らしたり、偏った食事をする时要注意される。人によってはジャンクフードも食べない時期を設けるらしい。野菜だけの食事にしたり、断食をする人もいると聞いている。

相談の数々5

「私って、安定感がないからな」

「高校生なら当たり前でしょ。楽しいことも多いし、怒られることもあるし、落ち込むことだってあるしね。恋愛したら、もっとあるでしょうけど」東条さんが言っていたことを思い出した。

「恋愛って、占いを駄目にするの？」

「見えなくなる人もいるわよ。そこばかりに気が行ってしまつて、占いに集中できないらしいわね」

「お母さんはどうだった？」

「それは、まあ、それなりに」と言つた。

「うらやましい」

「真珠はモテないの？」

「怜奈ちゃんみたいに、街を歩けば声を掛けられるってことは少ないよ」

「それなりにはあるでしょ」

「大根とネギを買い物袋に入れて歩いていたら、さすがにない」と言つたら、

「ごめん、そうだったわね」と謝つてきた。買い物は私が学校の帰りに買ってくる。クリーニングなども私が行ったりしていて、母はそういうものをあまりしていない。

「お客さんに言われるのよね。真珠にばかりにやらせているから、縁遠くなるって」

「それが関係あるの？」

「あるわよ。輝子がそうでしょ」と言い切られて、笑うしかなかった。

「そういうのってあるのかな？」

「後でメッキがはがれちゃうんでしょうね。見えてない男も多いけど、それだと輝子が物足りないのよ。お金持ちの世間知らずのお坊

ちやまと結婚するしかないわね。気が強くても許してくれるような寛容だけれど鈍感な人」

「お母さん」とさすがに呆れたら、

「意外と男って口に出さないだけでしっかり見てる人もいるのよね。後でけんかしたときなどにそれを出されると、『そのときに言つてよ』と怒れるし」

「みんながお母さんみたいに言えないよ」

「そうね、だから、小さい喧嘩をしておいて、程よく息抜きしないとね。そういう部分を見せ合えるような仲じゃないと長続きしないわ。取り繕うような相手だと肩凝るし」

「恋愛してみたい」

「やめておきなさい。真珠が恋愛すると靈感が減るわよ。下手したら、一生戻らないかも」

「靈感？」

「勘が鈍るってことよ。真珠は感受性が鋭いところがあるから、それで占いができるのだからね。それで食べていきたいのなら、恋愛は程々に」

「のめり込まない程度にすればいいんじゃないの？」

「コントロールって、できないものよ。意外とね。私もモテたから、それなりにできると思ってたのよね。でも、自分が好きになったときはできなかつたわ。相手を独り占めしたくて、いつも一緒にいたかつたから。それで、駄目になりそうになつたこともあつたわ」

「その恋はどうなつたの？」と聞いたら、思いつき怒り出して、

「あいつだけは許さない……ということね」と言われて聞くんじやなかつたなとため息をついた。

相談の数々6

そろそろ夕食の支度をしようかなという時間に、見覚えのある女の子がやってきた。友達の友達で、確か……、

「どうしよう、大変なことになったの？」といきなり泣き出した。

彼女の両親は離婚しそうだと言う。前もそのことで占いをした。

結果、喧嘩の数は多くなるけれど、そのうち収まると言って、相手は元気がなかったけれど、そのうち、離婚は回避できたと友達が教えてくれていたから安心していたのに、

「離婚されたら、バイトに行かないと、学校に行けないかも、あ、お母さんのほうについて行くとおこづかいがもらえないし、あ、でも、お父さんのほうだと新しいお母さんとうまくなんてやっていけないし、あ、でも、相手は遊びだから結婚しないかも。私、邪魔にされて、……ああ、かわいそう」と一通り自分の世界に浸っていて、

「あ、あの」としか言えなくて、

「だから、占って。前みたいにいい結果になるように」こういうのが一番困る。いい結果が出るように占うのはおかしいと思えるのに、相手が必死すぎて言えなくなる。何とかなだめて占うことにした。ただ、今度はちょっと困った状況で、お母さんがもう耐えられなくなっているようだとか、お父さんの気持ちは向こうに行ってしまうていて、浮気の数が多すぎて、お互いに結論を出したほうがいいのか、迷いがあると伝えたら、

「やだー」と怒り出した。結局、別居するだろう、結論はまだ先になって、喧嘩が多いだろうと言う結果だった。さすがにそのまま伝えられなくて、

「今は冷静になる時間が必要だから。お互いに冷静になるように、どちらの味方もしてはいけないと思う」と言った。

「やだ。すぐに仲直りさせて、私が困る」とぼやいていたけれど、

「難しいと思うよ。時間が必要だから」と答えた。

「疲れた。つくづく、疲れた」

「そうねえ、離婚問題って時々あるわ。相手の不倫とか色々ね。借金も困るしねえ」

「そういうのも来るんだね」

「今は学生相手だけれど、いつか客層が増えてくるでしょうからね。占えない、手に負えないときははっきり断りなさい。自分の力量を知っていないと困るわよ」

「分かった。そうだよ、前に自分が知らないことを相談されて困ったの。あらかじめそういう部分も知っておいたほうがいいんだろ
うね」

「そうねえ、それなりに相手の立場になってあげないといけないし、でも、あくまで冷静に見てあげないとね。同情しすぎたら占いができ
ないから」

「明日、例のところに行つて来る。この間、行けなかったし」

「秋ちゃんの紹介だから、失礼のないように」と言われて、

「はい」と返事をした。

芸能学校 1

秋さんに教えてもらった芸能人養成学校みたいなのところに行った。紹介された人は、歌手のマネージャーをしていた人だった。ついてきた歌手はヒット曲が1、2曲あったらしいけれど、後はバラエティに出て、それでいつの間にかなくなったと教えてくれた。

「何を聞きたいの？」相手の人に聞かれて、芸能人の実態、実際にあこがれて、どれぐらいの人が願いが叶うかなどを聞きたいと教えたら、

「そうねえ。私が見たのは歌手が多いわね。私がついた子は売れるまですごく時間が掛かったの。最初に別の人がついていたんだけど、それまでに芸名を何度も変えて、グループに入ってみたり、色々キャラを変えて、設定を変えてみたのよね。全部、泣かず飛ばずで」

「芸名、キャラを変えるんですか？」

「あら、結構多いわよ。何度も変えて、演歌だったのに他のジャンルに路線に変更したり、バンドを組ませたり」

「え、適応できるんですか？」

「手を品を変えて、色々試してみるものなのよ。実際に、この子は売れると周りが太鼓判を押すような子でも、世間に中々受け入れられなかったり、性格があまり良くなってトークで使えないからラジオ回りしても人気が出なかったりするから」

「ラジオ？」

「そう、地方局に営業に行くのよ。スーパーのイベントで歌ったり、CDショップを回ったり、色々するのよ。販促グッズを自分で配って、ラジオやテレビの力を持っている人にあいさつ回りもしたし」

「そうなんですか」

「でも、私がついていたある歌手は性格がちょっと困った子でね。わがままなところがあって、ちょっと売れたら態度がガラッと変わ

って、それで、結局、歌もそれなり、人気もそれなりのまま終わってたわ。売れるまでも難しいけれど、売れたのを維持するのはもっと難しいわね。それをマネージャーや周りの無能のせいにするような子は応援してもらえないからね。お客様もそういうのが分かってくるから、すぐに飽きてしまうしね」

「難しいんですね」

「自分でデモテープを持ってきた子が何人か事務所に来たわ。でも、挨拶もなっていないし、礼儀も知らないし、自分はかわいいし歌はうまいから当然売れるはずだと思いついて自信満々なのよ。実力に見合った自信ならみんなも応援するけれど、実力がないと、見向きもされないしね。まず、自分のことをわかってないとダメね」

「どういうことでしょう？」

芸能学校2

「自分の魅力をわかって、セルフプロデュースする能力が必要だと思っわ。同じ実力なら魅力的な人のほうが印象に残るでしょ。いくら、歌が上手でもその人自身の持っているイメージが良くないと駄目でしょう？　自分が異性にモテると思うなら、その部分をアピールして演出しないといけないし、同性に応援してもらえするような歌手になりたいのなら、真似したいと思うようなファッションをしてみたり、自分の似合う髪形を色々試したり、自分で詩を書いて自分の世界をアピールするわけ」

「なるほど」

「そういう部分で自分が分かっていない子、状況判断ができない子だと、すぐにいなくなっちゃうからね。受け答え一つで色々言われてしまう世界だし。受け答えが下手な子だと、性格が分からないように露出を控えるという戦略も使うことがあるけれど、それだとある程度知名度が出ないと難しいし、それなりに魅力がないと固定客がつかないしね」

「固定客ですか？」

「そうね。アニメソングだと、それで注目してくれるお客がいるし、同性なら等身大の同年代の子に訴えられるような曲を作っていかなーといけないしね」

「はあ」

「そういうので色々がんばってもね、中々売れないのよ。何年も売れなくて、そのうちプッシュしてもらえなくなるの。結果がいつまでも出ないとね。目をかけてもらえない子だっていくらでもいるしね」

「人間関係も大事でしょうか？　力を持っている人に取り入れるよーうな」

「ああ、それね。確かにそれって大事なのよね。ただ、それだけだ

と長く続かない。自分の魅力を開花させてくれるような相手を見抜く力も必要だけれど、お客様が応援してくれるような子じゃないと難しいわよ。例えば、売れた途端にわがままになる子って、結構多いけれど、それで悪口ばかり言っていたり、傲慢な振る舞いをしていると、それが画面に出てくるからね」

「画面？」

「そう、裏表を使い分けていけば大丈夫だと思うじゃない？ みんな、それなりにやっていることだけど、でも、女の人ってそういう部分で見抜くじゃない。見た目じゃなくて、何気ないしぐさや表情も良く見てる。それで、性格が分かっちゃうからね。他の子を妬んで悪口を言ったり、自分のライバルが脚光を浴びているので文句を言ったりするより、自分を磨いて努力していける子がいいと思うわよ。どこのポジションに行っても、仕事は手を抜かない。挨拶も欠かさない。自分を見失わない。ああいう業界って、利権も絡んでくるから、よからぬ人もいっぱい寄って来るから、自分で気をつけないといけないのよ。友達の紹介でも危ないからね」

「え、そうなんですか？」

芸能学校3

「昔の素行が悪かったころの写真とか出てくる時があるでしょ。それだけでイメージが下がって、お客さんが離れちゃうことも多いからね。性格が良くて応援したいなって、お客様にもスタッフにも思われるような子じゃないと長くは続けられない」

「引き立てられるには運の良さも大事なんですか？」東条さんが言っていたことを聞いてみた。

「ああ、それってあるわね。自分の持っているものが時代に合っていないと困るし、自分を認めてくれる人に出会うには確かに運の強さって大事だと思うけれど、それだけだとすぐに消えちゃうわよ。意志が強くて、何を言われてもがんばれるような子じゃないとね。実力だけあっても認められない、努力をしても必ずしも認められるわけじゃない。でも、一度、ステージに立って、お客さんの賞賛を浴びるとね、やめられなくなるそうよ。何人かがそう言っていたから」

「賞賛ですか？」

「ステージに立って、お客さんが自分の歌を聞いてくれて喜んでくれる。手を振ってくれる。そういう状態を味わっちゃうとやめられないんでしょね。私は別の意味で楽しかったけれどね」

「何がですか？」

「そうね。自分がついた子がどんどん輝いていくのを見るのが楽しいのよ。自分で育てて、段々と自信がついて、受け答えがしっかりしてきて、本物に変わる。楽しいわよ。今もそう思って、育てているけれど、中々いないわ。軽く考えている子があまりに多くて」

「軽いですか？ でも、プロを目指しているのなら、しっかりしているんじゃないですか？」

「プロと言っても、簡単にテレビに出て適当にしゃべって、それで流行の洋服がいっぱい買えて、と思ってるだけの子も多いわよ。ち

よつとかわいいだけで出られると思ってるの。確かに飛びぬけてかわい子なら、短期だけ出られたりするけれど、その後が続かないわよ」

「そうなんですか？」

「歌手にしたって、歌詞や曲を作ってレコーディングして、それから、写真を撮ったり、ビデオを撮影したり、色々するけれど、テレビに出たりする以外の時間のほうが多いのよ。コンサートの時間より、打ち合わせの時間のほうが多いのに、そういうのは嫌がるのよね。待ち時間も多し、変更になることも多し、大人の事情って言うのもあって、それで苦情なんて言えないし、でも、我慢できないらしくて文句ばかり言ってた子がいたからね。すぐにいなくなっただけだ」

「はあ」

「脚光を浴びている時間ばかりじゃないしね。それに売れてくると何をしても、何かと言われちゃうし、嫌な噂を流されても、同業者に嫌味を言われても聞き流せるような子じゃないとね。家庭に恵まれなくて苦労している子が、がんばって残っているのも、それが理由よ。弱い子じゃ、すぐに、消えちゃうからね」

「聞き流せるものなんですか？」

「最初は無理よ。でも、段々と強くなっていくのよ。自分の目的を強く持つて、負けたくないと思いつながらがんばっているのを見ていると、私もその子の力になりたいなって思うからね」

「そうですか」

「あなたもやってみたいのなら、紹介するわよ。占いしながら歌うとか」

「いえ、いいです。遠慮させてください」

「冗談よ。あなたはそういうことに興味がなさそうなものね。でも、不思議な目をしてるわ。ひきつけられるような、見透かされるような」

「そうですか？」それは時々言われたことがある。友達にも何度か

言われたり、男子にはそうやってからかわれたことがある。

「占い師も甘くない世界かもしれないけれどがんばってね」と言ってくれたので、

「ありがとうございます」と頭を下げた。

芸能学校 4

母のお客さんの紹介で客室乗務員をしていて、今はマナー教室を開いている人のところに話を聞きに行ったり、有名スポーツ選手が通うスポーツジムにトレーナーをしているスタッフに話を聞いて、業界の事情を教えてもらった。話は面白いものから大変な苦労話まで色々あったけれど、どこも想像していたのよりはるかに大変だと思い知らされた。

「面白そうだね。私も一緒に聞きに行けばよかった」怜奈ちゃんがデートの帰りに家に遊びに来て、色々あったことを相談した後に言われてしまった。

「デートのほうが楽しいよ。苦労話って尽きないんだね。客室乗務員って、立ち仕事で時間が不規則で腰痛がひどくなることもあるし、体力がないと難しいんだって。楽しいことばかりじゃないらしいの。女性が多い職場だと色々あるって」

「そうだろうね。芸能界と同じじゃないの？」

「それに、スポーツ選手もドラフトとかで鳴り物入りで入っても、2〜3年以上残る人があまりに少ないんだって。小学生から始めて高校や大学に来るまでに体を酷使しているから、故障に悩まされたりする。それをマッサージしてもらったり、針や温泉治療したり、身体のケアには人一倍気を使うような人じゃないと無理だって。一流選手ほど、練習時間が長いし、ノートを何冊も持っていて勉強していたり、身体も道具も大切に扱うんだって」

「そうかもしれないね。夜遊びばかりしてたって、強くなれないだろうし」

「息抜きはするかもしれないけれど、程々だと思いつて言ってた。息抜きも大事なんだって。身体をきちんと休めてあげるのも大事だと言っていたし、気持ち切り替えられるような人のほうがいい」

て。野次は飛ばされるし、街を歩いていて試合の勝ち負けやフォームや采配などで、知ったかぶって色々言われるらしいの。そういうのもあしらわないといけないから大変なんだって」

「へえ、そういう話までしてくれたんだ？ 真珠が高校生だからかもね」

「え、どうして？」

「だって、真面目に聞きに行ってるから、相手も教えてくれるんだと思うよ。ミィハーな聞きたがりなだけだったら、そこまで教えてくれないよ」そう言われたら、教えてくれなかった人も多かったけれど、割と親切に教えてくれたかもしれないと考えていた。

「真珠って、真面目だよな」

「本を読んだって分からないもの。聞いたほうが早いじゃない」

「そういうところの行動は早いのに、何で恋愛になると躊躇するのか。神宮寺と仲直りしたの？」

「家まで行った」

「あ、何だ、行ったんだ？」

「さすがにあのままじゃ嫌だからね。だから、バイトの帰りに行った」

「それで？」

「牛丼で許してもらった」

「安上がりだなあ」

「大盛り2杯食べてた。男って良く食べるね」

「いいじゃないの、それぐらいで仲直りできるならね。神宮寺って意外と単純なのかも」

「でも、ほっとした」

「神宮寺とデートしてあげたら？」と聞かれてむせた。
「なに？」

「今度、一緒に勉強はするけどね」

「それはデートとは言わない」と呆れられてしまった。

夏の経験 1

「はあ」

「何度目だよ」神宮寺と一緒に映画を見た後に、食事していた。

「だって、疲れちゃったからね」

「映画で気分転換できただろ」

「途中の内容が」と思わず言ってしまった。

「占い内容と一緒にするなよ。でも、何で、真珠にまで頼るんだろ
うな」と神宮寺が呆れていた。

私がお店にいる日に来てくれた子は何人かいる。親が離婚しそう
だと言っていた子は、結局、母親が家を出て行ってしまい、今は家
事を自分でしないといけないとぼやいていた。

「姉が結婚するけれど、相手が怪しい人だから占って」と言われ
た子は、「相手を調べたほうが早い」と言ったら、「調べるのは悪
いかと思って」と言い出して、結局、占ったら、結婚は延期したほ
うがいいだろうとアドバイスしたら、後で、女性関係が発覚したら
しい。

でも、一番困ったのは、神宮寺のクラスの子が連れてきた子で、
男性問題で悩んでいるという相談だった。詳しく聞いてみると、相
手が誠実じゃないとか、話を聞いてくれないとか、煮え切らない態
度ではつきりしないとぼやいていたけれど、

「内緒にしていることがあるよね」と聞いたら、二人が顔を見合わせ
ていて、相談者の子がお腹を思わず見えて、

「子ども？」と聞いてしまった。カードに出ていたからだ。

「え、何で分かるの？」と聞かれたけれど、黙っていたら、二人が
ひそひそと話した後に、仕方なさそうに事情をポツリポツリと話し
始めた。街で出会った男性の家に何度も遊びに行き、そういう関係
になってしまい、子供ができてしまい、

「だから、どうしようか、迷って」と言われて、考えてしまった。

本当のことを言うべきだろうか、それとも……と考えていたら、家の奥で待っていた怜奈ちゃんが出てきて、

「あら、何だ、来てたんだ？」と、知り合いらしく相手の子に明るく声をかけていたけれど、様子に気づいて、

「ごめん」と奥に戻ろうとしていて、

「いいの、怜奈ちゃんも聞いて」とその子が言い出して驚いた。結局、相手の男性は逃げるだろう。子供のことはよく相談したほうがいいだろうとしか言えなかった。二人は浮かない顔をして帰って行った。神宮寺はその子の噂を知っていて、私のところに来たことも噂になっていたらしく聞かれてしまい、最初は黙っていたけれど、私の様子で気づかれてしまった。

夏の経験2

「困ったね。相談に乗れなかった」

「誰も乗れないだろう。本人が自分で考えて決めるしかないさ」
「でも」

「お前は学校が始まってでも知らん顔してろよ。特に噂好きの連中には」

「分かってる」

「流れるのは時間の問題だ。検査薬を買ってるところを知り合いに見られているからな」神宮寺はその噂を知り合いの知り合いから聞いたらしい。

「何だか、色々あるもんだね」映画の途中で子供ができて、どうしようと言う場面があつて、さすがにそのときは思い出してしまった。
「切り替えるよ。いつもならそうしてるだろ」

「だって、相談に乗って上げられなくて、力不足だよな」

「そうか？ 誰も言って上げられないだろ。よく話し合えと、他の人でも言うと思う。それから自分で結論を出すしかないしな」

「そうだね。占い師って、色々な引き出しを持ってないといけないね」

「引き出し？」

「そう、人生経験をいっぱい積んでいないと難しいかもね」

「そうか？ 話を聞いてもらえるだけでも違うだろ。占ってもらつても、最後は自分。相手の迷いに手を貸せても、そこまでだろ。決めるのは自分なんだから」

「そう言われても、気になるよ」

「切り替えるよ。他の相談者が来たら、どうするんだよ？」

「そうだったね、ごめん」

「学園祭、本当に行くのか？」と聞かれて、

「頼まれちゃったからね。それに宣伝しないとうちの店がマジでや

「はい」

「そうだったな」

「うちはプロキオンみたいに占い雑誌や女性誌にデカデカと大きな宣伝は載せられないからね。時々、小さく載せてもらってるけれど、それでもやりくりが大変」

「お母さんがカフェのほうをやったら違うだろ」

「卒業したら、それも考える。その前にお父さんを見つけないといけないけれど」

「やっぱり行くのか？」

「気になってるからね」

「宮城だったな？」と聞かれて、父の最期の滞在予定先を言われてうなずいた。

「俺も一緒に行つてやりたいけど」

「え、それはちよつと困るよ。いくら友達でも二人で旅行するの？」

「恋人になればいいだろ」と言われて、

「何度か他の子とデートしたんでしょ」と聞いてみた。噂は出ていた。怜奈ちゃんが教えてくれた。神宮寺は苦い顔をしていた。

「駄目だったよ」かなり経ってからそう言ったので、

「ごめん」と謝った。

夏の経験3

「友達の紹介でひと夏だけの恋だったな。恋でもないかもしれないけど」

「相手の子がかわいそうじゃないかな？」

「俺のほうがいいそうだ。デートに誘って断られて、あんなやつと」

「ごめんなさい」

「悪い。言わない約束だったな」神宮寺が謝ってくれたけれど、

「あれから、あいつから連絡は？」と聞かれて、連絡があっても呼び出しがあっても断ったと教えたら、

「それでいいさ。あいつは適当に遊んでおしまいだってさ。お前以外にもいくらでもいたらしい」

「実態は知ってるよ。何度か見かけたから」

「だったら、あまり深入りするなよ」

「分かってる。調子がいいだけの軽い男だって分かってるし」

「ふーん、そう言えば、何か、武道やってるのか？」

「さあ、聞くのを忘れてた」

「あいかわらずだなあ」

「そこまで興味ないから。あいつの占い師としての力量は知りたいし、参考にしたいだけだから」

「お前って、意外とそう言うところはちゃっかりしてるな」

「お姉ちゃんには負ける」

「結婚相手って見つかりそうか？」

「無理、みたいだね」

「料理や家事を覚えるところからしたほうがいいかもな」

「お母さんと同じことを言う」

「女性らしい雰囲気が出てくるかもしれないだろ。男は母親と同じような女性と結婚したがるって、親戚の人が言ってた」

「うつそだー」

「俺も良く知らない。ただ、俺も母親のような優しい料理上手な女性のほうが好み」

「へえ、そうなんだ？ 意外」

「学園祭が終わったら付き合えよ」と言われてむせた。

「考えとく」

「そうしろ。あいつだけはやめておけよ。絶対に」

「言われなくても、そうする。ちょっと苦手だからね。見下すタイプの友達と付き合ってるのが良く分からなくて」

「ふーん、あいつ、何考えてるんだろうな」と神宮寺が言ったので、やっぱりこっちが普通の感覚なんだろうなと改めて思った。

インスピレーション1

秋になり、神宮寺と仲直りした後、仕方なく東条さんと会うことにした。大学に連れて行かれて、

「あなたと歩くのは抵抗があるなあ」と言ったら、

「うれしくせに」と笑っていた。

「神宮寺が怒るからね」

「怒らせておけばいいだろ。恋人じゃないんだから」デートに誘われても断った理由を聞かれて、仕方なく神宮寺が怒っているからと説明をしたけれど、東条さんは今と同じことを電話でも言っていた。「でも、悪くてね。神宮寺は友達だから」

「友達ねえ。お前はそう思っても、向こうが辛いかな」

「そう言われても」

「それより、雪人さんとはうまくいったのか」と聞かれてにらんだ。「当たり前だ」

「あなたの占いって確かなの？」

「お客様は満足してくれる」

「当たらないこともあるでしょ」

「おれは総合で判断してるしね」

「総合って？」

「お前の性格も加えてある」

「勝手に加えないでよ」

「大事だろ。積極的な人と行動が中々起こせない人に掛ける言葉は違ってくるからね」

「ふーん」

「お前は使い分けてないだろ。そのまま言うタイプだ。直感占いな」

「いいじゃない、それも大事でしょ」

「相手に合わせて言葉を選んでいかないな。まだまだだね」

「ふん」とそっぽを向いた。

インスピレーション2

「浅木さんから、色々当日の内容を教えられて、一部見せてもらえない資料があつて、大丈夫かなと思つていたけれど、

「大丈夫だつて、なんとかなるつて」と言っている声が聞こえた。割と大雑把に決めてあるみたいで、変更が多いらしくて、

「当日、色々と変わってくるかもしれないから、覚悟してね」と浅木さんに言われた。

「どうしてですか？」

「時間が押したりあまつたりするから、それにあわせてスケジュールを変更するのよ。企画によつて時間が取られたりするからね。バタバタするかもしれないけれど、臨機応変に対応していかないかね」

「そうですか」

「人前で占うのは初めて？」

「小学校のときから、占いはやらされていましたけれど、それもクラス単位ぐらいですから」

「そう」

「大勢の前では無理かもしれない。集中力が途切れると駄目だから」

「集中力？」そばの人が驚いていたけれど、

「そうね、当日はうるさくなるだろうから、その辺も覚悟してね」と言われて、考えていた。浅木さんが色見本を私に合わせてくれて、衣装もそれなりにしたほうがいいと言つ意見があつてね。作つてもらうか買つてもらうか思案中よ」

「え、そうなんですか？」

「ショーアップしたいみたいだし」ちよつと不安……。

「そんな顔をしないで、大丈夫よ。司会進行に従つてやつてもらうだけだから。ただ、東条君はそういうのに慣れているからいいけど、あなたはステージとか立つた経験は？」

「一人ではないです」

「そうよね。せいぜい学芸会ぐらいよね」

「浅木さんは主役をやれそうですね」それぐらい綺麗だった。

「私は背が高かったから、キリンよ」と言われて哑然とした。

「綺麗なのに？」

「ありがとう。でも、真珠ちゃんみたいに背が低くめのほうがかわいいでしょ。男の人にとってはね」

「そうですか？」と驚いたけれど、笑っていただけだった。

インスピレーション3

打ち合わせが長引いて、東条さんが色々意見を言っていたので、飽きちゃったこともあって、その辺をぶらついていた。制服だから目立つので何人かがチラチラと見ていたけれど、そのうち、一人の女性が近づいてきた。私の前に立って、上から下まで見た後、見下す目で見て、

「尚毅って、趣味が悪くなったわね」と言っただけでむっとなって、「そうですか？」と言り返した。

「駄目ね。全然駄目。私と付き合っていたときよりはるかに落ちるわ」

「付き合っていた」と言っただけならまれたけれど、相手にしたくなくて逃げようとしたら、

「あいつが付き合ってる理由、知ってるの？」と聞かれて、

「どういう意味ですか？」と聞いた。

「言ってたわよ。インスピレーションが沸かないから、そういう女性と付き合いたいって、私は綺麗だから付き合いたみたいね、あなたとは違うのよ」と反り返って見下していた。うーん、こういうことを平気でするから嫌われたんだろうなと想像がついた。

「でも、ふってやったのよ」どう考えても東条さんのほうが飽きただけだなと思っていたら、

「ふん」私の顔を見てふてくされていた。

「自分には占い師として何かが足りない。そこが足りたら完璧なのにと言っていたわ」すごい自信。

「イマジネーションはあるけれど、インスピレーションが足りない。だったら、それが強い女性と付き合いたいってそう言っていたわ。あなたがそうみたいね」インスピレーション？

「靈感が強いつてこと？」

「ひらめきですってよ。あなた強いんでしょ。占いやってるらしい

わね」強いかなあ？ お母さんのほうが強い時が多く、私は他の占い師が強いかどうかはそこまで見抜けない。ただ、時々強いオーラと言つかパワーを持った人はいるので、そういうのは分かるし、波長が合うとか、そういうのは分かるかもしれないけれど……と考えていたら、

「ふーん、見込み違いなの？ そういう女性を探していたらしいわよ。何人がデートしていたみたいだしね」

「そうですか」

「だから、それが終わったら捨てられておしまいね」勝ち誇ったように言っているのが却って滑稽に見えた。だから、相手にしてもしょうがないと思い、

「教えてくださいますて、ありがとうございました」と言って逃げ出したら、

「絶対に振られるから。絶対に捨てられるわよ。絶対よ」何度も「絶対」と言っていて、そこまであいつに未練があるのか恨みがあるのか、私を巻き込まないでほしい……と思いながら足早に逃げ出した。

インスピレーション 4

さっきの出来事で何だか散歩するのも馬鹿らしくなり、戻ろうとしたら、

「今度はどれぐらい、もつのやら」と言われて、そちらを見たら、この間の感じの悪い人たちがそばにいて、座っていた。

「かわいくない女」と聞こえるように言った人もいたけれど、

「そうか？ 化粧したらそれなりにいけるかもよ」

「ないだろ」と勝手に言い合っていた。相当遊んでいそうだな。東条さんの類友だ。そこから逃げようとしたら、

「お前も直感女なんだろ？」と言われて、またか……と思ったけれど相手にしたくなくて行こうとしたら、

「インスピレーションを吸い取られて、ポイ」と小さい声が聞こえて、そっちを見たら嫌な顔で笑っていて、そこから走り出した。ああいうのは苦手だ。好きになれない。それにちよつと気分が悪くなった。波長が合わないからかもしれない。

東条さんに送ってもらうときに、さっき言われたことを確かめた。

「ああ、それね。そうだよ」簡単に肯定してくれた。

「付き合えばインスピレーションが増えるとも言っの」

「そうなるかもしれないだろ」

「そういうのって、強い人と付き合うより、自分で磨いていくものじゃないの？」

「修行しろって？」

「そうよ」

「俺にはその方法は合わないね」と簡単に言っていて、

「私はあなたの修行代わりの女なの？」

インスピレーション5

「別にいいだろ。俺と付き合えるし、デートもできるし、楽しいだろ」

「楽しくない」

「おまけに占い師としても育ててもらえる。一石二鳥だろ」

「それはあなただけ。二鳥もいらない」

「ふーん、そうか？ 俺は楽しいけど」

「あなたはそうかもしれないけど、あなたのインスピレーションのために利用されるのは嫌」

「いいだろ、別に」

「嫌です」

「わがままだなあ」

「どっちがよ。相手に好意を持って付き合うのなら分かるけれど、インスピレーションを補うためなんて、ふざけすぎてる」

「どこが？ 誰だって付き合うなら、見返りを求めるだろ。お前は俺に育ててもらえる。俺はお前からインスピレーションを吸収できるかもしれない」

「勝手よ。それはあなたはそういうことを望んでいるかもしれないけれど、代償で育ててもらいたくない」

「持ちつ持たれつだろ」

「どこがよ。あなたはそれでいいかもしれないけれど、付き合い合われるほうはいい迷惑よ。だって、インスピレーションが弱くなったら、『はい、おしまい』で、終わりの関係でしょ」

「まあ、確かに、そういう子もいたけれど、真珠はその辺、未知数だから長く付き合えそうだ」

「そういう問題じゃない。あなたの道楽に振り回されるのはたくさんよ。親切で教えてくれているのかと思ったら、ライバルに育てるため。デートに誘うのは女性として魅力があるわけじゃなくて、イ

ンスピレーションだけ。ふざけるにも程がある」

「そうか、別に普通だろ。お前のどこにそれほど魅力があるんだよ。女性として」

「バチン」と音がするぐらい東条さんの頬を叩いた。

「痛いだろ、何するんだよ」

「グーで殴ってやりたいくらいよ。運転中じゃなければね」

「お前、鏡を見るよ、俺とどこがつりあうって言っただよ。それぐらいしか取り得ないだろ」信号で止まったので、こぶしで東条さんの腕を思いっきり殴った。

「痛いだろ」と言っただけで、車から降りた。そこから、歩道まで歩いていたら、東条さんが運転席から降りていて、

「おい」と声をかけてきたけれど、歩道まで行ってから走り出した。「あいつ」東条さんは信号が変わるかもしれないので、車に乗り込んで、

「何を怒ってるんだか」と呆れていた。

ため息1

東条さんが後で電話を掛けてきたけれど、

「学園祭には出ません。お一人でどうぞ」と言っただとは、電話を拒否しておいた。そのために、家にまで来て、母が追い返してくれた。そのあと、電話がかかってきて、

「しつこいね、あなた」と言った。

「話をしてからだ」

「したくない」

「学園祭に出ないってどういうことだよ」

「失礼な男と一緒に出たくないだけ」

「今更言うなよ。動いているんだぞ」

「変更もいくらでもあるんですよ。だったら、出演を取り消してよ。無理」

「わがママを言うな」

「どっちがわがママよ。失礼な男。魅力のある女性を捕まえて、その人とどうぞ」

「お前、根に持ってるな」

「あそこまで言われて黙ってられない。あなたとは二度と会わない」と言って電話を切った。また、かけてきたけれど、ほっといた。

また、家にまで東条さんが来たら嫌だなと思っていたら、下校途中で東条さんから電話があり、仕方なく出た。

「話をしたいんだ」

「あなたの道楽には付き合えません。他の綺麗な女性と一緒にどうぞ。プロキオンの女性なら誰でもいいから。綺麗なんだからね」

「お前で宣伝してあるのに、今更、変更したらおかしくなるだろ」

「大丈夫でしょ。綺麗な女性なら男性が喜ぶ」

「女子高生占い師だからいいんだろ」

「呆れる人だね。絶対に出ません。家に来たら、車に塩を山盛りかけてやる」

「お前なあ。車に傷がついたらどうするんだよ」

「人のことを傷つけておいて、そんなことは言わないでよ」と怒鳴った。

「え？」東条さんがさすがに黙っていた。

「せっかく、いいところもあるって見直したこともあったけれど、あなたはやっぱり見かけどおりの薄っぺらい男よ。男として魅力なんて全然ないわ。人のことを平気で傷つけるろくでなしよ。たとえ、条件がそろっていても私は選ばない。雪人さんのことをとかく言えないわよ。相手のことなんてこれっぽちも考えてないわ。だから、女性だつてすぐに離れていくのよ」

「それは、……違う」東条さんの声が小さかった。

「そうでしょ。誰かあなたと会えなくなつた後に、あなたとまた付き合いたいと言つてきたことがあるの？」

「何度かしつこくされたけれど」

「それはあなたの表面だけ見てるからでしょ。お金目当て、顔がいい男目当ての人以外でいるの？」と聞いたら黙ってしまった。

「母が言つたことが今なら分かる。あなたとは関わつてはいけなかつて」

「昔、親父に捨てられたから怒つてるだけだろ」

「いいえ、違うと思う」

「何で、そう言い切れる？」

「あなたを見ていたら父親に会わなくても分かるわよ。そっくりなんでしょうね。とにかく、絶対に出不いからね、二度と電話を掛けてこないで。あなたになんて会いたくもない。さようなら」と言つて電話を切った。

「え、さようなら？」東条さんがそう言っているのは切れた後なので聞こえなかった。

ため息2

ため息をついている東条さんを見て、浅木さんが近づいて隣に座った。

「元気がないわね」

「ちよつとあつてね」

「あら、珍しい。『君がデートしてくれたら、治るよ』って言わないのね」

「言えなくなつた」

「そう。それより、大丈夫なの？」

「なにが？」

「占いよ。プロキオンの女性に変更するのは、私も反対よ。プロの占い師より真珠ちゃんのほうがいいと思うわ」

「あいつらが反対なのは女子高生じゃないからだろ。美人を連れてきたんだからいいじゃないか」

「でも、乗り気だったのは原西君だけね」浅木さんが笑った。

「あいつは年上だろうと女に見境がないからな」

「人のことは言えないでしょう。何かあつたの？ 真珠ちゃんと喧嘩でもした？」

「怒らせた」

「そう」

「初めてだよ。あそこまで怒られたの」

「あなたは上手にあしらってきただけよ。裏では怒っていた人も大勢いるかもしれないわね」

「そんなはずはない」

「真珠ちゃんも素直に反応が出る子だからね。怒っていても、尚毅には伝えない人もいたでしょうね」浅木さんが前も向いたまま言うて、

「お前も怒ってたのか？」東条さんが軽く聞いていた。

「ため息ついてる尚毅なんて、初めて見たわ」

「占いができないからな」

「あら、大変じゃない？」

「それでも予約が入っているからやってるけど、本当はやめたいくらいだ。どうしても気が乗らなくて」

「そう。珍しいわね。あなたは落ち込むことなんて、ほとんど見たことがないわ」

「俺もそう思ってたよ。あるときから、やめたから」

「あるとき？」浅木さんが聞き返した。

「俺もやめようかな」

「あら、なにを？」

「学園祭。俺も占えそうもないよ。あの人とやっても、何だかやる気が出なくて」

「あら、美人が好きだったんじゃないの？」

「ライバルじゃないからだろうな」

「それだけ？」浅木さんが東条さんを見たけれど、東条さんはため息をついていた。

ため息3

「なんだか、変なんだよ」東条さんの友達の若田さんは本を読んでいて、東条さんをチラツと見ただけだった。

「なんだか、おかしいんだ」

「どうかしたの？」

「耳鳴りが聞こえる」

「耳鼻科に行ってきたら？」

「そうじゃない。あの言葉が耳に残っていて」

「それは耳じゃなくて頭に残ってるんだろう？」

「あいつに言われたことが聞こえる」

「あいつって？」

「真珠」

「ああ、占い師のお嬢さんだったっけ？」

「おかしいんだ。何度も聞こえるんだよ」

「それは重症だね」

「それに、何だか、こう、この辺りが」と、東条さんが胸の辺りに手を置いていて、

「ふーん、胸焼け？」と聞かれて、

「そうじゃなくて、酒じゃなくて、気分が何だか落ち着かないんだよ」

「珍しいな。お前はいつも明るく気にしない性質だったのに」

「分からない。何だか、この辺りに空洞があって」と手で円を作って見せていた。

「空洞？」若田さんが聞き返した。

「おかしい、どうしたんだろうな、俺」と東条さんが言ったら、若田さんが笑った。

「笑い事じゃないよ。こんなこと今までなかったのに」

「誰でも一度は経験することだと思うけど」

「誰でも？」

「そう。でも、珍しいね。尚毅はとつくの昔に経験していたと思っ
たよ。あれだけ女の子と付き合ってきたのにね」

「どういう意味だよ？ 大体、俺はその辺のやつらが経験したと思
えることはしてきている。そんなことは言っなよ」

「自信満々だね」と若田さんが笑った。

「でも、そうだね。多分、付き合う相手が変わってきたから、分か
るようになったのかもしれないね」

「どういう意味だよ？」

「そこにあるのが何なのか、尚毅なら分かると思うけど、あれだけ
占いをしてきたんだし」

「見えないんだ。自分のことなのに占いもできない。どこか空虚で
乾いた感覚が残って、相手の立場になって占えなくなってる」

「重症だな。でも、それに効く薬はたった一つしかないよ」

「薬？」

「そう、彼女に会ってくればいいんだよ」若田さんが笑ったら、東
条さんが、

「もう、会ってくれそうもないよ」と寂しそうに言った。

「自分でも分かっているはずだよ。その当てはまるパズルのピース
はたった一つしかないんだよ。彼女しかね」若田さんに言われて、
東条さんが考えるようにしていた。

ため息4

東条さんが学校に来てしまい、先生が近くにいたために、仕方なく、東条さんのところに行った。

「来てくれたんだな」

「行こう。ここだと人目があるから」と言ったら、

「そうだな」と言った顔がかなり元気がなかった。

「どうかしたの？ 自信満々だった人が変だね」

「占いができない」と言ったので、噴出した。

「ありえないでしょ」

「声が聞こえてくるから」

「声って？」

「『さようなら』って」

「誰が言ったの？」

「お前」と言われて考えてしまった。この人は今まで、そういう言葉言われたことがないのかもしれない。

「あなたって、自信満々の塊みたいな人だと思ってたけれど、意外と打たれ弱かったね」

「お前にだけは言われたくない」

「こっちも同じよ」とそっぽを向いた。

ケーキセットを奢ってもらいながら、カフェの個室で話をしていった。このカフェは区切りがいっぱいあって、個室が多くなっている。

「謝るよ」何度目かのその言葉を、しらけた顔で見たら、

「冷たい視線で見るなよ」

「魅力がないもので」

「完全に根に持ってるだろ」

「当たり前でしょ。好みじゃないとか言われるなら分かるけど、魅

力がないって聞き捨てならない。たとえば思っただけでも口に出さなくてもいいでしょ。こつちだって思っただけでもそこまで言わないわよ。相手が失礼な人じゃない限りね」

「ごめん」珍しく素直に謝ってきた。

「どうかしたの？ 自信満々の服はどこかに脱いできた？」

「俺、無神経だったかもしれないな」

「今更、言わないでしょ」

「浅木に怒られた」

「なんて？」

「気づいてないだけだつてさ。俺には何も言わずにそばから離れる人も多いつて言つてた。はっきり嫌いな部分を言葉に出してから別れるよりは、そつとしておきたい人もいるから、気づいてないだけらしい」

「浅木さんもそう思つてたんじゃない」

「希恵きえはそういうところで、言わない女だから」

「呼び捨てにしてるんだ？」

「時々ね。ただ、返事してくれない時があるけど」

「だったら、嫌なんだろうね。未練もなさそうね。他に好きな人がいるだろうし」

「噂を聞かないぞ」

「大学の人に内緒にしてるだけでしょ。社会人かも知れないね。大人っぽい人だし、美人だから、誰かいるに決まってるでしょ。あなたとだけ付き合ったとは、とても思えないからね」

「失礼だな」

「人には散々言っておいて、自分が言われると怒るの？」

「そうだったな。悪かった。謝るよ」

「ふーん」

「けんかしたままは嫌だし、お前がそばにいないと落ち着かないし」

「怒らせておいて、それは無理でしょ。そばになんていたくない」

「無理だったんだよ」

「
なにが？」

ため息5

「占いのリハーサルをした」

「ふーん、それで？ さぞかしてきたんでしょ」

「逆だよ。俺ができなかった」

「なんで？」

「占えなかった。どうしても」

「どうしてよ？」

「何だか気が乗らなくて、途中でやめた。相手の女性には謝ったけれど」

「相手は怒ったでしょ。せっかくリハーサルしてるのにプロだったら占えて怒りそう。日頃、自信満々で言いたいことを言ってるのにね」

「親父の子供だから、表立って言うわけないだろ。参加するのは楽しそうだとは言っていたけれど、俺がどうしても駄目だ。彼女とは波長が合わない」と言ったので驚いた。

「波長？」

「駄目なんだよ、どうしても」

「綺麗な人なんでしょ」

「学園祭向けにお祭り好きの派手好きのプロキオンの女性占い師に頼んだけれど、何だか駄目だよ。ショー向きだとは思う。でも、俺と相性が合わない」

「じゃあ、他の人に頼めば」

「無理だよ。他の人でも駄目だと思う。それは分かるから」

「何が分かるの？」

「お前じゃないと無理だと分かっているからだよ」と言い切られて、さすがに恥ずかしくなった。声が大きかったので、

「別れ話のもつれみたいだよ」と言う声が聞こえて、そっちをみたら、学生らしい女の子がここの個室を覗いていて、私と目が合っ

から、慌てて逃げていった。

「別れ話にされちゃってるね」

「いいだろ。本当のことだ」

「どこがよ」

「お前に振られてから元気がなくなっただし」

「あなたが？」

「この辺に、穴が開いているような気がして」と胸の辺りを指差して、飲んでいた紅茶を噴出しそうになった。

「考えておいてくれよ」家まで送ってもらってから、改めて学園祭に出るかどうかを聞かれて、返事ができなくて、

「お前と一緒にいると楽しかったよ。お前に出会えてうれしかった。それだけは本当だ」東条さんが珍しく真面目な顔をして言っただけで、辛くて顔を背けた。

「ごめん」謝ってくれたけれど、頭を下げて、車を降りた。

浅木さんの話1

「あれ、誰だろうな？ 声をかけて来ようか？」と男子が言い合っているそばを通り過ぎながら、校門に行ったら、

「真珠ちゃん」と呼ばれてそちらを見た。

「知ってる人？」友達に聞かれたけれど、

「ごめん」と言って浅木さんのそばに行った。

「元気そうね」

「なんですか？」

「ちよつと、頼みがあつて」

「学園祭のことなら」と言いかけたら、

「東条君のこともね」と微笑んでいて、

「私は、彼のそばにいたくないから」

「そう？ 仲は良かったでしょう？」

「いえ、全然」と言い合っていたら、男子が寄ってきた。

「おい、紹介しろよ」と言われてにらんだ。

「美人と知り合いなんて、教えておけよ」男子があつという間にそばを取り囲んで浅木さんに質問していた。学校名、名前に、携帯番号まで聞き出そうとしていて、

「呆れるなあ」と言っただけれど、男子は全然聞いてもいなくて、

「月野に御用ですか？」

「占いしかできない女ですけれど」と言い合っていて、

「占いを頼みたいと思つてね。学園祭で頼んでいたのに断られてしまつて」浅木さんが教えていて、言わなくてもいいことを、それを言っただけで……、

「それはいけない。月野、わがままだぞ」

「そうだ、美人の頼みを断るなんて、生意気だな」

「お仕置きしてやりますから」案の定、勝手なことを男子が言い合っていて、どう見ても、美人の前でいい格好をしたいだけの発言と

しか思えなかった。

「出る」と男子が命令してきて、そのうち、何人かが集まってきた。
「でーろ、でーろ」と「出る」コールをやりだして、うっとうしく
なつて、

「はいはい、分かりました」と答えたら拍手に変わっていた。お祭り好きなんだから……とにらんだけれど、勝手に盛り上がっていて、
こちらの様子には気づいていなかった。

浅木さんの話2

学校の近くのコーヒー専門店に入ってから、

「楽しそうな学校ね」と言われてしまい、

「クラスによつて違います。あいつら、行事で異様に張り切るんですよ。テストでは張り切りません」

「そうなんだ」と浅木さんが笑っていて、

「東条さんどうして付き合つたんですか？ 浅木さんみたいに綺麗で聡明な人が付き合うとは思えなくて」と言つたら、ちよつと微笑んでいた。

「ごめんなさい。プライベートなことなのに」

「いいのよ。何人かに同じことを聞かれたからね。私もちよつと色々あつた時期だつたし、入学当初で彼の性格も良く分かつてなかったの。愛想が良くて、女子学生にも人気があつたからね」

「見た目はいいですからね」

「でも、彼とはすぐに付き合いをやめたの」

「そうでしょうね。浅木さんはもつたないです」

「違うわ。性格が合わないと気づいたのもあるけれど、私が駄目だったの」

「どうして？」

「そうね、色々理由はあると思う。私は彼氏と別れたばかりで、寂しかったのもあつたから気分転換のつもりで付き合つてしまったのね。東条君は明るくて優しい人だったから」

「美人以外には冷たいですよ？」

「そう？ 真珠ちゃんとは違つて見えたけれど」

「どこがですか？ 散々、女性をもてあそんできて、私は子ども扱いなだけですよ」

「今まで、何度か学校には連れてきていたし、目撃されていた女性はいたけれど、でもね、違つてたわよ」

「どこが？」

「相手と言い合いはしてなかったから」

「喧嘩してるだけです」

「彼の場合は女性にそこまでのめり込まないところがある。軽い付き合いで止めておくの。けんかも、もちろんしない。将来お客様になるかもしれないから、怒らせることはしたくないと、言っていたのを聞いたことがあるわ」

「同業者の娘だから関係ないでしょ」

「きつと、初めてだったのよ。本気でけんかしたのは」

「見下す発言ばかりするからですよ」

「でも、ため息ばかりついていたわよ」と言われて、驚いた。

浅木さんの話3

「元気がなくなつて、みんなが心配していたの。突然、真珠ちゃんからプロキオンの占い師に変更を申し出て、ほぼ全員が反対した。真珠ちゃんのほうがいいからと」

「プロの女性のほうがいいじゃないですか」

「あら、学園祭だもの。その辺は手作り感が出たほうが面白いですよ。出来上がったプロの女性より女子高生のほうがかわいいし」

「そういうことを言われても」

「でも、尚毅は様子が変わった。落ち込んでいて、ため息ばかり。挙句がりハ―サルのときに突然、『やめる』と言い出して、みんなが驚いたけれど、あの尚毅が、『どうしてもできない』と、頭を下げていたわ」

「そう言われても」

「あなたのことが頭から離れない限り無理でしょうね」

「どういう意味ですか？」

「尚毅は恋をしてるのよ」と言われて、飲もうとして取り上げたカップを慌てておいた。こぼしそうだったからだ。

「あの男が恋？ 『自分に』 じゃないですか？」 あいつは『自分が一番、自分大好き』 タイプだから、他の女性を自分以上に好きになれるとは思えなくて、つい、そう言ってしまった。

「確かにナルシスト気味だとは思っだけれど、尚毅は本気で誰とも付き合つたことがないかもしれないわね。どこか冷めていると言っか、本気になれないというか」

「知りませんよ。女性と楽しそうに一緒にいるのしか見てないし」

「短期ばかりよ。それほど長くないみたいね。相手が本気になる前で止めているのかも」

「インスピレーションが減ったから」

「ああ、それは言っていたみたいね。そういう女性を探していると」

「失礼ですよね」

「そう？ それはあると思うわよ。その部分に惹かれるのは占い師なのだから、気になるのは当然でしょうね」

「そうですか？ 見た目とか性格が二の次なんて、ひどすぎるでしょう？」

「違うと思うわ。そういうのが合わない人はある程度でやめておくみたいだし。真珠ちゃんとは長く続くだろうなと思っていたから」

「遊びの女性と同じにされたくないし」

「あなたには本気だと思うけれど」

「インスピレーションだけと言うのは、困ります」

「そうね。確かにそれだけならちよつと面白くないかもしれないわね。ただ、それ以外の部分でも惹かれているのよ。自分でも気づいてなかったんでしょね」

「惹かれていませんよ」

「ため息をついたことのない人が、ああいう顔をするって言うのは、そういうことだと思うけれど」

「そう言われても」

「尚毅は不器用なのかもしれないわね」

「器用に遊んでいるじゃないですか。多くの女性とデートして」

「デートの数は多いかもしれない。でも、本気になって付き合いたいと思ったことは一度もないのかもね。私のときも後腐れなかったみたいだし」

「そうですか？ プライドが邪魔をして追いかけられなかっただけでしょ？」

「プライドが崩れてきているのかもね」と言われて、学校に何度も来ていたあいつを思い出した。

「怒っているかもしれないけれど、もう一度考え直してもらえないかしら。せめて、学園祭は楽しいものにしたいから。このままだと企画が壊れるわ。お守りも売れなくなると困るしね」

「それがありましたね」

「だから、お願い」と頭を下げられて、私もため息をついた。

浅木さんの話4

しばらく考えた後に、東条さんに電話をした。学園祭に出ることを渋々告げたら、

「ありがとう」と素直に言ってくれて、

「珍しいね」と思わず言ってしまった。

「お前が出てくれることがうれしいから」

「自分の引き立て役としてちょうどいいからでしょ、プロが相手だと自分が目立たないし」

「いや、きつとお前と一緒にじゃないと輝けないよ」と訳の分からないことを言っていた。

「やっぱり出るのは嫌かもしれないな」と怜奈ちゃんにぼやいたら、「約束は守らないとね。それで宣伝をしているのなら、楽しみにしている人もいるかもしれないよ。それに、変更があるとしらけるからね。真珠の評判が悪くなっても困るでしょ。嫌でも出ておいたほうが今後のためよ」と言い切られてしまった。

「すっかりしてるね」

「お店のこともあるでしょう？ お母さんにも迷惑を掛けるよ。だから、手を抜かないでしっかりやらないと。そこはそこ、占いは占いでね。一緒に出る人が嫌いだからって、手を抜いたら、お客が嫌がるよ。お客様が喜んでくれればいいじゃない」

「今までだったら、そうやって割り切れるけれど、あいつに利用された後だと、抵抗が」

「実際にそういう人にだまされたりする子だっと思って多いと思うけど、夏休みに出会った人にだまされた子もいるみたいだしね。名前も性格も知らないうちはそこまで気を許しちゃ駄目だけどね」

「気を許したわけじゃないけど、いつの間にか入り込んでくるんだよね、あの人」

「だったら、あの人も同じかもね。何度も真珠に会いに来るぐらいなら、熱心ではあると思うけど。いいじゃない、仕事上の付き合いだと割り切れば。お店に見習い占い師としてデビューしている以上は責任が出てくるから、好き嫌いは言ってられないでしょ」

「怜奈ちゃん、すっかりしてる。怜奈ちゃんみたいな子なら、芸能界でも通用しそうだね」

「無理だよ。私、ああいうのは苦手。媚売るのは下手だし、自分を売り込むなんてできそうもないし、ミーハーなところもないしね」
「怜奈ちゃんは大人っぽいところがあるから、付き合うのは年上が多い。」

「経験積まないと無理かなあ？ 恋愛相談はどうしても苦手」

「今までもあったでしょ？」

「部活でのごたごたとか、親とけんかしたとか、友達と仲直りしたって言うのは多かったけれど、復縁とか、二股とか、そういうのがいまいち駄目」

「神宮寺と一回デートしただけでは難しいかもね。東条さんはどうだった？」

「男として見られないし」

「そう？ いい人じゃない。結構親切だとは思っよ」

「だって、それはライバルを育てて、自分のために」

「それもあるかもしれないけれど、わざわざテレビ局に行ったり、自分の占いを見せたり、アドバイスしてくれたり、そこまで親切にしたのは、多分、違う理由だと思う。打算だけなら、アドバイス程度で止めるでしょ。真珠が反対にライバルになりそうな子に、そこまで教えられる？」と聞かれて考えていた。私はライバルになりそうな子で、相手が嫌がらせなどせずに正々堂々と戦うタイプで好敵手になりそうな子なら教えるかもしれないと思った。でも、相手が嫌がらせをして足を引っ張ったり、見下したりするような好きになれない子は教えないかもしれないと思った。

「相手が好きじゃなければ無理かも」

「でしょ。だから、東条さんも打算だけじゃないと思う。口に出して言っている部分だけ見たって、その人の全部なんて分からないよ。いいところもあるけど、悪いところもあるだろうし、トータルで考えて好きになれるかどうかで判断したら」

「欠点も飲み込める人なら許せてこと？」

「誰でもいくつか未熟な部分、どうしようもない部分ってあるでしょ。完璧な人なんていないし」

「雪人さんは完璧だよ」

「それはまだ、相手を知らないだけでしょ。意外とどうしようもない部分が見えるかもよ」なさそうだな。頭は良くて、感情をそのまま表に出さないだけで、とても優しい人に見える。私の顔色を見ながら、

「駄目だね。のぼせ上がってる。相手が好きだから、見えてないだけかもよ」と怜奈ちゃんが呆れていて、

「でも、全部素敵だよ」

「真珠、東条さんで懲りたでしょ。全てが見えてから、それでも好きだと思っなら本物かもね」

「そう言われても」

「デートに誘えばいいじゃない」

「学園祭が終わったらそうする」

「そういうことを言っているうちに時間が過ぎるよ」と笑われてしまった。

魔法が1

東条さんに呼び出されて、一緒に学校に行った。打ち合わせも大詰めで、怒鳴りあっている人たちもいたけれど、私は衣装合わせをされていた。浅木さんがメイクの色を決めていて、

「照明もあるから、色はこっちのほうが悪さそうね」

「こっちのほうが合わないか？」

「髪は短いほうがかわいいでしょ」

「ロングヘアのほうが神秘的だろ」勝手に色々と合わせてくる。

髪もカットはせずに、かつらがいくつか用意してあって、

「安物だから、衣装と合わないかな？」と女性が浅木さんに聞いていた。衣装は結局、用意してくれるものを着ることになった。黒い物にレースがついていて、大人っぽいものだったけれど、スカートの丈を短くしようと言い出して、

「それ、着るんですか？」と思わず聞いてしまった。

「あら、かわいいと思うわ。若い女の子の感じを出すにはそのほうがいいわね。衣装をあてた後に、かつらは、色がついたものを合わせていたけれど、

「茶色と金髪とどっちがいいかな？」

「金髪だとコスプレっぽいから、茶髪にしておけよ」

「衣装が黒めだから、髪は明るめにしておきましょう」と浅木さんが言って、メイクを行うために、移動した。

「落ち着かないでしょ。毎年、これなのよ」

「大変そうですね。うちは予算も限られているし、盛り上がりがないクラスだと、時間も掛からなくて」

「そう？　うちはそれなりにがんばるわよ。楽しんでもらいたいからね」浅木さんがメイクの仕上げにつけまつげまでつけて、アイシヤドウも濃いめにつけているみたいで、

「ちよっと、濃くないですか？」と驚いた。

「舞台上上がるから、これぐらいじゃないと目が開いてないように見えるからね」

「でも」

「大丈夫よ。お祭りだから、浮かないわよ」

「東条さんもやるんですか？」

「彼はタキシードぐらいでしょうね」

「タキシード？ 占い師なのに？」

魔法が2

「シルクハットとタキシードに決まっていたわよ」

「鳩を出しそう」

「それも提案で出ていたわね」

「派手好きだなあ」

「知り合いのマジシャンに衣装を借りたみたいよ。この辺の衣装もほとんどがその人から借りられたからね。彼を加えるのはそういう理由だし」

「そういう理由？」

「彼はつてをいっぱい持っているからよ。それで頼まれることも多いわ。それだけつながりがいっぱいあるからね」

「そうですか？」

「真珠ちゃんは顔が小さいから、かわいく仕上げないと」

「かわいくは無理です。友達が化粧しなくてもかわいくて、声をかけられてばかりいるけれど、私は声を掛けられた事がない」

「声を掛けやすいかわいさとは違うかもね。真珠ちゃんはもっと神秘的な感じがするわ。目が印象的だから。軽い男性は声はかけないかもね」

「声の掛けやすさって重要ですか？」

「そういう男性が好きならいいでしょうけれど、そうじゃないですよ」

「浅木さんはいったい声を掛けられるでしょう？」と言ったら、近くにいた人が笑った。

「浅木ちゃんは男性が気軽に声なんて掛けられないよ。誰か恋人がいるだろうと思って躊躇するタイプ」と教えてくれて、浅木さんを見た。確かに、軽い男が気軽に声を掛けられるような人じゃないかも。

「真珠ちゃんは、きっと真面目な人が好きでしょう？ だったら、

軽く声を掛けられなくてもいいと思うわよ」

「そうですね」確かにそれはそうだ。雪人さんが気軽に女性に声をかけてる姿なんて想像もできない。

「へえ、かわいい」そばに女性が来て覗き込んできて、

「化粧栄えるね。顔が小さいし、目が印象的だから、化粧をするところの方が更に際立つ感じだね。大人になったら、化粧したほうがいいよ、かわいいから」そうかなあ？ お母さんはそうだけど、私はそうじゃない気がするなあ……と考えていたら、

「おーい、できたか？」と聞かれて、

「OKよ」浅木さんがメイクを終えた。衣装を持ってきてくれて、着替えるために別室に移動して、ふわふわカールの茶髪のかつらもつけていた。鏡がなかったので、様子が分からなくて、途中で鏡のある場所に移動してから、驚いた。

「えー！」自分で思わず声が出た。確かに、別人だ。化粧なんてしたことはないから、かなり驚いた。

「かわいいわね」そばにいた人が何人かに声を掛けられて、素直にうれしくなった。結構、いけるかも。

「どうだ？ できたか？」清水さんが見に来て、

「お、すご、さすが、姫」と言っていた。

魔法が3

「尚毅、お前の彼女、かわいくなつたぞ」何人かが見に来てくれて、そう言い出して、「彼女じゃない」と訂正したかったけれど、それより鏡を何度も確かめてしまった。魔法が解けたらどうしようと、思つてしまつぐらいうれしかった。

「ん？ 今、行くよ」と東条さんの声が聞こえた。

「あつちに移動して」と促されて、このまま鏡を見ていたかったけれど、移動した。

「この辺に立つて」と言われて、机と椅子があるところから少し離れたところで待機させられたら、誰かがそばに来た。

「衣装が小さかった。足の長さが足りないんだよ」と東条さんが隣で言つて、

「足が短いの？」と聞いたら、

「馬鹿、反対だよ。俺の足が長くて」と言つた後に私を見て、驚いた顔をして、じつと見てきた。

「え、変？」

「いや、すごく……綺麗だ」と言つたので、

「この間と言つていることが逆でしょ」とにらんだ。

「せっかく、綺麗に仕上げてもらつて態度も変えるよ。中身は同じじゃないか」

「あなたも言葉使いを変えてよ。少しおとなしくなつたと思ったら、もう復活してるじゃない」

「かわいいのは顔だけなのか？ でも、綺麗だ」としみじみと言つていた。

「はいはい、今更言われても、魅力がないもので」

「この間のは悪かったよ。綺麗だよ」と耳元で小声で言われて、「今更、言われてもうれしくないし」と言いながら、ちよつとうれ

しかった。さつきまで、気まづくて、うまく話せなかったけれど、

衣装に着替えてからは、また、何度か言い合いになった。立ち位置や移動方法とかを話し合って、公開占いなので、マイクを使って、どういう風に説明するかも、東条さんが提案していたけれど、私も何度か口を挟んだ。

「それだと面白くないだろ」

「見世物にしても限度があるの」

「あいかわらずだな、前途多難だよな。また、喧嘩するなよ」と注意を受けたけれど、椅子に座って、実際にやってみて、それでいくつかに注意を受けた。お店でやるのとは勝手が違うので、戸惑ったけれど、

「実際に、二人で練習しておいて」と清水さんが別の場所の確認に移動してしまった。

「実際と言われても、誰か実験台」と東条さんが頼んでいて、

「ハーイ、お願い」と調子がよさそうな女子学生がすぐに手を挙げて、目の前の椅子に座ったけれど、

「ここは功労者だろ。メイクを仕上げた姫でいいよ」と言われて、何人かがうなずいていて、

「えー、占ってもらいたい。この間、素敵な人を見つけて」と女の子がぼやいていたけれど、浅木さんのために場所をどかされていた。浅木さんが笑いながら、椅子に座らされていて、

「美人だからってひいきすぎ」とさっきの女性がぼやいたら、

「お前、尚毅に何度、タダで占ってもらったんだよ」と男子学生に言われたら、途端に逃げ出していた。

魔法が4

「あいつ、あればっか」「だから、嫌だよなあ」と男子学生が言い合っていて、色々複雑そうと思いながら、浅木さんを見た。

「どうぞ」浅木さんが言っつて、東条さんが先に占った。浅木さんの仕事や恋愛について、

「そうだな、しっかりしてるからそれなりにやっていけるな……、あ、でも、男運が良くないな。これが足を引っ張ってる」「東条さんが色々と説明していて、

「当っているような気もするわね」浅木さんが東条さんと、どう説明したらいいかを二人で話し合っていて、私の番になった。

「そうですね、あ、色々あるかも。仕事の方はそれなりにやっていけると思います。上司と時間をかけて話し合えば、うまくいくと思います。恋愛は、えっと、あ」と言っつてから、浅木さんを見た、

「なにかしら？」優しく聞かれて、

「何度か浮気をされたことは」と言っつたら驚いていた。

「ごめんなさい」

「いえ、いいのよ。さすがね」と言われてしまい、

「多分、そういうことが続くと思います」そう言っつたら、浅木さんが考えるような顔をした。

「かなり悩むと思います、結論は先延ばししても同じ結果になるでしょう。どこかで区切りをつけないと」

「そう……、そうなのね」

「お前、それだと暗い」東条さんに怒られた。

「そういう部分は人前でやるんだから、正直に言っつな」

「いいのよ、今は練習ですものね。ただ、確かにそれだと会場はしられてしまうわ。たとえ、当っつていたとしても、会場の雰囲気を考えて言葉を変えてもらえるかな？」と浅木さんに言われて、言い方を変えた。

「過去は男性に振り回されてしまったことがある、現在も迷いがあるでいいですか？」

「そうね」

「未来は」と言ってから迷った。「悩んだとしても前向きな結論を出しましょう。で、いいでしょうか？」と聞いた。

「そうね、そのほうがいいかもしれないわね」と浅木さんがうなずいた。

「それじゃあ、お前は怒られるだろうな。お前、何度か絶対に怒られたはずだ。直接じゃなくて、裏で」と言われて東条さんをにらんだ。

「当たり前だ。お前も無神経だな。人前で浮気されたとか間違っても言うなよ」

「ごめん、いつもと同じ要領で言っちゃったから」

「人が大勢いるんだから、相手の面子をつぶすようなことだけは絶対に言うな。それから、結論は前向きに明るいものに変える。言葉の選び方もできるだけ優しくやわらかいものに変える」東条さんに命令されて、

「ごめん、でも、命令口調はやめてよ」

「お前が未熟すぎるんだよ」と言い合っていたら、

「二人ともそれぐらいで」と浅木さんに止められたけれど、なぜか浮かない顔をしていた。

ジュースが用意されていて、

「どうぞ、疲れたでしょ」と女の人に言われて、そちらのテーブルに移動した。衣装を脱いでかつらははずしたけれど、化粧を落とすのはもったいなくて、

「家でお母さんに見せる」と言ったら笑われてしまった。テーブルに着いて、置いてあったジュースを飲んで、疲れもあったのか、なぜかいい気分になって、

「これ、おいしい」とそこにあったジュースを飲み干した。

敵の本拠地 1

誰かが抱きかかえて運んでくれているときに、目を覚まして、
「あれ？」と言っていたら、

「もう少し寝ている」と優しい声がした。

「ありがとう」と言っただけ、寝てしまった。

「いい気分」

「お前はそうだろうけど、俺は重い」東条さんが言っているのは気づかなかった。

車に着いて、東条さんがシートに運んでくれて、

「重かった」と言われても、気づかずに、

「痛い」と言ったら、

「運んでやって、文句を言うな」と小言を言われても気づかずに、
「うーん」と言っただけ、うとうとしていた。

「少し飲んでもジュースと間違えて飲み干すところが、子供だな、お前」と言われても、寝ていて、

「せつかくかわいい顔になっても、中身はやっぱり子供だよな」と言いながら運転席に座って、車をスタートさせてから、

「お前、お母さんに似てるよな」東条さんが独り言を言った。しばらくラジオが小さく掛かった状態で運転を続けていて、

「お父さん、……帰ってきて」と寝言を言ったら、東条さんがこちらを見た。

「ごめんね、お父さん」

「お前……」

「あれ、ここ？」と聞いた。目を覚まして、知らない場所にいたので、何が起こったんだろうと思ひながら、

「俺の家だよ」と東条さんに言われて辺りを見回した。

「げ、敵の本拠地」

「すごい言い方だな」

「か、帰る。襲われたら困る」

「襲つかよ。本命にはしない」

「意味不明」

「さすがに本命には簡単にしないよ、俺は」

「ふーん、今までも散々遊んできたから、無理でしょ」

「説明しただろ、それより、お前」と私を見ていて、

「なに？」と聞いた。

「お前のち」と言いかけてから、

「お酒は抜けたのか？」と聞かれて、

「お酒？」と驚いた。

「お前の飲んだのはジュースじゃなくて、お酒が入ったジュース。

しかも女子学生に飲ませていたずらしようとしたやつらが用意したものを間違って飲んだんだよ」

「呆れる。何で、そんな変なことをしてるのよ」(*未成年は間違っても飲まないでね)

「そういうやつらもいるよ。一部だけ悪乗りしすぎる連中もいるさ。自分たちもお酒をかなり飲んだ後にやっみたいだよ。お酒が入ると理性がぶっ飛ぶから。後で清水がすごく怒ってた。でも、懲りてないけどな。あれはまたやるな」

「はあ」と息を吐いて確かめた。

「お酒臭いかも。どうしよう、親に怒られちゃう」

「厳しいんだな」

「未成年なら当たり前」

「そう思ってこっちに連れてきた。さすがにそのまま帰すわけに行かないからな」

「困った。どうしよう。連絡しないと」

「連絡しておいた。さすがに高校生が遅くなるとうるさいと困るかな」

「あなたのことは毛嫌いしてるから、怒らなかった？」

「怒ってたよ。親父と区別してくれたらいいのに。元カノだというのに。いい加減忘れたらいいのにな」

「それって、決定？」

「お前もそう思ってるだろ」と聞かれて黙った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2027j/>

Fortune-teller

2011年11月29日19時54分発行